文藝



第二百廿七號

女鑑第貳百貳拾七號

目録

定價

一冊 金拾錢

六冊半年分 金五拾五錢

十二冊一年分 金壹圓

全國無遞送料

明治三十四年四月二十九日印刷

明治三十四年四月三十日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛

印刷人　東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地　重木巳雄

發行所　國光社

發賣元　靜思館

（電話本局一千三百七番）


松間花



女鑑　第百貳拾七號

米國に於ける女鑑主義

頃日、米國交際場裏に於いて重を措かるゝ、フロラ、マグドナルド、タムソン夫人論じて曰はく、

婦人の眞の天職は、家庭の内にあり。然るに、婦人が、自己の地位天職を忘れ、敢へて、活世界の人となりしは、國家將來のため、面白からざる徵候なり。近時離婚の數著るく多く、理想的米國家庭の善美なる組織は、婦人の外張的、精神のために、破壞せられたり。云々。

と。即ち、これ女鑑が十有餘年以前より、終始一日の如く唱導せる主張を、今日に至りて、はじめて、米國婦人は、之を認むることを得たるなり。由來米國は、所謂女權擴張論者の巢窟にして、而かも其の所謂女權擴張論といふは、たゞ、いたづらに、外部に顯はれたる男子の浮華なる功利を羨望し、其の功利を追うて、男子と競爭せむとするに外ならざるなり。然るを、彼の近視眼的文明論者は、是

非を識別すること能はざるまでに心酔せる頭腦を以つて、盛に、婦女子を煽動し、遂に、柔順貞淑なる日本婦人をして、女權擴張論を夢みる者あるに至らしめぬ。乘せられたるものも、固より、責なきにあらねども、乘せしめたるものゝ罪、決して、輕からざるなり。獨逸皇帝が、近頃、公會に於いて、婦人は、庖厨のことを知れば足れり。其の他を知るを要せずと言へるが如き、某漢學者が、婦人の婦の字は、女扁に箒あり。故に、婦人は、家内掃除の勞を執れば足れりといへると同論にして、非常に偏狹に失せりといへども、また、以つて、歐米に於ては、如何に、婦人をして誤りたる方向に進歩せしめたるを悔ゆることの切なるかを觀るに足らむ。

勿論、歐米に於いて斯く言ふが故に、注意せざるべからずと、彼の佞外者流の毎に言ふことの如きは吾人の言ふを敢てせざるところなり。況や、このことについては、すでに、幾百遍論議したり。たゞ、吾人を偏狹なり、固陋なりと稱する彼等が、その崇拜する本地に於いて、吾人の主張を是とするに至りたるを聞かば、或は、覺醒の料にもと、聊か、これを紹介するなり。



家政學校設立の考案

細川潤次郎

凡、普通小學の科目は國民敎育の必要の者を擇みたれば、男女共通の者多くして、女子には、裁縫唱歌を加ふるに過ぎず。而して、高等女學校は、科目は、稍や、女子にのみ適切なるものを擇みたれども、大抵は理論の一方に偏し、實地に應用することの不完全なるは、普通敎育の學校として、勢免かるべからざる所なり。此れ一種の特色なる、家政學校設立の必要ある所以なり。

右の趣旨に本づき設立する所の學校は、普通の智識を具へ、高尚の思想を有する、有用の女子を養成して、一家の主婦たるに愧ざらしむる者を出すを以て、目的とす。

學生は、尋常小學を卒へたる者、高等小學を卒へたる者、又、高等女學校を卒へたる者、若くは、之に准ずべき學力を具へたる者なるべし。此等の學生に對して、其年齡學力に應じて、科目の取捨をなすことを得、高等女學校卒業生の如きは、單に實習すべき科目の數を授けることあるべし。科目を大分して、理論と實習との二大目とす、又、各其細目あり、左の如し。

道德
禮法　理論
作文　實用書簡文
算術　學力に應じて取捨す
家政簿記

衛生大意
看護法　理論
燃料、及、燈油に關する經濟
室内裝飾、及、庭園掃除
家禽管理、及、菓樹栽培　此一項は地方に由り之を置く
以上　理論
禮法　實習
看護法　實習
厨房整理
食堂設備　器具の設備を包含す
食料貯藏
飲食調理
衣服調製
衣服洗濯、及、補繕
以上　實習

右の科目に、必要ある時間を適宜に分配し大凡、一年間に卒業せしむべき、準備を爲すべし、而して學生の材質により、卒業期を伸縮することを得。又は、學生の望に依り卒業期を過ぐる後と雖ども猶、此學校に來りて、未熟の業を、補修することを得。

養蠶製絲の織物等は、皆女子の常に務むべき所なりと雖も、家政學校の設備としては、事體煩重に過ぐるを以て、之れが設備をなすこと容易ならず姑く之を欠くも、亦、已むことを得ざる所なり。此等の地方に在りては、其附近に養蠶所、製絲場、織工場あるべくして、是又、一種の學校なれば之を目撃して、其智識を開くことを得べし。

天の性を、貴しとなす。人の行、孝より大なるは無し。（仲尼）

婦人の早衰（四）

三輪田眞佐子

白氏の詩に、老眠早覺常殘夜。病力先衰不待年。と、實に人は老のねざめを、慰むるに足るものなくば、唯荏苒として、無常の風の吹き來るを待つのみとありて、人生の果なきをかこつに至らんかし。あはれ。

されど、老いて、いよ〳〵壯とありて、死の瞬間まで、人生の望を有し、業を營むものあらんには、世を厭はざるのみならず、餘命幾ばくもなきを、思ひて、光陰を浪過せざるやうつとめて、天職と人分を怠らざるを得べし。或人おのれに勸むるやう、君や老の身なれば、煩を避けて逸を取るべしと、されどおのれは、閑散の身ばかり、無聊に困みて、憂きものはなしと、思ひて、恒に人事に役々とするを以て、樂とするなり、若し、おのれに定業なくば、おのづから朝寢のつみを犯して、東雲の空も見ること、能はざるべし。夕寢のため、明月の空も眺る由なきのみならず、駸々乎として、日進月歩する文明の世より、遠ざかるべし。否、老者といへども、つとめて止まざれば、文明の魁となるを得べし、青年といへども、怠慢なれば、文明の殿となるも難しと信ず。加之早衰して、安逸を貪ぼるは、國家の恩義に報ゆる道にあらざれば、無爲、無業飽食するに、忍びざるなり。

されど、體力は限あり、いつまでも、健全なる狀態を保つこと、能はざるを以て、平素精神上の修養なきものは、體力と共に、人事の娯樂も去りて生は死の安に如じ、老人ながら文學思想にてもあらんか、身は疲體にあらんも、心は雲水を追ひて

東西南北に逍遙するを得て、樂は、苦を忘るゝに足らん。或は、史を繙くとせんか、坐ながら古今成敗の跡、自から、歷々と眼中に現はれ、將に日の暮るゝを知らざるべし。或は、古人の書を讀みて、聖賢を友とせば、身は蓬萊山に遊びしにあらざるかと、疑ふ心地こそせり。況んや、我が植ゑし後園の樹下に、孫、曾孫など打むれて、遊ぶを見ることの樂しさよ、我が敎訓せし男は、國家有用の人となりて、活動し、女は、良妻、賢母の譽高かゝらんか、決して、老者に樂なしといふべからず、これぞ、早衰の人は、かゝる樂を得る、機會を、失なはんも知るべからず。

以上述べしところによりて、人は子孫を繁殖せしむるため、國家の經濟のため、亦人生の壽命を全くするため、早衰の歎くべきを知らん。されば、婦人たるものは、身體を攝養して、國家のため、人を增加せしめ、長く勤勞の功を積み、天壽の幸福を空うせざるやう、覺悟せざるべからず。

唐の、會昌年中に、詩人、白居易、六人の叟を招きて、宴會を開き、貴賤を論せずして、尙齒會を組織し以て、古を談じ、今を議し老を樂みけりとかや。おのれの讀者に告げまほしきは、婦人早衰の弊を脫して、壽命の長を尊び、久しく國家及び一門のために盡力せんことを祈る、凡そ秋の收獲を願ふものは、春は種まきて、且つ草ぎらざるべからず。老後の理想は、少年の時に、定めざるべからず。

父母は、其の子の顯榮を以て、己の幸と爲す。故に子たるもの、其の恩を忘れ、惡業を行ひ父母をして、憂ひしむること勿れ。（勸善訓蒙）

如何にして吾人は言語を習得するか（承前）

安藤晴晨

（四）兒童は如何なる言語より習得し始むるか

兒童が言語を習得するに當り、如何なる言語より始むるかといふに、總ての兒童が、悉く同じき言語より始むるにはあらねども、さりとて、全く類を異にせるものにはあらず。其のはじめに用ゐしむる言語は、大よそは似寄りたるものなり。吾人の最好適例となし得べきは、兒童が最初に言ひ出す、とゝ（父）かゝ（母）うまうま（食物）いゝ（善き）などいへる語あり。兒童が是等の語と、それぞれの觀念とを、結付くるに至る順序は、皮想的のものにて、そのそれ〳〵の觀念が、また、理に據りたるものにはあらで、不完全なるものなり。とゝといひ、かゝといふ語に如何なる意味を含めるか、兒童の夢にも知らぬ所にて、兒童にはそれらの語は、たゞおのれを愛育しくるゝ人に對しての、符牒たるに過ぎず。而して、其の衣服により、明に其の區別をたつるなり。されば、同じきいでたちせる人に對して、兒童がとゝとよび、かゝとよびかくる事もをり〳〵はあり、男親、女親のおのれに對しての關係の如きは、生長するに及びて、漸く知りそむるものなり。うま〳〵といふ語も、兒童は能くその語は意味を知りてにはあらず。たゞ絶へず、之を味ひて、腹を滿すと、他人が之を呼びて然いふとにより、この語を用ゐるなり、いゝなどゝいふ善といふ思想も、きはめて、始は、心よきといふ方なるべし。それより心に、叶ふことに、用ゐらる、然れども、これが漸次道

德の範圍にうつり、兩親の意に叶ひ、道德の標準によりて、律せられたる行爲に、適用せらるゝに至るは、容易き事にはあらず。兒童は、生長するに隨ひ、善惡の間の辨別を、一層精確に知らむとせむ、然も終に彼は世界最賢の哲人といはる人とするも、善とは何を意味せるか、たゞ功利を含めるものなるか、或は獨立絕對の主義を有せるものなるかとの、問題に關し、それ〴〵皆意見を異にせるを見て、大に惑ふなるべし。

是等は、たゞ一二の例にすぎざれど、また、言語を學ぶ順序を、よく說明せるものなり。兒童は、始一學生として、言語を學びそめ、常にかくてやまざるものあり、實にその智力の前にはその獲能ふよりも、尙よく、尙多きものの堪へず存するあり、言語によりて、始めて、心に形造りたる知覺は、朧げにして、その胸に畫きたる區別は、粗なり。たゞ經驗を經て後、その知覺は益眞實に、益明白となり、その區別は、深められ、說明せられ、正さるゝなり。兒童は、創造的たるべき暇を有せず、其の粗き混亂したる印象が、獨立的に結晶して、一の形を成すべき暇もあらぬまで、速かる勢力の爲に、他人の模範、及教訓の示す所により、或定點に集められ、そこにて一の形を成すに至る、少年の心は、常に言語を學び、言語によりて、物を知る、そは地圖、または圖などによりて北京の市街に關するおぼろげなる、知覺を形造り記述又は繪畫によりて、獅子といふ動物に就ての不正確なる、知覺をうると等しきものなり。

語尾の變化によりて、または關係を示す語によりて、あらはさるゝ形式上の言語の區別は、其の始に當りては、兒童のさとり得ぬものなり。兒童の先探りて用ゐうるは、言語の粗大なる成分に過ぎ

ず、即、名詞の單數、複數を區別し得るほどに一といふ數と、それより以上の數との、關係を了解せず、いづれの場合にも、單數の名詞を用ゐ、また動詞の語尾の變化させては、人稱、時、格なども全く顧みず、其の過去の詞、複數の語などを用ゐうるに至るは、既にその、敎育の一時期に入りたるものなり。代名詞に對しても、亦然り、兒童は代名詞の性質を諒解したること、容易ならず自稱、對稱他稱等の區別を充分にさとりたることを難し、人々は其の固有の名を有するものを、何故に、代名詞を用ゐるかとはその疑ふ所、されば自己の事をも、他人の事をも、たゞ其の固有の名を以て、よぶのみなることは、兒童に接するものはよく之を知る。

斯の如くあらゆる點に於て、言語は、成熟したる訓練せられたる思想をいひあらはしたるものにして、若き學生は、其の自然の才能、及都合よき事情のゆるす限り、速に其を用ゐるに至る、他人が觀察し、分類し、抽象したる言語をば、勞せずして、學ぶなり、宛も是兒童が數學を學ぶ時の如し、兒童は語、符號、記號、方法によりて、他人の案出したりしものを、順次に、學びて以て、おのが用に供し、斯くて、數年の後には、數百年の星霜を經て、漸く成立したるもの、またたゞ自己のみの智力にては、到底出來うべくもあらぬものをも全く我がものとなすことを得。たとへ數學を學び得たる、後にては後學の者の爲に、次第にその項目、增加し、または、新しき項目を、加へ得る丈の、才能は持てらむとも、たゞ數學を學び得るに足る丈の、心力を有せるのみにては、他をはなれては、一の項目をも作りいづること難かるべし。これを同じく時としては、言語上にる、敎

育ある談話者が、新しき語を加へゆく事もあれども是畢竟その言語を充分に習得し得たる後の事にて他を全くはなれては、一語をも作りいづること、難きは明なり。

婦人と社會改良

河本生

東洋の君子國として、世界に誇る可きの粹美は、決して寡からざるなり。如何に軍艦の多きに誇ると雖へども、如何に領土の曠漠たるを誇ると雖へども、そは皆末葉の事のみ、優美にして眞善美を備ふる國家としては、一も誇るに足らざるなり。若し外容の裝飾を以て、文明と唱ふるが如きは、猶ほ烏にして孔雀の羽翼を裝ふの類にして、眞に人の一笑に値ひするのみ、彼の歐米人の唱ふる文明の如きは、吾人として最も怪訝に堪へざらしむるものなり。

我國の婦人をして、文明的ならしめよとは、近時到る處に聽くの聲なり。吾人は懼る、海老茶の袴を奬勵し、自轉車を女學生に勸むるが如きを以て文明的と心得るが如き其の皮想の見、眞に寒心に堪へざるなり。固より婦人の服裝の如きも、絶對的に拒否すべきに非ざれども、今や社會の趨勢は此の如き枝葉の改良にあらずして、根本よりして革新せざれば、決して、社會の風紀を挽回すべからざるなり。

學者論客は、道德の頽敗は社會の骨髓に達せりと慨し、講壇に、新聞に、公德養成を叫ぶと雖ども、社會は馬風も啻ならず、何の感動を受けざるなり頽波蕩々堤を壞らずんば止まざるの勢を以て、總べての社會に侵入しつゝあるなり。今日は、如

何に緻密なる倫理學を以て、社會に敎へんとするも、社會は學者の空論として、耳を傾けざるなりそは學識豐富なる學者と稱する人々にして、多くは其の性行の指摘せらるべき、墮落の行爲あればなり。上の好むもの下之れより、甚しきありと、六歲に滿たざる女兒の幼稚園にありて、異口同音に、「何ヲクヨ〳〵川端柳……ストライキ」節を歌ふあり。宜べなり。女學生にして役者の投票に奔走せるが如きは、噫々社會道德の頽敗、此の如きに至るは果して誰の罪ぞや。

敎育、宗敎、文學の如き、世の頽敗を救ふに最も有力なるものも、今や社會を敎訓するの勢力なく反て人をして淫靡に赴かしめんとするの、動機たるが如きの觀あるなり。吾人は、此の如き時代に當りては、最早世の所謂學者、論客、社會改良家の如きは、少しも恃むに足らざるを知る、頃日板垣伯、風俗改良意見とて、女學世界記者に語りて曰はく、

此の風俗改良は、先づ形の上から改良して、段段内部に及ぼすの主意ですから、會員の中に立入て見れば、隨分蓄妾等の事をしてゐる人もあらうけれども、それを嚴しく詮議をすると、區域が狹くなつて來るのみならず、容易に實效が上らぬ。如何に主意が立派でも、實效に益がなくては、何の役にも立たない云々………。

伯が政界を抛ちて、我風俗の衰微を嘆じて、鋭意社會改良に從事せらるゝこと、俗政治家の比にあらざるは、吾人の最も謝する處なりと雖ども、唯此の如き精神上一種の不具者を會員として、外形より我風俗を改良せんとするが如き、其の結果の如何は、杞憂に堪へざるなり。吾人は今の社會に向つて、德風の頽敗を挽回せんとするには、世

の空論家よりは、寧ろ、熱誠ある婦人の率先して、實行的社會改良家の出でんことを望むなり。男子は、徒らに大言放語に失し、實行に伴はざれども、婦人は沈默にして、實行の性情に富めるなりとは、日常、家庭に於て見る處なり、吾人は、多くの婦人に望むに、政治家、文學者、哲學者を以てせざるなり。婦人の天職は、善き家庭を造るにあり。家庭をして平和に健全に發達せしむるは、最も善き國家を造るなり。今や婦人問題は、一の流行の如く、到る處に唱へらるゝを見る、而かも、多くは、行ふ可からざる空想に止まるもの多きが如し。吾人は今日我が社會改良の如きは、學者論客の議論よりは、最も、實行に勢力ある、我國固有の優美なる大和婦人が、精神的に其の德と、智と、愛とを以て、此の頽敗せる社會を、動かすにある一事のみと。

噫、歷史を異にせる我婦人に向ふて、ヂヤンダークたれ、フオセットたれと云ふが如きは、果して我が、婦人をして善き家庭を造らし得べき歟。吾人は、其の結果の如何を推測し轉、杞憂に堪へざるなり。即ち書して、女鑑記者に呈す。

此の、一論說の可否は、吾人其の責に任ぜずと雖も、世上一般悉く形式に流れて、今や、精神的實行を、願る者甚だまれなるは慨はし。此の一文目下研究すべき問題の料たるを失はず。即ち揭げて天下に質し。以て河本雅君の好意を謝す。(記者)

其の心を大にして、物を容れ。其の心を虚しくして、善を受け。其の心を平にして、事を論じ。其の心を潜めて、理を觀。其の心を定めて、變に應ずべし　(續讀書錄)

* * * *

志正しければ、衆邪生ぜす。心靜かなれば、衆事に躁がず。　(王　符)

◦ ◦ ◦ ◦

徐々として、歩行する者は、久しけれども、疲れずして、遠きに行くことを得べし。(古　諺)



日本女學校修業証書授與式に

西澤之助

當學年は、昨年九月の開校より始めし故、恰も、一小學期間の不足ありしにも拘はらず、各學級とも、成績の割合に良好なりしは、一に教員諸氏の精勵と生徒各自の勉勵とによるものにして、予の深く欣喜とするところなり。本校の開設、日なほ淺しといへども、既に、本學年を修了せる生徒諸子は、次學年、即ち、來月初に入學すべき新入生に對しては、皆、先進者たる位地に立てるものなり、先進者たるものは、常に、後進者に對して善良なる模範を示すべき本分あることを忘るべからず。

記者曰はく、わが女鑑愛讀諸媛も、他のものに對しては、また、先進者なり。されば、また、この心を以つて、能く、其の後進者に臨まざるべからず。

善良なる模範とは何ぞ。本校の主旨とするところの、忠孝を本とし、質素を尙び、着實を旨とすること是なり。

即ち、これ、女鑑の、常に、主張するところのものにあらずや。

幸に、わが生徒諸子は、能く、本校の主旨とするところを體して、忠孝の意念に厚きは、諸子の家庭に於ける平素を聞き及びても、且つは、時々の作文に於いても、其の情の表示せらるゝを見ても、信ぜらるゝところなり。その質素なるは、平素、服裝の華美ならざる、或は、本所、日本橋、

麻布、さては、青山など遠方より通學する人さへ、嘗つて車にも乘らず、怠らず登校するにても、諒するところなり。その着實なるは、各教室とも、生徒諸子が擔當する、掃除其の他の整理の行屆ける、または、日常の行儀のますます、善良に趣く狀態等につきても、よく諒知せらるゝ所なり。かゝる諸子の善良なる風儀は、おのづから、校風となるものにして、今後とも、ますます、この風を堅固に守り、新入生をも、之に同化せしむるやう勉めざるべからず。是、特に、諸子に望まざるを得ざるところなり。

わが讀者諸媛も、女鑑をよみて、善き人は、ますます、善くなり、たまさかに、善からぬふしのありしも、日々に、善におもむかるゝなるべし。あはれ、その得たるところの美風を以て世の人を導かば、いかばかり樂しからむと、これ、また、常に、希望に堪へざるところなり。

日進月歩の世に處して、わつぱれ、女子の本分を全うせんとするには、本校に於いて授くる程の學科は、總べて、能く習得せざるべからず。人によりては、或は、以上の學問を習得せざるべからざる必要に遭遇することもあらむ。それぞれ、設備中なれば、遠からず、其等の人々をも滿足せしむることを得べしと信ず。

しかしながら、斯く大切なる學科なりとも、其のために、徳性の涵養を怠るが如きことを爲すべからず。學問なくして徳操あるものは、いまだ恕すべしとはいへども、徳操なくして、學問のみに長けたるもの丶如きは、人として齒するを恥づるなり。歐米諸國の國民は、文學工藝等に於いては、優に、わが國民の上に出づべしといへども、北清に於ける彼等の行動は如何。實に、言語にするをだに恥づ。その間に立ちて、わが將卒が、能く人道を盡し、帝國の名譽を墜さゞりしは、徳性に於いて、

大に、彼等に優る所のものあればなり。即ち、祖先より忠孝主義を以つて養成せられたるが故なり。學問の必要を認むると同時に、深く、この點について留意せむことを希望するなり。

岩倉のよね

田山とり子

父母祖先の御靈を祭りて、ありし世の恩に報いまつり、後の世の御爲をはからむことは、子孫たるものゝ、君の御上と國のためとの二つをおきては、斯ばかり重事はなきを、在す時だに、其の孝養おろそかなるが多き世には、然る方に、注意のいたらぬもの尠からざるも、あやしとするほどのことにもあらざれど、さすがに、いと〳〵慨かしき極といふべし。況んや、名と利とのためならぬことには、一錢一厘を吝む富豪家を仰ぐ人心には、貧しき人の、亡人の御爲になど心を盡すを見れば、斯る愚しき心ゆゑに貧苦の憂目を見るぞかしなど、あらぬ罪をさへおほせむとする者さへ珍らしからずとぞ。

岩倉のよねといふは、即ち、京の岩倉のかたほとりに住しけるより得たる名にて、疾う父母に別れ、いと貧しう、わびしき世をすごしけり。一年の七月の盂蘭盆に、亡き人々のための佛に、何をかな供養をと思へど、さて供ふべきものとては塵ばかりもありあはさず。物といふは、只、わが身に纏へる古袷と破瓶とのみなりければ、せめてもの心やりにとて、其の裏を解きてわが、身の料にのこし、表をば、彼の破瓶の内に収れ、清き蓮葉にて其の上を蔽ひ、自ら、愛宕寺に携へゆきて佛前に供へ、懇に、父母のために後の世の福をいのりて、家

に歸りぬ。其の蓮朵の上に、

たてまつる蓮のうへの露ばかり
これをあはれとみよの佛よ

と、やさしくも書記されたりき。寺僧も、いたく、かね女が至孝に感じ、慇懃に回向して、其の志をたすけたりきといふ。

あながちに佛に佞すとそしるなかれ。其の志のほどを見よ。いのらずとても、神や守らせたまふらむかし。

人の此の世は、己れ一身の爲のみにあらず、國の爲め、他人の爲め、旅人のため、亦爲すべき所あり。故に人は、皆、人に對して、行ふべきの務めありとす。（勸善訓蒙）



仕付方

十一　物おほせらるゝ事

赤堀又次郎寄贈

物おほせらるゝとて、いかに御こゝろよせあることにて候へかし。さのみ、ゑつぼにいらせおはしまして、笑みまけて、おほせらるまじく候たゞ、おほどかに、らう〳〵しくおほせらるべく候、又、きかせ玉ふとも、やがて、さと打聞くより、はやくとはいかゝなどおほせでとこそよく〳〵聞こしめし入れ候うて其の後に、あるべきこと、あるまじき事などをも、人して能々おほせられ候へ。人

人かならず、みづから人しれず仰せあはせられ候
うて、又、めしつかふ人も、したしきも、うとき
も、とかくあつかへまゐらせ候ふものあり。御心
得候ふべし。

十二　御信の事

たゞ、いかほども、御信いらせおはしまして、神佛
をうやまふ御心をさきとし、主親をつとをおそれ
さしおはしませ。かならず、信心ふかき人は、御
心のうち、いさぎよき物にて候。しんめい冥加を
おもふには、さのみ、人しれずとて、あしきはた
らきは為ぬものに候。しんふかき人は、かならず、
神明の冥加ことさらにありて、その人おもふこと
かなふものなり。

十三　君に仕る事

君きみたらずとも、うらみたてまつることなかれ。
いやしくあやしといへども、主といへるもの、さ

るかたに威徳あるものにて侍るなりかならず、恩
おとり、そのかたの扶持かひなくしからずとも、
おろかにおぼしめし候ふまじく候。御身あひて、
十恩のものなるに、御さぶらひ候うて、もより、
さるかたの御こゝろして、かたじけなうおもひた
てまつらせおはしまし候へ。いさゝか、おろかなら
ずおぼしめし候へ。しぜん御なさけあるふしぐ
わたらせおはしまし候うて、あながちに、あまた
の御中にすぐれてなどおぼしめし候て、たゞ、世
のしわざにとよせて、さすがに、みがきられまゐ
らせおはしまさんことは、あるまじく候。いたう、
わびさせたてまつるも、かへりて、ひがゝしく、
さりとて、また、やごとなき御かたがた、さて、
さぶらはせおはしますに、あながち、打續き参の
ぼらせたまはんも、かたはらいたかるべきを、そ
れも、たゞ、ふかき御心ざしのふたつなき御こと

ならむ、いかゞはせむ。さて、なほ、のこる御かた〴〵にも、御心ことにあひしらひまゐらせおはしまし候へ。ことさらに、みやたちなぞおはしまさむ御方をも、とりわけて、御心をそへまゐらせ候ふべし。きみの御心にかゝり、御おんをかふむる身となりては、かならず人のあつかふわざなればと、ふかう、おぼしめし知りて、御身をくだきても、よく〳〵つかふまつらせおはしまし候へ。さりとて世の人にかろしめられず、おも〳〵しく、心によく〳〵さるかたにてぞ、いま、ひとしほのいろまさらせたまへるかしとおもひまゐらせ、かやうに、御身をもたせおはしまし候へば、かろ〴〵しき御名の洩りいでらんこと、かへす〴〵、うたてあるわざにて候。君を大事と思ひまゐらせ候うて、かりにも、御うしろ言なぞ、おほせごと候ふまじく候。たゞ、いかほども、かくれても、あらはれても、一大事とおもひまゐらせさせおはしまし候はゞ、いよ〳〵、御冥加わたらせおはしまし候ふべし。もとより、御身より下れる人ありとも、一たび、其の家に入らせおはしまして、御みづからひとならば、如何にもいかにも、おそれおぼしめし候へ。かう〳〵しく想應しからずなぞ、おぼしめされんことは、とく御しりぞき候へ。ありながら、物を、とかう、あつかふなん、いと見苦しく下りたるわざにて侍り。たゞ、如何にも、神佛よりも、君をおそれ、大事におぼしめしあはせ候はんに、すぐること候ふまじく候。

長きに誇れば、反りて、短きに劣る事あり。弱きを守れば、遂に、強きに優ろこころあり。

（連話圖）

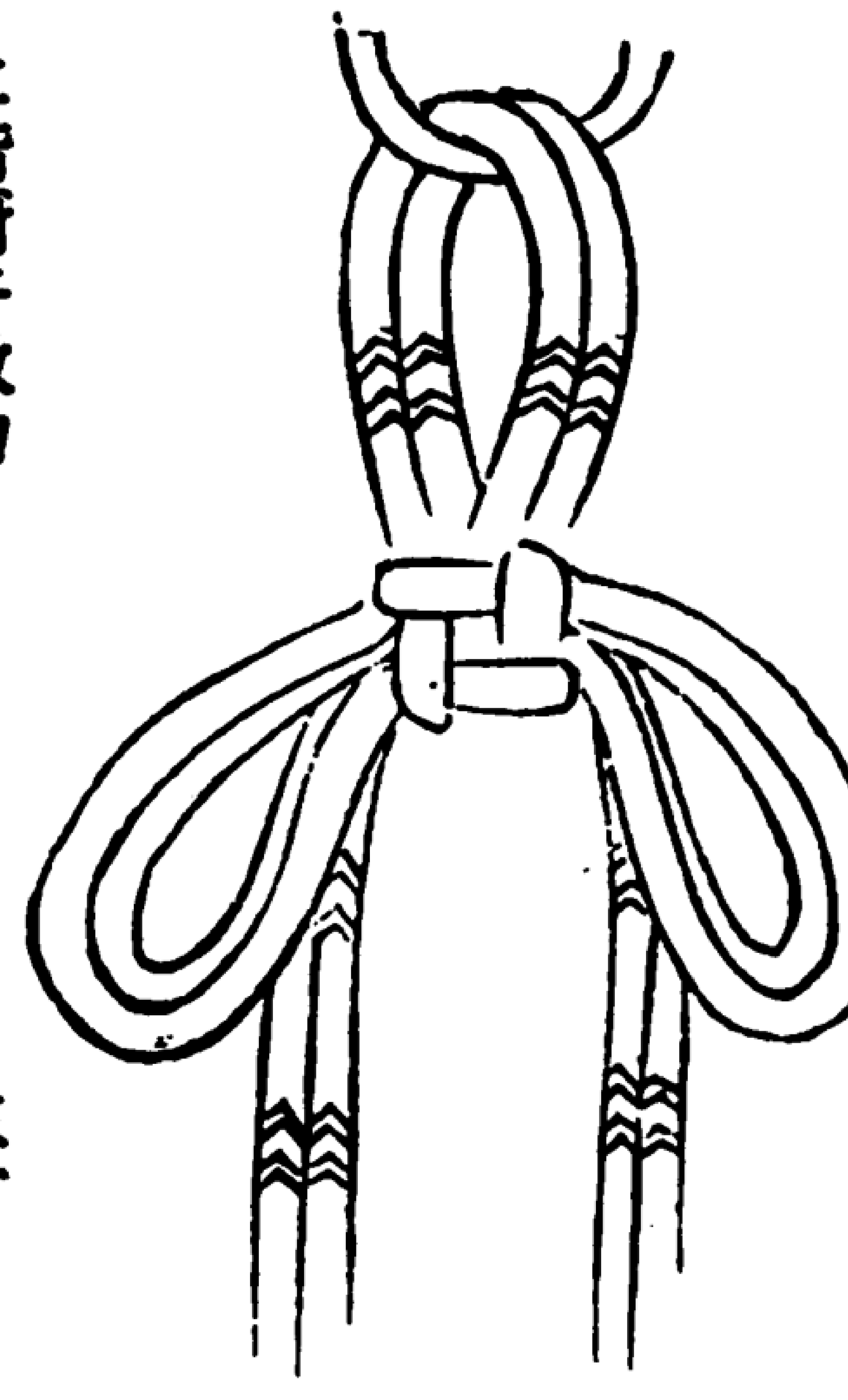
上巻むすび

石井泰次郎

第一　類聚離要鈔繪圖四巻の内（前號の續き）

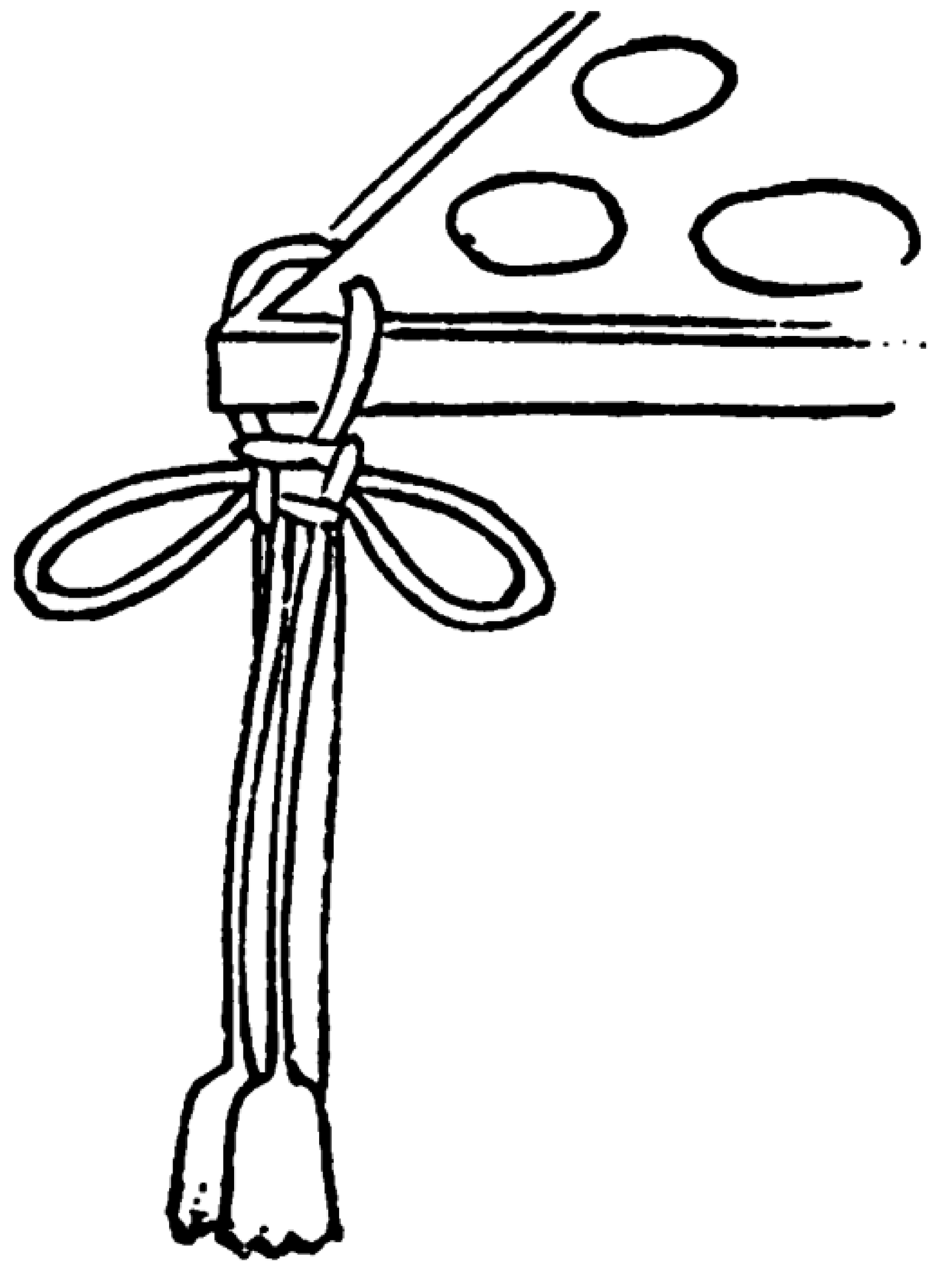
釣香爐

コノサキニフサアリ



二諧厨子敷物

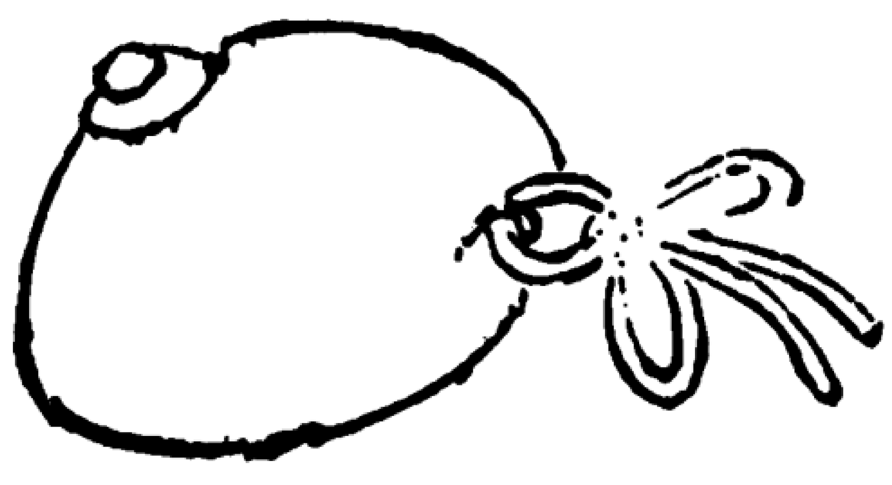
三寸



家紋

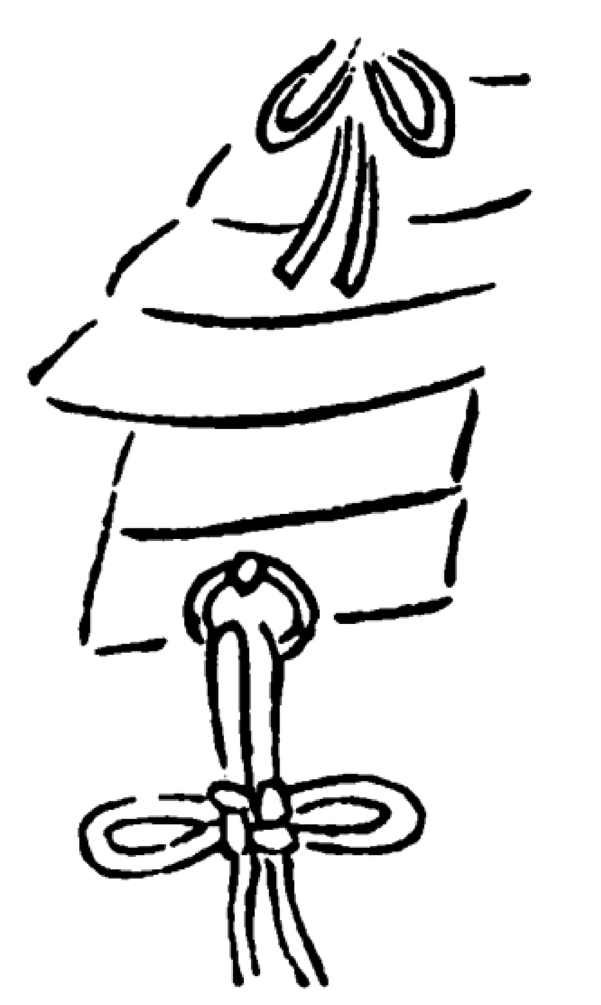
第二　後三年合戰繪圖の内（挿標　鎧　絹傘）

挿標

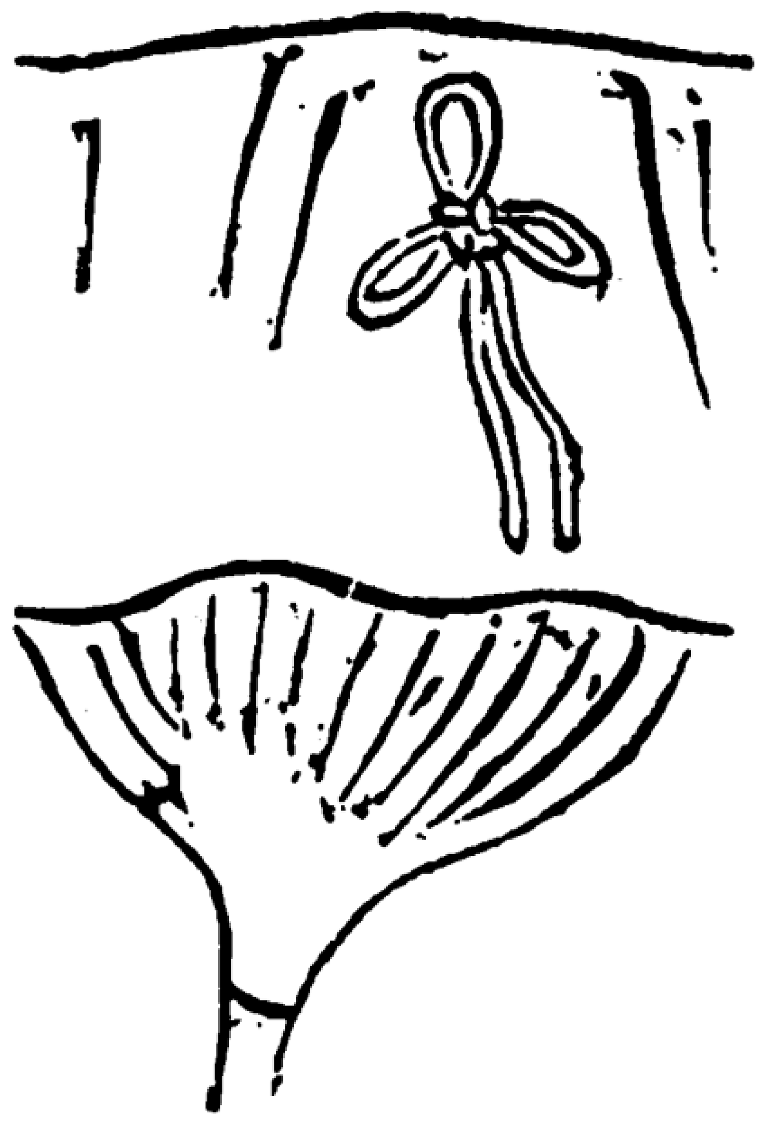


鎧背

コレハカサジルシナリ

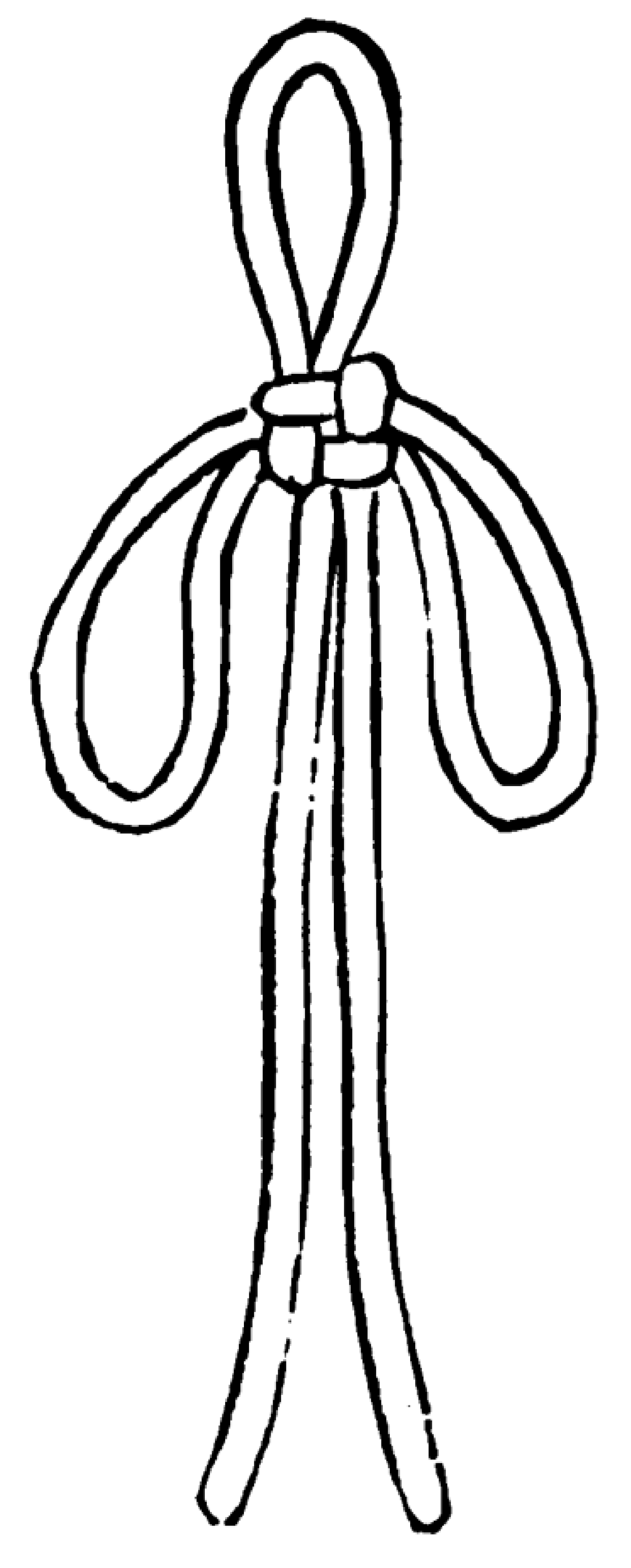


絹笠

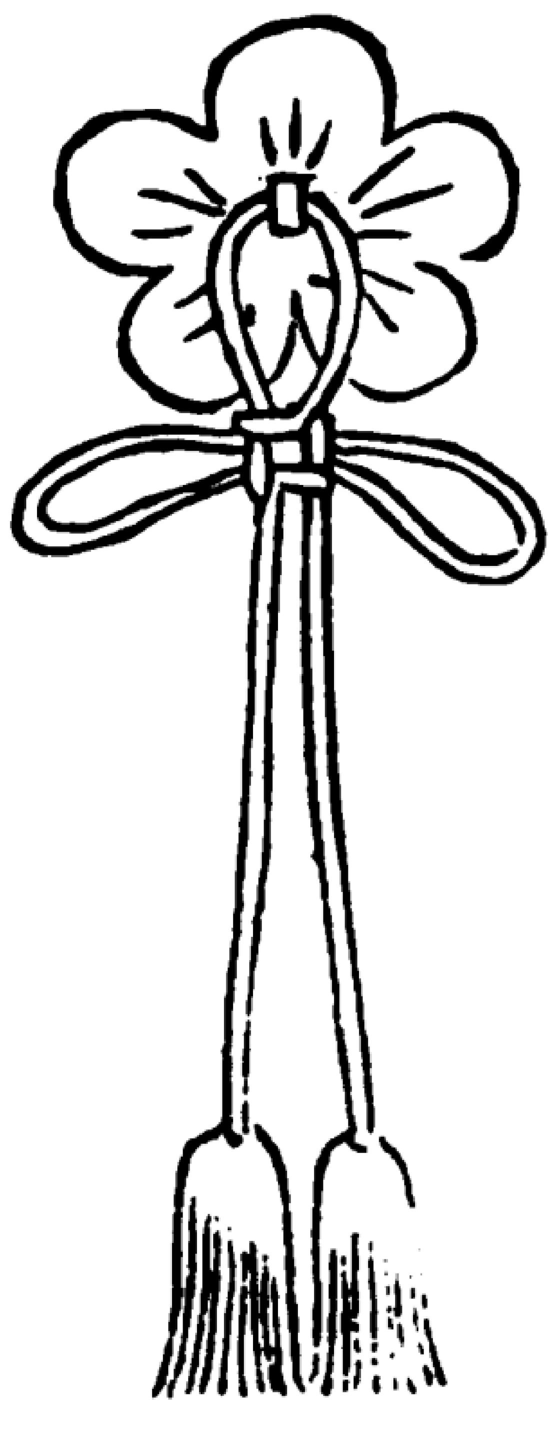


以上後三年合戰繪巻

第三　享保八年九條右大將殿御婚儀前物圖の内二（衝重心葉）



衝重ノ四隅



三日夜餅筥の心葉

第四 貞丈翁随筆（小車錦百六十九條）

あげまきの形、もと人の魂魄を結べる形にして、其圖文公家禮に見えたり。其言に云ふ、用二白絹一疋一結 如二世俗 所謂同心結一 者 云々

結帛式

右神田勝久雑話筆記に見ゆ

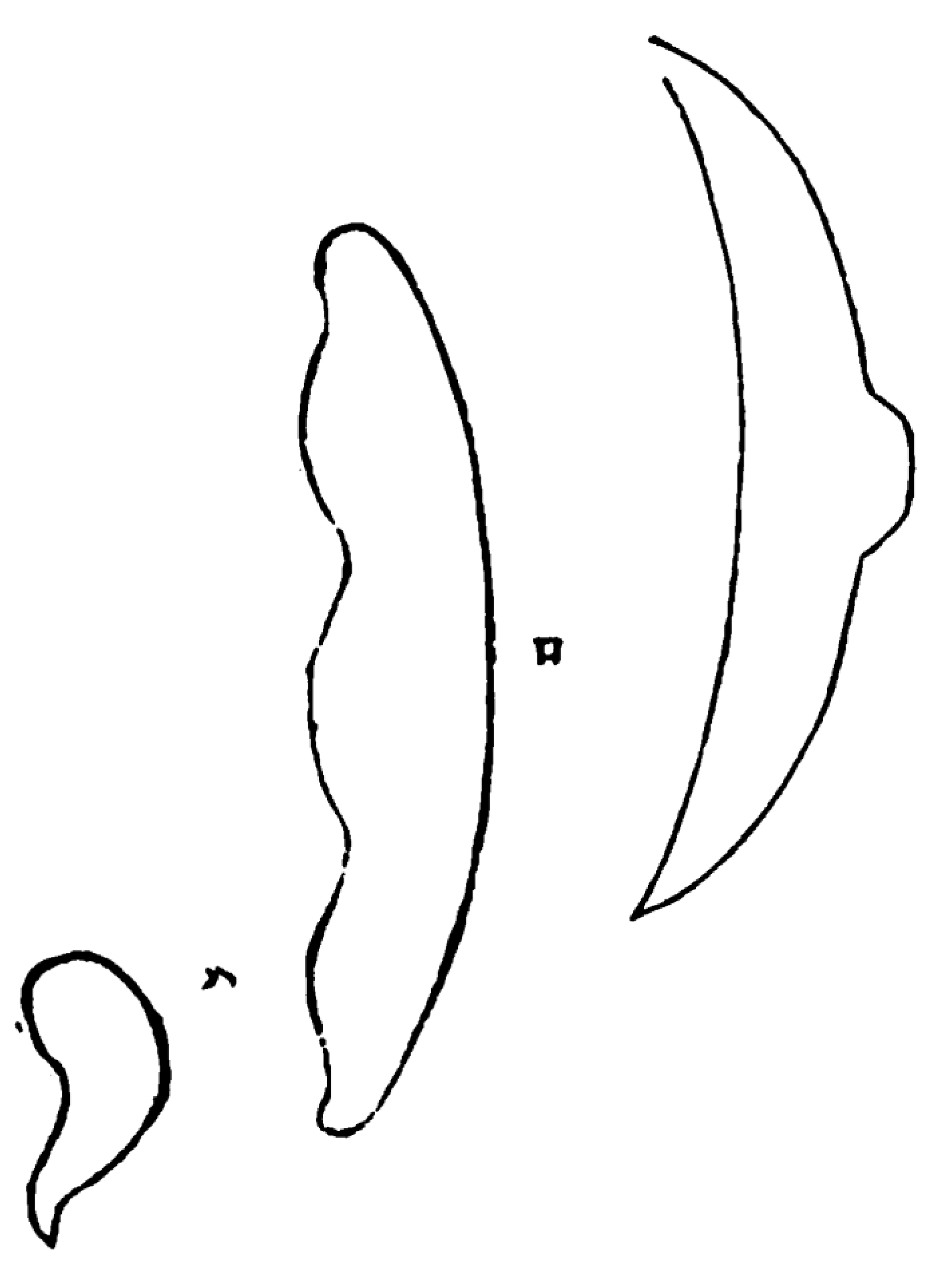
たちぬひ

羽子板をしゑ

西山たい子

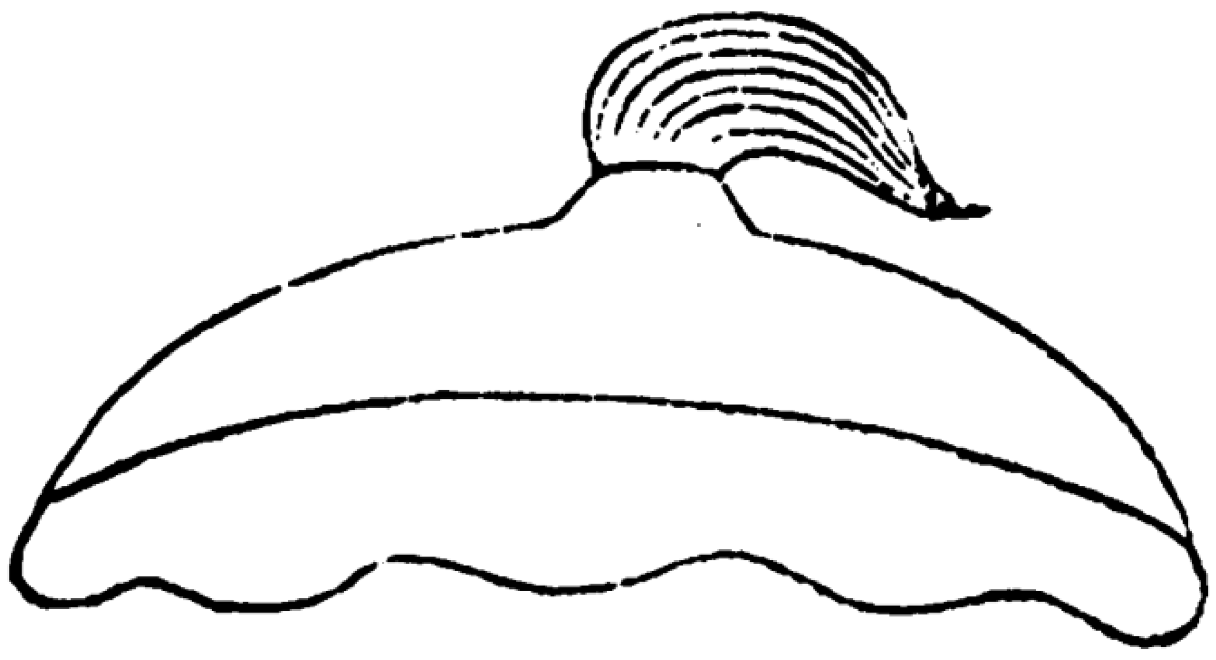
寶船のつゞき

隠笠



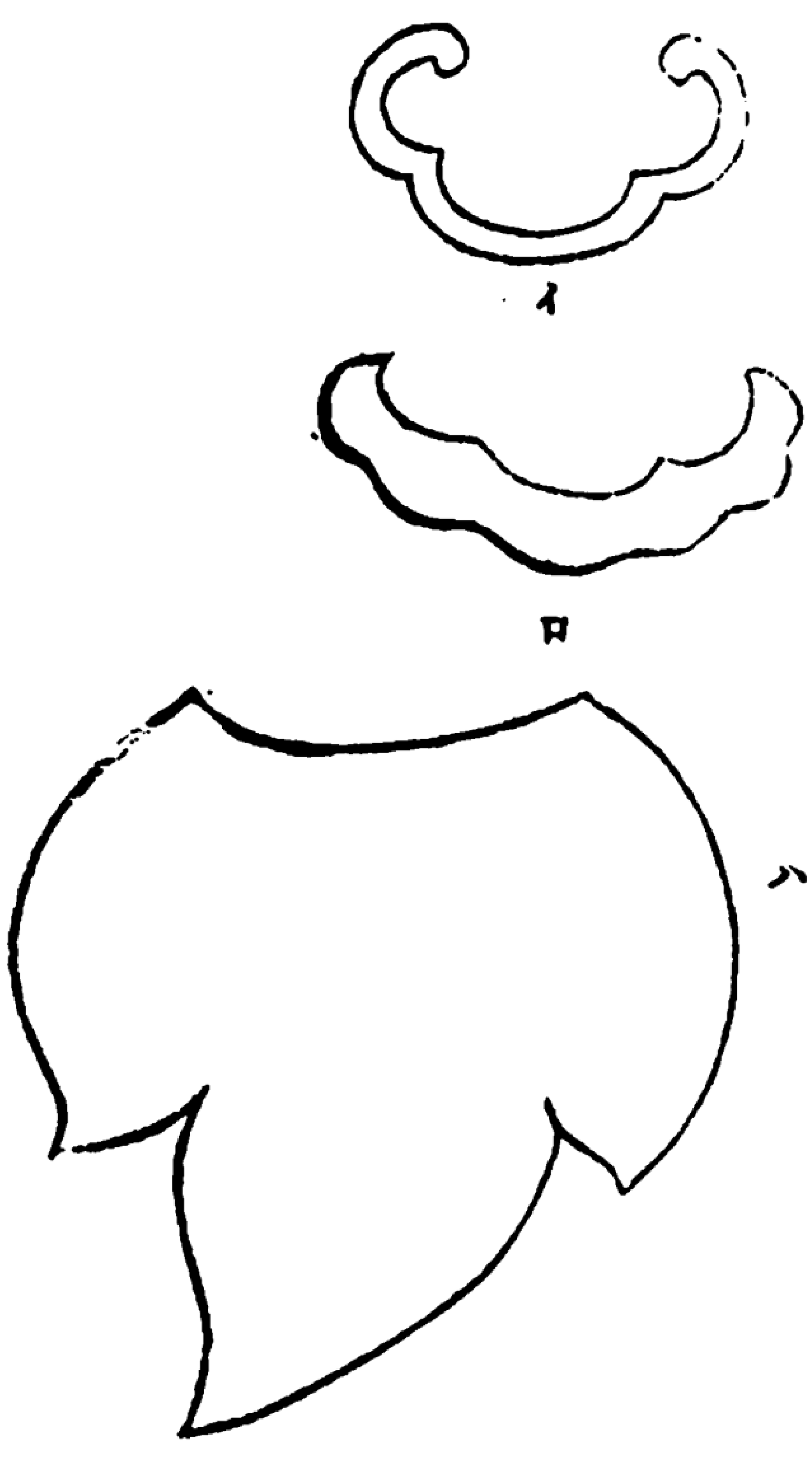
右の圖の如く厚紙を切り、之に綿を入れて、イは青か、草色やうの甲斐絹、絹やうのものをはりつけ、ロは緋鹿の子やうの切れを同じく綿入れてはりつけ、ハは綿を入れず、赤か、かば色の切れにてはり、イの下にロと、ハとはりつけて、左の圖の如くくみ合すべし。そして、その圖の如くハ印に毛を書くべし。

その圖



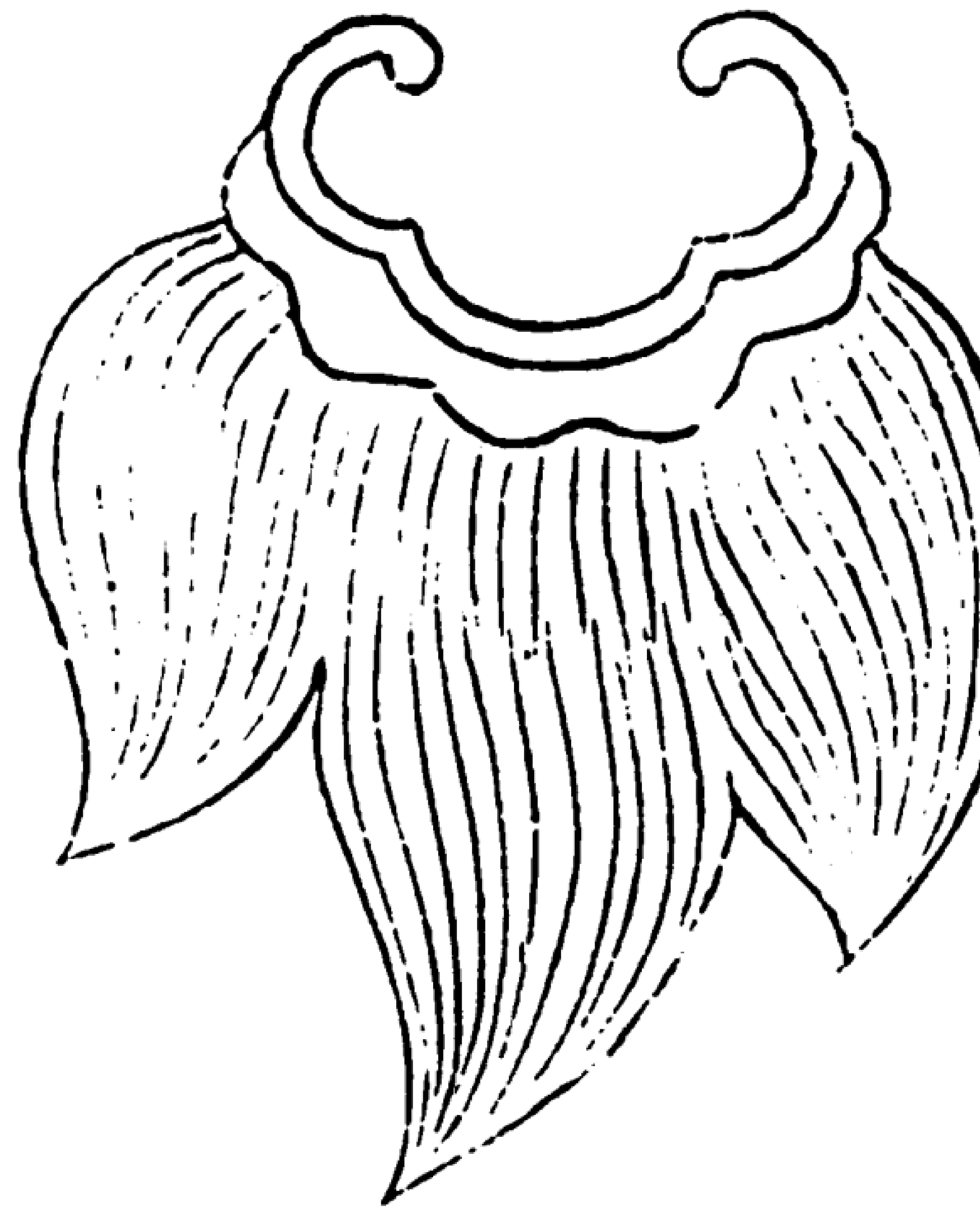
大きさも大方此の圖の程になすべし。

隱簑



右の圖の如く厚紙を切り、ハの印を黄、又はうすかば色の絹にて綿少しを入れてはり、ロにも又綿少しを入れ、黒、青等の錦切をはり、イには綿を入れず、赤き綿切にてはり、それを上にし、ロをその下に、ハをその下に重ねて、次の圖の如くくみ合せ、圖の如く簑のすぢを畫くべし。大きさも大方此の圖に從ふべし。

その圖



だいどころ

鷹野鳥のしかた

雉、鳩をしめて、そのまゝ毛をさり、なまぬるのゆのなかへいれ、すぐにあげ、料理のしやうは、つねのごとくにして、きじやうゆに、酒すこし入れ、にへたちにしそのなかへいれ、すぐに器にいれ、ツマミには、にんじんをおろしいれ、わりさんせうを、ふりかけてよろし。

鳥の御山陰料理のしかた

雉子の頭をわりて、あぶりて、御肴にあげる、御狩のとき、山陰といふて、上るきじ、山かげといふは、此の事なり。

時鳥土器にもるしかた

かわらけに、錦をかいしきにしてもる。これ古實なり。

鳥饅頭のしかた

鴫か、鶉か、ぎんし鳩か、雲雀か、右の鳥のうちなにありとも、よくたゝき、またすり鉢にてよくすりて、はりがねのすいのうの底へのせ、せつかいにてすりつくれば、下へ肉おつる、これにうどんの粉をすこしいれ、玉子の白味にて、こねすこしかために、右まんぢうのおほきさに、鳥のなか

へ、小豆粒をいるか、青むぎ豆をいるか、いづれ一色いれて、とくと、まるめて、上に葛の粉ふりかけ、すこし焼網に、裏おもてをかけてやき、さてこしきにいれむすべし。つかひやうは、一、臺引もの。一、小口切なれば、提重もの。一、こくせうもの。一、仙臺雜煮。たゞし、料理人の趣向に任すべし。右鳥合は、そのとき〳〵のもの見合、茶きんにして宜し。

甘藍栽培談

こ た 生

。。甘藍(キャベージ)は、「ハボタン」又は、玉菜と云ふ。通常中央の葉を巻きて、球狀をなし、敢て、開展せざるものなり。嚴寒酷暑の地に非る限りは、到る處に栽培し得らるれども、寧ろ寒地の方は、葉を巻く便ありて、栽培容易なり。暖き地方にては、冲積土の如き土質を選びて、栽培せざれば堅實なる球を結ばざれども、北海道の如き稍寒氣の地にては、土質を選ばずして、良好なるものを生ずるなり。

種類には、園藝用と、家禽用との二あり。家禽用としては、充分に成長せしむるを善しとし、特に葉を結ばしむるの要なし、其の葉は時に四尺許りにも達し、枝を生ずるが如きことさへあり。園藝用のものゝ中には縮緬葉のもの、否らざるもの、又た、葉の綠色なると帶紫色のものなど、或は球形の扁平なるもの、球狀なるもの、圓錐狀なるもの等あり。栽培期に就ても、春季に收獲すべきものは、秋播種して、冬間は、苗床にて越さしめ、三四月頃に收む、又た、早春温床内にて、苗を仕立たるものは、夏間に採收するを得べし。

されど、其の結果の面白からず、又た晩春より初夏に及びて、播種せるものは、秋に至りて採收するを得べし、今甘藍の二三種に付少しく解說を成んに、球葉甘藍には其の種類甚だ多し。一般に球の堅きもの程、霜に犯さるゝこと少なく、而して縮緬甘藍は、寒氣に堪ゆること通常のものよりも強し。又た未だ結球せざる若苗も、寒さを恐れず球葉甘藍中に早生種と晩生種との別あり。

栽培法、春に收獲すべきものを、秋に蒔きて或は苗床の內に仕立つべし、即はち九月より十月に播種し、翌年春三四月頃に移植するあり、其の畦幅は二尺位として距離は一尺五寸、四五月より六月迄に收獲せらるべし。此の種は、又た早春二月頃に溫床內に播種するも可なれども、栽培困難なり。次に晩春より初夏に下種するものは、秋早く收獲するを得べく其の畔巾は二尺にして、

採間は二尺を距つべし。寒氣強き場處にて秋蒔とせば、冬間叮嚀に防寒するか、又は冷床內に仕立つべし、東京近傍の如き壚土にして、比較的寒氣強からざる處にては、數回移植して。其の生長を抑へ、又一方には、多量の肥料を施して、球葉を結ばしむることをなすべし、肥料は移植の際に、堆肥、凡そ三百貫目と、過燐酸石灰五貫目（一反步に對して）とを、混和して施し後ちに、尙ほ、補肥として、下肥を與ふべし。甘藍一般に久く貯るに堪へざるものなれども、冬間は之を移して一處に密植し置き莚等を被へば、略其の目的を達するを得べし。純粹なる種子を得んとせば、充分に他の種類と分ちて植ゑ置くべし、之れ十字科植物の常として、他種類との雜交甚だ多ければなり。又次に注意すべきは春中球葉の上部を切り開くか、若しくば削り取るを要す。又は、球葉を收

穫せる後ち、下部の莖を其の儘に殘し置く時は、能く花莖を生ずるものあり。

○○○綠葉甘藍の球を結ばずして、甚だ盛に成長し、其の高きものは丈け四尺以上に達するものあり。然れども之れ主として、飼食用に供せらるゝなり。此の種の中にて食膳に供するものは極めて矮少にして、葉は縮るを常とす。これは何の地を選ばず栽培せられ能く成長す、されど充分に肥料を與へざるべからず、六月播種して七月移植し、晩秋に至り收穫すべし。又、春收穫すべきものは、八月中旬播種し、九月上旬移植す。○○○球莖甘藍(又は蕪甘藍、或は蘇鐵葉)は地上に出たる莖の部分の膨れて、球狀となるが爲に名く。紫色種と綠色種とあり、共に羮食し、或は、漬物となして食膳に供す、味甚だ佳なり。其の栽培法など凡て通常の球葉甘藍と異なるなし、只だ株間は一尺四寸位を距てば充分にして、可成く狹くすべし、三月より六月の間に播種し、凡そ二ケ月にして漸次に收穫せらるべし、又秋季に播種するものもあり。其の球莖の充分成長したるものは、纖維質の部分のみ增して、大に品質を損ふものなれば注意すべし。

甘藍の一種に○○○花椰菜(コーリフラワー)なるものあり。其の花梗の球狀を爲せる部分を採りて食す土質は輕鬆ならざる沃土を好む、肥料は窒素質のものを充分與ふべし。春收穫すべきものは前年九月に床地に堆肥を被ひ凡そ十日にして發芽したるとき、冷床内に移植し、三月下旬に本圃に植ゆ、距離は二尺五寸なり、四月下旬に至れば花芽を生ずれば、直に外部の葉にて、花球を被ひ包むべし、五月中旬より、六月に及びて收穫するを得べし。夏季收納すべきは、四月初に床地に播種し

一ヶ月後ち本圃に移植す、乾燥の恐れある時は、灌漑を怠るべからず、其の他の注意は前と同じく七月に至れば收むるを得べし、又秋收穫すべきは栽培尤も容易にして、五月に播種し、一ヶ月を經ば移植し、圃地には藁を敷きて乾燥を防ぎ、又た灌水を怠るべからず、斯くて十月に至れば、收穫すその五月より少し後れて、下種したるものは十二月頃迄に漸次收穫するを得べし。

選種せんことは其の雜交の甚しき爲め、容易ならずとす。且つ氣候栽培等の關係より充分結果せしむるを得ざることあり、九月に播種し、春に至りて、採收するものと、同樣の手入れをなし、春に至り其の花球の可良なるものを見計ひて、移植し、開花するに至らば、頂端を摘み去り下部の種實をして充分に成熟せしむべし、木立花椰菜(ブロコリー)は其の莖花椰菜よりは少しく高きも

大差なし。而して其の栽培法も概ね同じ、四月に播種し、十一月に收穫す。前者より、稍大なる故に其の栽植距離なども、少しく廣くすべし。甘藍類の病蟲害とては、中に白蝶の幼虫あるものあり。此の虫は五六月頃出で、、盛に葉を喰ひ、七月に蛹化し、八月に至りて羽化産卵し、九月に及びて再び幼虫となりて、前と同じく、葉を食害し、十月蛹化し其の儘越年す。其の他夜盜虫、蚜虫も多く附着す、病害には、莖の腐敗して、惡臭を放つものあり、他に傳染するものあるが故に、早く採りて燒き棄つるを良とす。甘藍を料理せんとせば、之を取りて四つに切り、一時間ほど冷ある水に浸し取りあげてしぼり、其の堅き部分を去りて、内の柔き處のみを細かに切りて鍋に入れ又鹽を程よく入れて、水を加へ廿分間ほどゆで後ち味噌漉にて能く水を切りて、皿に盛り「ソリ

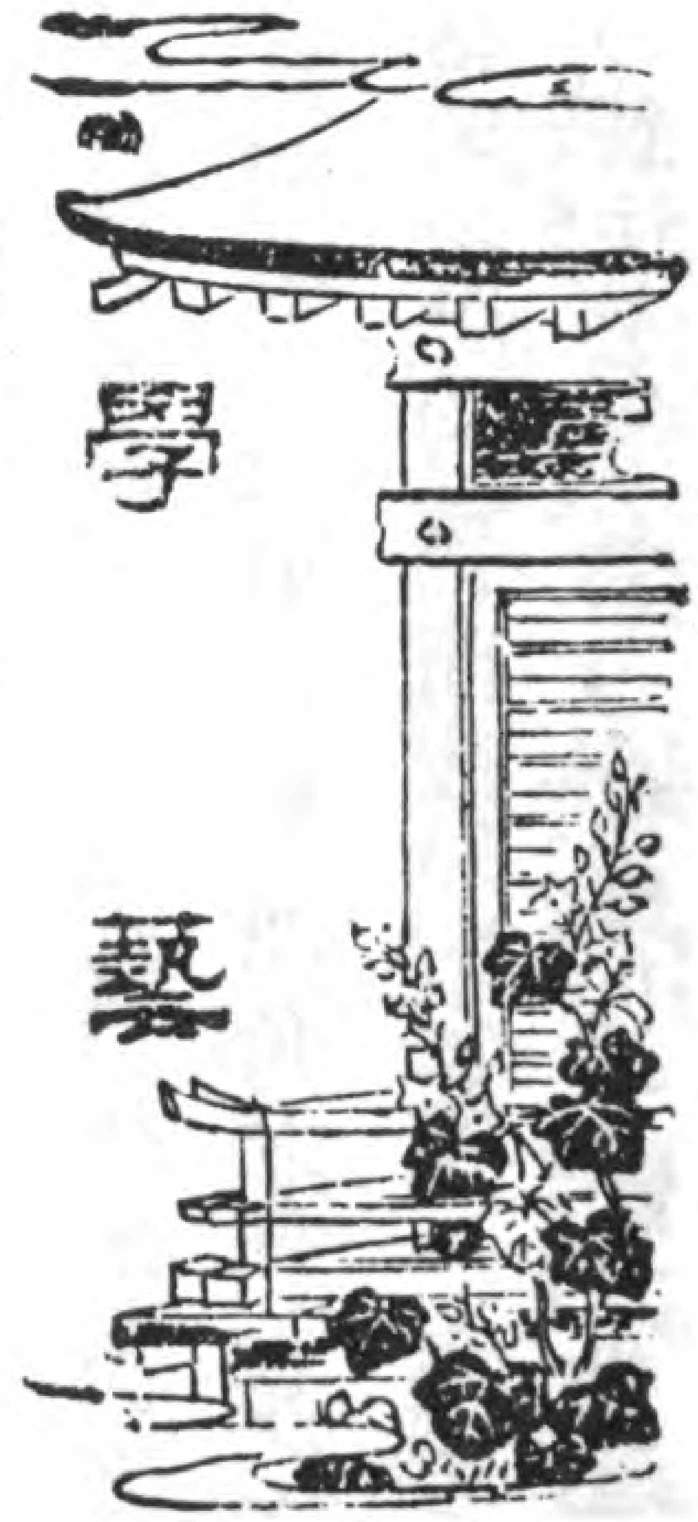
ーム」「ソース」をかけて用ゆ。

獨佛諸國にては、甘藍の鹽漬を作りて、之を賞味す、「シユータルー」と名くるもの之れなり其の法は甘藍球をば、細切して樽に入れ、食鹽を加へ、壓し板を用ひて水分を出さしめて、之を汲み取り後ち甘藍細片全く食鹽にて親和せるを待ちて樽を密閉すれば何處にても輸送せらるべしと、云ふ。凡そ球百二十五個にて百基のシユークルーを得べく、其の價は甚だ高格なり。

家政

衣を着くること、既に久しければ、則ち、垢膩を免れず。須く、勤めて、洗滌を要すべし。破れ綻ぶれば、則ち之を補綴して、完潔にせよ。

（童蒙須知）



國文學講義

井上頼文

紫式部日記講義（十一）

わざとの、御あそびは、殿、おぼすやうやあらん、せさせたまはず。

としごろ、さとゐしたる人々の、なかたえを思ひおこしつゝ、まゐりつどふけはひ、さわがしうて、そのころは、しめやかなることなし。

釋義

○わざと　屹としたるの意

○さとゐ　里居にて、我里方に歸り居ること

○そのころ　當時なり。そのころ、傍註本に、そのいろに作れるは非なり。

○しめやかなることなし　上に、しめやかなる夕暮となるを受て、この頃は、毎日、中宮の御機嫌伺に參上するもの多き故、ざわ〳〵として、靜なることなしと、いへるなり。

譯解

かやうに、音樂などして、御遊の夜もあれど、しかしながら、殊更に、大層ナ、御遊は、殿(道長公)の、何か御考でもあるか、一向なされぬ。これは、中宮の御産の事を心配なさる故でアロウ。

また、年來、自分自分の里方に歸り居たるが、此度、御産の事をきゝつけて、フダン、御機嫌伺をもせず、御無沙汰をして居たる人々が、かやうに、御疎遠に致してはならぬと思ひいだして、われもわれもと、女房たちの參上するさまが、如何にもさわがしくて、當時は、トント、靜かなることが、チットモ無イ。

漢文學講義

佐々木天游

題司馬温公擊甕圖　齋藤拙堂

公之爭二新法一。痛擊不レ遺二餘力一。公之改二弊政一。如二救レ焚拯一レ溺。人皆疑三其不二類平生一。余謂。天下一甕之廣也。億兆一兒之多也。熙寧之爭。元祐之政。一擊一拯之大者也。當二兒之未一レ溺。嬉戲樂レ群。蒻然之狀可レ掬。及レ見二之既溺一。振レ袂攘レ臂。悍然當レ之。此其天性也。然則公之仁勇。既於二丱角之日一見レ之。何必待下登二臺鼎一秉中鈞軸上而後知上レ之耶。

公の新法を爭ふや、痛擊して餘力を遺さず。公

の弊政を改むるや、焚を救ひ溺を拯ふが如し。人皆其の平生に類せざるを疑ふ。余謂ふ、天下は一甕の廣きなり、億兆は一兒の多きなり。熙寧の爭ひ。元祐の政は。一擊一拯の大なるものなり。兒の未だ溺れざるに當りて、嬉戯群を樂む、藹然の狀掬すべし、兒の既に溺るゝに及んで、袂を振ひ臂を攘ひ、悍然として之に當る、此れ其の天性なり。然則公の仁勇、既に丱角の日に於て之を見る。何ぞ必しも、臺鼎に登り鈞軸を秉るを待て、而後に之を知らんや。

司馬温公擊甕の圖に題すで、司馬温公は、宋の神宗と申しまする、天子の時の人でありますが、温公がまだ小供で、年僅に七歳の時に、大勢の子供が、一處に庭上に游んでをりましたが、其の中の一人の子供が、跌ひて、甕の水の中に落込ました、ソコデ外の小供は驚いて、皆ニゲテしまひました、其の時に、温公か石を拾ひ持ちて、其の甕を擊破りて、小供の命を救はれました、ソコデ其の當時の人が、之を畫ひて以て一の美談と致しましたので、我國に於ましても、此圖か往々世間に流布して居ります。ソレが即ち司馬温公擊甕圖で、一口に申しますと、司馬温公と申します所の人が、甕をうちやぶりて、其の中に陷りハマりて居ります所の子供を、助けられました所の圖であります、其の上に題するの文で、題は文體諸式中の一體でありまして、物を品題するの意であります。又題は諦也と申しまして、其の意を審諦にするの義もありますが、先づ品題の意と心得てをれば、宜しいのであります。

さて、司馬温公が、王安石が此れ迄の法令を變じて、新法を行ひましたのを、爭ふて、爭論（宋の神宗の熙寧二年に、王安石と申します人が、此れ

迄の法を變更致しまして、青苗助役等の法令を行ひました、之を名けて新法と申しますので、一時天下が、大變に騷ひだことが、御座ります）致されまするや、侃々諤々として、忠言讜論し、痛擊、イタク攻擊して、新法の弊害を駁擊されまして、餘る所の力を、殘さずして（遺は殘に同じ、ノコスナリ）力を盡して、攻擊致されました、サウシテ又、温公が、ツイへ弊害ある所の政ごと、即ち新法の青苗助役など、申します、人民にツイへ害ある所の悪政を、改革さるゝや、丁度火に焚れて居る所の人を、救ひ助け、水に溺れ落込で居る所の人を、拯ひ援けるが如くに（拯も救に同じ、タスクルことなり）急に手を下して、猶豫なく、ドシドシ、改革いたされました、ソコデ世間の人々が、皆ダレデも、其の温公が、新法を爭ひ、弊政を改められましたる所の遣方が、ハゲシク勢急にして、平生不斷の温厚篤實な、行狀の御方に類し似ずして、中々の過激であると云ふことを、疑ひ不審に思ふて、平生の温公に似ぬ遣方であると、疑念を抱ひて居ります、乍併余自分が謂ひ考へてみますに、別段に、其の平生に類せざるを、疑ふべきものでナイ、ソレハナゼカト云ふと。天下の世の中は、譬へて申さば、一つの甕の廣きもので、天下も一甕も、廣しと狹しとの差別はあれども、其の道理に於ては、少しもチガッタことはない、ソコデ天下は、一つの大きな廣き甕を、みた樣なものヂヤ（也は決語）又億兆の天下の人民は、一人の子供の多きので、一人の子供が、澤山に聚まりて、億兆の人民をなすもので、多しと少しとの差別はあれども、億兆の人民も、一人の子供も、其の道理に於ては、少しもチガッタことはない、一人の子供は、億兆の人民の少ひのヂヤ、ソコデ

ツマリ、天下は一つの甕、億兆は一人の子供と同じことヂヤ。ソコデ温公が熙寧年中に、新法の天下に害あることを、爭論痛撃されたること、又元祐年中に（元祐は、神宗の子、哲宗の年號であります。サウシテ、公は元祐元年に、病を得て、年六十八にして死去なされました）王安石が施こしました、新法の弊政を、改革するの政をなされましたのは、一撃一拯で、撃破り救ひ助ることの、特に大なるもので、即ち天下の大なる甕を撃破りて、億兆の多くの子供を、救はれましたので、理窟は一甕を撃ちて、一兒を救はれましたのと、少しもチガッタことはない、唯其の撃と拯とが、大なるものと、云ふ迄のことヂヤ、ソコデ玆所は天下を一の甕に見立、億兆の人民を、子供に見立て丶、天下人民が、王安石の新法に陷りて、苦しんで居るのを、一人の子供が、甕水中に溺るゝに比し、温公の熙寧の爭、元祐の政を、石を持て、甕を破り、溺れて居る所の小供を、拯はれたるに比したものであります。

ソコデ兒の子供が、未だマダ甕の水の中にハマリテ、溺れざるの時に當りては、嬉戲、ウレシクタハムレ遊んで、大勢の群衆を、樂しみ喜んで、一處に寄集りて、喜び樂んで遊んでおられまして、其の靄然（靄然は盛多の貌なり）として、盛んに樂しんで居られます所の樣子（狀は模樣なり、有樣なり）が掬すべくして、手に握り取らるゝ樣にありて、大勢の子供と共に聚まりて、遊び樂しむで居れます樣が、眼にみえて、和氣藹々と致して居りますが、兒の子供が、既にハヤ、甕の中に落込み溺るの時に、及びありては、袂袖を打振ひ、臂肘を揮ひ攘ふて、袖を捲上、肘を振上て、悍然とタケシク、マッシグラニ、之に當りて、直に石

を拾ひ、肘を振ふて、甕を撃破りて、危難に陥りて居ります所の小供を、拯ひ助けられました、此れが其の温公の天性、オムマレッキデあるのヂヤ、ソコデ公の温厚篤實な平生は、平居事なく、嬉戯樂レ群譪然たるの時と同じことで、痛癢餘力を遺さず、焚を救ふが如く、溺を拯ふが如きは、臂を攘ふて悍然之に當りて、既に溺るゝ兒を拯はるゝ塲合と、同じことであるので、其の平生に類せざるを、疑ふべきものでない。然則ち（然則ちは、上文の意を承て、直に轉ずるの辭なり）サウシテミルトキニハ、司馬温公の仁愛の心と、勇猛の氣とは、既にハヤ、總角を、結ふて居られまする（丱角、詩經の齊風に、總角丱とありて、註に丱兩角貌、男女未ㇾ冠笄曰ニ總角一とありまして。本七八つの子供が、結ふております、總角の兩方の角の皃を、形容して、丱と申しますが、丱角の二字で、子供のツノガミのことゝ、心得ふべし。ソコデ丱角之曰。四字で、（小供の時と云ふことなり）七八歳の子供の時分に於て、之を（之は仁勇の二字を指す）見ることが出來るので、温公の仁と勇とは、七八歳の子供の時に於て、はや知らるゝので、何ぞ必しも（何必は、反折之辭なり、子供の時に知られて居る、ナンデモ台鼎に登り、釣軸を秉られるの日を、ゼヒに待ねでも、知れてをると云ふ程の意なり）温公が成長なされ、出世なされて、大臣三公の重き役に登られまして、天下の政事を、執扱はれまするの時を、待ちての後に、（台鼎、台は三台星のことにて、天の星の名でありまして、詳く申上ますと。上台を司命と申しまして、太尉の官之に當り、中台を司中と申しまして、司徒の官之に當り、下台を司祿と申しまして、司空の官之に當ります、又

す）鼎は、五味を調和するものでありますから、陰陽を調和するの、大臣宰相に譬へましたものであります、ソコデ台鼎の二字で、大臣宰相の重き役位と云ふことゝ、心得ふべし、鈞軸は、國家樞要の政事と云ふことにて、漢書の註に、當レ軸秉ニ國政一也とあり、又鈞とは、陶器師が、陶器の模形の下に、使ふ所のものゝ名あり。ソコデ鈞軸の二字で、國家の政事と云ふことなり）初めて公の仁勇あることが、知らるゝと謂ふものでアロウカ、必しも、大臣宰相によりて、國家の政を秉るゝの時を待ぬでも、既に子供の時に知られてゐるのデアロウと、微しく、婉轉詰問の意を含めて、玆文を結むだものであります。（耶は、矢張疑の辭で。略平哉の二字に相類してをりますけれども、乎哉の二字に較べますと、悠長の趣味を帶びてをります、且微しく、婉轉詰問の意を、含んでをりま

和畫通信講義（第八回）

山崎彩峨

墨にて畫くには、薄墨にて花瓣を畫き、花心は、濃墨にて畫き、莖葉は、總して、薄墨に、濃墨を片端に附して、畫くあり。

彩色にて畫くには、花の色種々ありて、一樣ならず。白色へ赤色の點體なるもあり。表は、深紅色にして、裏は、樺色なるもあり。また全く、白色なるも、黑色なるもあるなり。こゝにあらはしたるは、通常の樺色なる百合花を寫生したるものにてまづ、最初に、雌黄の先へ朱を附して、花瓣を畫き、（花瓣の輪廓をとりし時は、塗附するなり）乾きて後、稍、朱の多量なる樺色にて、點體を打

眼



ち、花心を入るゝあり。莖は、葉裏の色と同じく黄がちの青色、表は、藍がちの青色を使用すべし。葉脈は、墨濃か藍墨かにて入るゝあり。

墨水流燈

布志乃舎　正胤

春のあしたのさくらにも
　秋のゆふべの紅葉にも
優るながめはすみだ川
　夏の夜ながすみやこ島

嗚さ足さは昔にて
　こゝろの赤きみやこどり
水も隅田の川の面に
　うかべる見ることそ戀しけれ

流す燈火あきらけき
　御代のひかりは墨田川
いざ言問ひし面かげを
　今も夜ごとにみやこどり

文林



雨後花　東久世通禧

さくらはなにほひこそそへ春雨の
　なこりの露にひかけさしつゝ

夜花　佐々木高行

咲にほふ花にうかれておもふどち
　そゝろありきに夜は更にけり

月夜に花を見て　高崎正風

更ぬればかすみもはれてさくら花
　さやかにありぬ春のよのつき

月前歸雁　鍋島直大

故郷へかへるかりかねこゑすなり
　おぼろ月夜にかけはみえねと

花の頃故郷の友に　松浦詮

ふるさとの花のたよりそ待れける
　みやこの春にあそひなからも

里春月　水野忠敬

春の夜の月のひかりはかすめとも
　さやかに見ゆる里のともし火

夕暮に遠き花を見やりて　宮地嚴夫

遠方のたかねにはなのいろはかり
　ひとり殘して日はくれんとす

遠村柳　植松有經

里人のいへはかくれてやなきのみ
　たてる野へともみえ渡るかな

春の夕へ山里をとふ　千葉胤明

山里にこよひやとらんこゝろにて
　をり暮しけりはるのさわらひ

野徑蝶　岩崎勝從

飛蝶もはるの野ちゆくおとめ子の
　かさしの花にたはれかはなる

春雁離々　蜂須賀隨子

咲花をみかへるひまにおくれてや
　ひとりなく〳〵雁のゆくらん

行路花　鍋島榮子

こゝろさす方はかりかは行みちも
　又おもしろきはなのかけかな

旅春雨　前田朗子

宿からん里たにみえすうちかすむ
　なはてさひしき春のあめかな

江頭春望　南鄉柳子

うちよする浪も霞みてなには江の
　つのくむ芦にはるかせそふく

漁夫　岩崎寧子

ひくわみの細きつなてや海はらに

世わたる蠶のいのちなるらん

野遊　柳原愛子

わらひをりすみれつむまに暮に鳧
　野へは日影やみしかゝるらん

野春風　小池道子

散花もおり〳〵みえてきゝすなく
　かた野のみのに春かせそふく

霞める空を雁かへる　松平健子

聲はかりあとに殘してかへるなり
　かすみの奥になりにけるかな

霞中雲雀　常盤井文子

春かすみたなひくのへの夕ひはり
　こゑのみ空にわかりけるかな

花見ありきて　服部磯子

さく花にうかれうかれてけふもまた
　夕へになりぬのみちやまみち

春の山寺

松浦辰男

御寺の山の八重ざくら　さきの盛になりにけり
さかば告んの契りある　里の翁にいざつげん
里の翁は山でらの　花のたよりや待兼し
告もあへぬに遙々と　御堂をさして登りきぬ
折しもおろす山かぜに　御法の華とちりかゝる
頭の雪をかき撫て　やがて翁はうたへらく
春は昔の春ながら　人は昔の春ならず
花はむかしの色ながら　ひとは昔のいろならず
ふりゆく者は我身ぞと　あらしの庭に歎きけん
昔の人の心さへ　思ひやらるゝ春の暮
憐れあはれと唄ひゆく　影をあはれと見送れば
花の雲間に入相の　鐘のおとのみ聞ゆなり
あはれ翁よ同じくは　此山寺にやどれかし
やどらば共に春の夜の　花のあはれをかたらまし

南川看梅雜草

小西甚之助

一之瀨

しがらみのかゝるなければいちの瀨の
　非堰こえくるみねの梅が香

尖嶽

とがり嶽ふもとの梅は見の盛り
　肌に針さす風もなき哉

橫井淵

深き香を水に掬はん橫井淵
　よこたふ梅の枝にたよりて

千本梅蹤

茂りあふちよふる竹に言問はん
　千もとの梅の昔如何にと

瀧之宮

うめか香もたきつ岩瀨を瀧の宮
　學ひの神は如何に愛づらん

二本梅（老樹）

ふたもとの老木の梅やいつの世の
　春より匂ひかはしそめけん

大森

やゝうめの花の光の隔たりて
　晝もをくらき森の下道

鮎瀑

臥す鮎の夢も匂はん瀧つ瀨の
　底まで徹る谷の梅が香

霞中鶯

珍しな霞とざせる谷の戸に
　聲おぼろにも鶯の啼く

梅花々底有筧

うめが香のかよひ路とこそなりぬめれ
　筧は水の音づれもせす

幽溪尋梅

ひとおしはひとおしよりもまさりけり
　梅の匂ひも水のひゞきも

瀑邊聞馬鈴

山路ひくきこりが馬の鈴の音も
玉とちりけり瀧つ瀬の水

探梅瓢酒既空

傾きて今は空しきひさご哉
みたしてゆかん梅の下水

河上梅

ゆく水に橋の袂も匂ふらん
梅は咲きけり河上の里

月下擔梅歸

月ともに擔ひて歸る梅が枝は
ひねもす愛でしるし也けり

くさぐ

九州沖繩八縣の教育品展覧會の熊本
市現場を家族どもと參觀して

佐々豊水

沖繩のおくをふかめて八のあがた
はなもみもあるをしへ草かな

第十一回九州沖繩八縣聯合共進會の
熊本市現場を家族どもと參觀して

九州おきなはかけてひきよせし
まかかやく品うづまさにみゆ

或醫師の還暦の賀に仁者壽といへる
心を

松浦辰男

世に壽し惠みの種は今年より
きみに二葉の色を見すらん

七十の翁と六十の媼の賀に

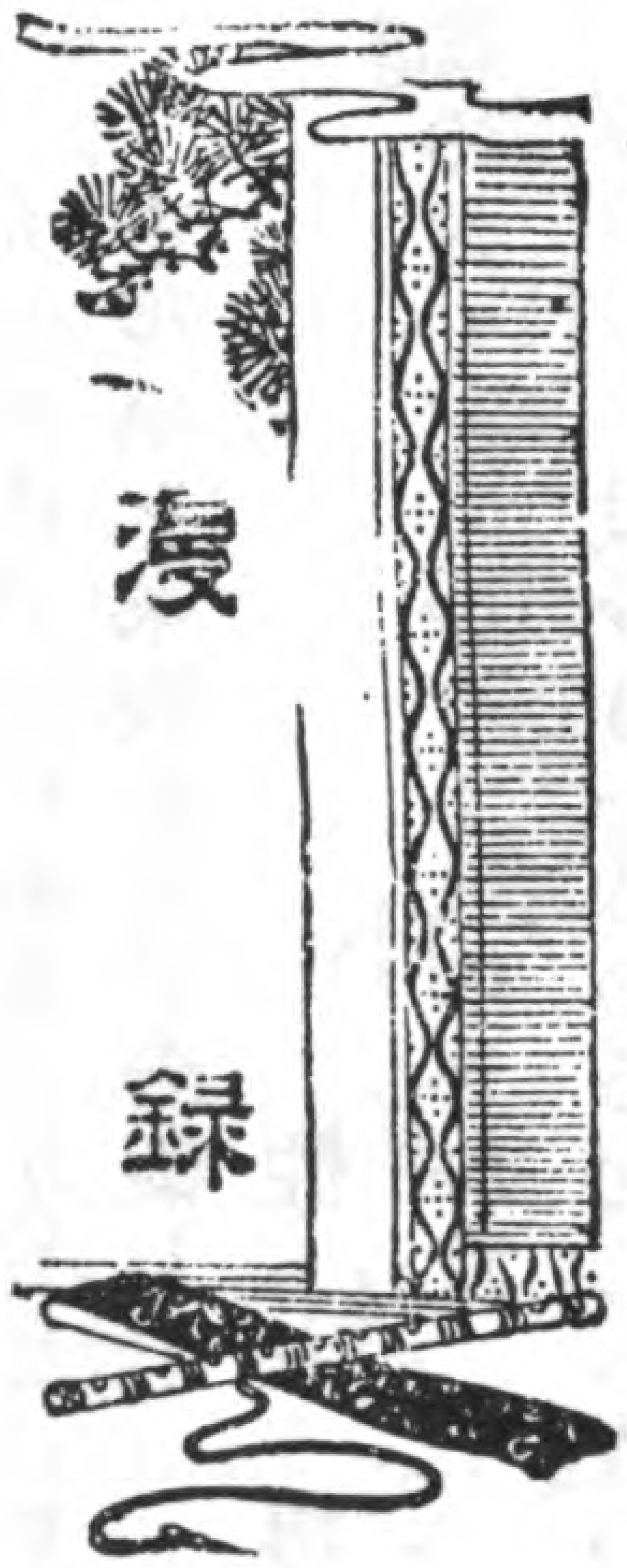
山岡良旗

色かえぬ松の老木も呉竹の
操と共に千代やへぬべき

おなじ

横井曲水

わかゝへる稀なる齢もろともに
千年へぬべき幡豆の友鶴



女訓綾廼雛形（承前）

揖取素彦

一、琵琶は、轉手を右にして渡すべし。撥は、撥面のあたりへはさみて、持つべし。もし渡方にて轉手を、左にして、渡さば、其まゝ受取、右の膝の前に、竪様に立てゝ、左右の手を取りかへて、御前へ持參り、貴人の彈じ給ふ勝手にして、參らすべし。

一、受取渡しの事も、大概前にしるす趣を以て、習ふべし、膳部受取渡しは、倍膳の條に注す、長柄の銚子提の受取渡しは、奥の業に委しく記すべし。

附に、客の從者、主人携へたる品を、主へ渡し給へり。度と申さば、其のまゝ受取、客へ參らすべし。もし土産の品などを、臺に居ゑて出さば、客の前に持參すべし。客云々のよし申されたらば、勝手へ持參り、主へ披露すべし。主客對座の時ならば、直に、主人の前へ進め、少し引退き、つい居て主人の氣色をうかゞふべし。禮謝の口誼畢らば、其の品を持ちて、勝手へ入るべし。若、從者より臺を具せずして渡されたらば、其のまゝ受取り勝手へ入り、相當の臺に居ゑて、座敷へ持出すべし。凡そ受取渡しするによく、向きを見て、披露の都合よき樣に、心づくべしもし向きの都合あしき樣にて、渡されたりとも渡し人の前にて、向きをかゆるはあしゝ、其の

ま丶受取りて、便宜を見斗らひ、向きを直すべし。都べて膳部の手長、或は、披露すべき品を渡すには、受取る人、其のまゝ取りて、居ゑらるゝ様に渡すがよき也。假令へば魚を臺に載せたるが、其の頭を我が左りにし、腹を我方に向けて、渡せば受方にて其のまゝ取りて、人の前にすうるに頭は左りに、尾は右になり、順向きに居ゑらるゝ也。此の心得にて、渡すをよしとす、何品にても、大方これに準じて知るべし。

あそびぐさ（三）

著者不詳

つゝしめるこゝろは、よろずにわたりぬといへどこゝろをきよむるにひたふるなり。

こゝろきよかるものは、しづかにしてすみやかなり、みたさるところなきもの、なにゆくことをなまたんや。

くりかへしかへして、くちすさぶともあかさらんものはめでたきうたなり、うたはそのさまをほしといへど、こゝろあるさまをいたれりとす。

ひとのよしあしみむことをねがふべからず、こゝろまことにきよければ、をのづからあきらかなり、あきらかならんか、ために、きよむるときはきよからずして、またあけなることをゑざらんかし、またをのづからあけなることをしらざるときはくらし。

ひとをみることよしとみて、あしきにうつることとは、すみやかにすべからず、あしとみてよきにうつるは、もとあしからぬがゆへなり。

をよそのこと、さだまりがたきは、こゝろきよからざればならん、このゆへにしづかならずしてよはし。

そらしつけからむはるひのこゝろつねにあらさまはしからぬかは、すべてものゝたすけとやしなひとなれるこゝろこそ、よきのいたりといふべかめれ、そのはるひのこゝろまたはかにあるにはあらず、いたりてきよきこゝろなりとしるべし。

わがかみのみちは、つねにこゝろをしづかにす、そのなかにも、そのこゝろつかひなきにあらじ。」ほかにむさぼるこゝろなければ、うちにをのづからたのしさあり、これをもとむることまめやかにしてうることなきはあらじ。

こるはにこるかたちなりとはいへど、すめらんかこれるときは、たましいきよらなることいたれりひのかみはあめよりもきよし、ひとのこゝろもきよらなるか、こらさるときはいたらず、よはきところあり。

よろづのことをはかるに、をほかたははかられて、こまやかには、はかられぬつねなり、またこまやかにもはからるゝことあり、をほかたにもはかられぬことあり、すゑよりこれをきはめんとせばうべからず、たゞこゝろのそこきよからば、をのづからにして、そのつねにかなひ、あやしうして、そのたへなることをゑてん。

うちとほかとふたつながらを、ひとしうするものは、むさぼりてをのづからのみちをうしなひ、もとをむなしとするもの、またとゞまらずとするものは、あざむきてをのづからのみちをうしなふ、むさぼるものは、みちにあまり、あざむくものは、みも、ちにたらず、あまるものもたらぬものも、をのづからのみちをなすことなきのみちにはあらねど、こゝろはことなり、なせらんさまもまたこまやかにはあたらし。

こゝろきよけれど、ことばにきこゆること、みに

あらはるゝこと、みおをのづからそのゆへきよく、またをばへすしてそのさまきよし。

ひとのをもふたつあり、こゝろをおもひ、かたちをもふ、こゝろはもとなり、かたちはすゑなり、もとををもはざるべけんや、をもはざりせばいやしきおりかへりみおもふはひとのこゝろあり。

しば〳〵をもひおして、こゝろのうちひたすらにやすくたのしきかたにすとも、ひさしくをもひふりたらんは、をほくはあくことおきにあらじ、たたにやすきをもとむるもの、あにつねにしてやすからんや、をもひぬべきは、をのづからのみちあり、やみぬべきにあらぬものは、こゝろをきよむるのことあり。

こゝろのうち、いかばかりつらうして、たちさるおとより、かたふけそしるとはいへど、うちむかへたらんとき、かほはせをやはらげ、ことばをなよひかにするにひとのこゝろのまどへるものは、いろよきをんおおるべし、たゆむことなかれ、こゝろをゆるすことなかれ。

ことばはいつることのやすきものあり、このゆへにをもくせざれば、うしなふことすくおからずよきことをなして、いはんことをば、もとめざる、をはやけなり、いはしとするは、をはやけにあらず。

辛丑(かのとうし)の御代(みよ)

山岡螢雪

(一〇) 紀元五百八十一年

人皇第十代(にんわうだいじふだい)の帝(みかど)、崇神天皇(すじんてんわう)は、先帝(せんてい)の第二(だいに)の皇子(ひこ)にして、御母(おんはゝ)は、伊香色謎皇后(いかゞしこめくわうごう)とおん申(まをし)しまつり御年(おんとし)十九の時(とき)、立(た)ちて、皇太子(くわうたいし)とおらせ給(たま)ひて、

甲申の歳正月、御位に即せられ、大彦命の女、御間城姫を皇后となし玉ひ、皇居を、大和國山邊郡磯城に定めさせ、之を瑞籬宮と號け玉ふ。御在位六十八年、御壽一百十九にをはします、辛卯の歳十二月、かくれさせ給ひたれば、大和國磯城郡柳本村なる、山邊道上の陵に葬り、御間城入彦五十瓊殖天皇と稱へ奉れり。

御代の十八年は即ち、辛丑なれども、古史の傳なく、されど、支那にては、漢の昭帝元鳳元年にして、燕王旦が、兄として、帝位に上る事能はざるを、深く怨望し、桀、安、弘羊など丶、密に帝を廢せんと謀り、却て誅に伏し、又、匈奴が入寇したる凶歳にて、西洋紀元前八十年に當り、彼のスルラが事業を破壞せんと企てたる、レピヅスの、共謀者たる、マリウス黨の首將、セルトリウスが、西國に獨立州を立て、是より有名なるセルトリウス戰爭となり、西紀前七十二年を以て、遂に、西班牙は、羅馬の屬邦となる、悲運に至れる初めなりと。

（一一）紀元六百四十一年

人皇第十一代垂仁天皇は、先帝の第三子にましまし、御母は、御間城姫皇后となん申し、御年二十の時、立て皇太子となり、壬辰の歳正月、御位に即せ給ひて、彦坐王の女、狹穗姫を立て、皇后とし、後亦、旦波道主命の女、日葉酸姫を皇后となし玉ひ、皇居を、大和國城上郡纏向に定めさせ、之を、珠城の宮と號け玉ふ。御在位九十九年、御壽百三十九に渡らせ玉ふ、庚午の歳七月崩じ玉ひたれば、大和國生駒郡都迹村大字尼ヶ辻なる、菅原伏見の陵に葬り、活目入彦五十狹茅天皇と稱へ奉れり。

天皇の十年は、辛丑なれども、同く古史の徴する

なく、支那にては、漢室衰頽の原たる、元帝の後を受けし、成帝の鴻嘉元年にして、薛宣を御史大夫として、丞相に進め、宦官の専恣を除きたれど、外戚の力のみ強くありて、國運日に衰へつゝありき、時は、即ち、西暦前二十年アウグスツス帝がシリアに來り、親ら羅馬領、亞細亞の事務を整理し、後、都に還りて、レクス、ユリア、スムプツアリア即ち禁奢令と、レクス、ユリア、デマリタンヂス、オルヂニブス即ち强婚法などを、發布したる年に當れり。

（一二）紀元七百一年

嘗て、述たる如く、我が朝、天皇の御在位いと長くおはしませしは、孝安帝にて、それにつゞきますは、垂仁帝にまし〳〵たれば、目出度も、御治世の間、二回の辛丑に遇はせ給ひしは、實に、孝安、垂仁の二帝より、外にはましまさず。

されば、垂仁天皇の七十年は、即ち、第十二回目の辛丑に當り、後漢の光武皇帝が、章陵に往き馬援交趾を伐ち、且つ、皇后郭氏を廢したる、建武十七年にして、西洋紀元四十一年、彼のカリグラ帝、即ち、小靴童と呼ばゝれたる、殘虐無道、奢侈淫逸なる、君主にして、加之、自ら神祇を以て居り、或は、無用の甲兵を興して、ラインの沿岸等を紛擾せしめたる、暴君ガユス、ケザルゲルマニクスが、遂に、其の下人に弑せられ、少弟クラウヂウスが、帝位に即たる年なりと云ふ。

（一三）紀元七百六十一年

人皇第十二代、景行天皇は、先帝の第三の皇子にして、御母は、日葉酸姫皇后とあん申し、御年二十一の時、立て、皇太子とあらせ玉ひ、辛未の歳七月、御位に即せられ、吉備津彦の女、針間、稻日太郎姫を、皇后に立て玉ひたれど、不幸に

して、崩去ましませば、後更に、八坂入彦の女、八坂入姫を皇后となし、皇居を始め、大和國城上郡纒向日代宮に定めさせ、後淡海に御幸し、滋賀宮に御代治めし玉ふ。之を、高穴穗の宮と云ふ。御在位六十年、御壽百四十三におはします、庚午の年十一月かくれさせ玉ひたれば、大和國磯城郡柳本村字澁谷なる、山邊道上の陵に葬り、大足彦忍代別天皇と稱へ奉れり。

辛丑は、實に帝の三十一年なれど、記しまつる事なく、異國にては、和帝年尙少なれども、明なり東觀に幸して、諸儒を召見し、且、鮮卑が邊に冦したる、永元十三年にて、耶蘇紀元一百一年に當り、ダキア遠征の第一役たる、彼の、トラヤヌス帝の、ドミチアヌス帝が輸租の曩約を破りて、ダキアと兵端を開き、直にドーナウ河を渡りて、親征を試み、デケバルス王の居城を陷れ、其城下の盟に、割地を甘んぜしめたる年ありとぞ。

（一四）紀元八百二十一年

人皇第十三代の帝、成務天皇は、先帝の第四の皇子にまし〳〵、御母は、八坂入姫皇后となん申しまつり、辛酉の歲立て、皇太子とあらせられ、辛未の歲正月、父帝のおはしましたる、高穴穗宮に即位し玉ふ。

御在位六十年御壽一百七に渡らせ玉ふ、庚午の歲六月かくれさせ玉ひたれば、大和國生駒郡平城村大字山陵なる、狹城盾列池後の陵に葬り、稚足彦天皇と稱へ奉れり。

此の御代の三十一年は、辛丑なれども、亦、記しまつる事なく、支那にては、王侯の半租を貸し、又、劉寵が、司空となりたる、桓帝の延熹四年恰も、宦官の凶威逞ふして、朝に充ち、其の勢極に達したりと云ふべく、實に西紀百六十一年に、

當り、ピウス帝崩じて後ハドリヤヌス帝の典範に依りて、登極せし、聰明活達の譽れ高き、哲學者マルクス、アウスウレリの即位したる年と云ふ。

（一五）紀元八百八十一年

神功皇后は、第九代、開化帝の四世の孫にましまし、御父を、氣長宿禰と申し、御母を、高額媛といふ。御年廿四の時、人皇第十四代の帝、仲哀天皇の皇后に立ち給へり、而して、帝の神去玉ひし後は、彼の征韓の師を起し、御年三十一のとき、悉く平定遊ばし玉ひ、遂に、大和國十市郡磐余の池邊に、宮居を營み、之を稚櫻宮と號け玉ふ。時に皇子未だいとけなくましませば、皇后御自朝に臨みて、政務を攝行し、給へり、斯くて、攝政六十九年、御壽一百歳に渡らせ玉ふ、己丑の歳四月御かくれましたれど、大和國添下郡なる、狹城盾列の陵に葬り、神功皇后と謚を奉れり。

人皇第十四代、仲哀天皇は、御在位九年ましませど、此の御代にはなくて、皇后の攝政廿一年にこそ、辛丑は當りたれ、されど、亦、記しまつる事なく、支那にては、光武帝秀初て、東漢を開きてより、第十二代獻帝に至る、百九十六年間にして、遂に、滅亡したる、蜀の昭烈、章武元年にして、西暦二百廿一年に當り、彼のエラガバルス帝が世人の爲に、カラカラ帝の落胤と誤られて、此れより三年前、即ち、耶蘇紀元二百十八年を以て帝位に上りたれど、政務を悉く后に委ね、自らは、放蕩淫佚を極めたる、其の全盛時代なりと云ふ。

（一六）紀元九百四十一年

人皇代十五代、應神天皇は、仲哀帝第四の皇子にまし〳〵、御母は、氣長足姫皇后となん申し、母后攝政の三年、御年三歳の時、立ちて、皇太子

となせ玉ひ、母后の崩去まし〳〵たるに及びて、御位に即せ玉ふ。時に庚寅の歳正月なり、而して品陀眞若王の女、仲姫を立てゝ皇后とし、皇居を、大和國高市郡輕島に定めさせ、之を豐明宮と號け玉ふ。

御在位四十一年、御壽百十一に渡せ玉ふ、庚午の歳正月崩じ給ひたれば、河内國南河内郡古市村大字譽田なる、惠我藻伏岡の陵に葬り、譽田天皇と稱へまつれり。

天皇の十二年は、辛丑なれども、之れ亦、古傳の徵するなく、異邦にては、晉の武帝太康二年にして、鮮卑が遼に寇し、海内、又、穩ならず、實に、西洋紀元二百八十一年にして、プロブス帝がパンノニアに兵士を役して、道路運河の作事、及び、沼澤の灌漑に從はしめたる、結果、大に其の不平を招きて、シルミウムに弑せらるゝ、前年に當れり。

（一七）紀元千一年

人皇第十六代、仁德天皇は、先帝の第四の皇子にまし〳〵、御母は、仲姫皇后となん申し、先帝の神去ましたる後三年、癸酉の歳正月、御位に即き玉ひ、葛城襲津彦の女、磐の姫を皇后に立て玉ひたれど、崩去の後は、更に、稚郎子の同母妹、八田皇女を立て、皇后とし、皇居を攝津國東成郡難波に定めさせ、之を高津の宮と號け玉ふ。

御在位八十七年、御壽百四十三にをはします、己亥の歳正月かくれさせ玉ひたれば、和泉國泉北郡舳松村百舌鳥耳原中陵に葬り、大鷦鷯天皇と稱へまつれり。

此の御代の廿九年は、辛丑なれども、亦、記しまつる事なく、海外にては、東晉の成帝、咸康七年にして、燕、竜城に築き、勢甚だ盛なり、仍

て、慕容皝を封じて、燕王となせし、西暦三百四十一年、彼のコンスタンチヌス二世が、アキレイアの一戦に大敗を取り、其の弟コンスタンスの爲に、國土と、身命とを、併せて失ひたる、翌年に當ると云ふ。

（一八）紀元千六十一年

人皇第十七代、履中天皇は、先帝の皇長子にましまし、御母は、磐の姫皇后となん申し、御年廿五の時、立ちて、皇太子とならせられて、庚子の歳二月、即位し玉ひ、仁德帝の皇女、草香幡梭姫を立て、皇后となし、皇居を、大和國十市郡磐余に定めさせ、之を稚櫻宮と號け玉ふ。

御在位六年、御壽八十七に渡らせ給ふ、乙巳の歳三月、崩去まし〳〵たれば、和泉國泉北郡神石村大字上石津なる、百舌鳥耳原の南陵に葬り、大兄去來穗別天皇と稱へ奉れり。

天皇の二年は、即ち、辛丑にして、始めて、玆に至りて、記し奉る事あり。そは、皇弟瑞齒別皇子、嘗て、住吉仲皇子の亂を、平げ玉ひし功により、寵眷甚だ渥く、遂に此の年をもて、皇太子とならせ給ふ。これなん、第十八代の帝、反正天皇にをはしましき。而して、唐土にては、呂超が其の君を弑したる、東晋の、安帝隆安五年にして、國内亂れて、麻の如く、西紀四百一年に當り、まことに、ヴィシゴスの王アラリックが、勇猛の輕騎を驅て、以太利に侵入したる、年なりとぞ。

女子要書解題（遠の部追加）

三浦千畝

女今川　一卷

著者詳ならず。元祿十三年の刊行なり。澤田

喜知といふ人の序に『此の頃或人の書し女今川を看るに、昔し貞世朝臣の記し置れし筆のすさみに準へて、戒の品々を著せり云々』と見えたり。此の書女兒手習の初には、必ず讀本にも手本にも資したれば、女大學女中庸等と同じく、各地の書林にて、幾板となく刊行せられたり。予所持せるは、正德四年の板にして、上下二卷あり、上段には、女子の教訓種々書きつらぬ、所所繪を入れたり。又元文二年のもあり。

女今川姫小松　一卷

女今川を本文にして、種々女の教訓、又心得の事がらを附記し、繪を入れたるものにして、女大學寶箱、女中庸瑪瑙箱などの類なり。

女仁義物語（繪入）　二卷

作者詳ならず。著作年代は、いづれ元祿以前のものなるべし。漢字を交へず、凡て假名のみにて記せり。繪も例の元祿風のものにて、可咲記などのさしゑに似たれば、此の書も、淺井了意（本朝女鑑の著者）などの作にあらじか。

この書は、物語躰にして、先づ『はるさめのふりすさぶともなきつれ〴〵に、みやづかへする女房、いとま有けるにや、三人あつまりてこしかたゆく末のものがたりして云々』と筆を起して物語の中に、一老人出で丶、道の不審を問ひ、一人の女房それに答へて、敎訓の旨を述らることなどありて、凡て儒道の仁義五常の物語なり。卷末に『此の物語は、女四書の義理によつて、假名にかき、女仁義物語と名づけ侍る』と書せり。

女源氏教訓鑑

享保六年の刊行なり。自序に『光源氏六十帖を抄にして云々、女童の爲、此の卷の大がいを注

して、あらかじめをしらし、又は畫圖の上に、本歌を大字にして、よみならはしのたよりともなし、其の餘りは、女敎訓の圖、或は諸禮、法式いましめをのす、女中不斷此のさうしにむかい、心をあらためしめんと、敎訓鑑と題をすへ侍りぬ。浪花住、『山朝子』とあり。此の書卷頭に女風俗敎訓圖、女敎訓寶草、七小野物語歌の詠方、年中行事など、かれこれと二十葉ばかりあり。又上段には、女諸敎訓繪抄、四季の歌畫、諸病の藥方、献立など、雜々かきつめたること、當時通俗を旨とせし、他の女訓書類と同一なり。

女用文章糸車（繪入）　一卷

明和九年浪華にて刊行。作者名をあらはさず。畫工は北尾辰宣なり。此の書發端三十枚ばかりに、女中風俗品定、女いとなみ草、女手わざ草、女中大和詞、文の道しるべ、薫物の方、婚禮畧式敎訓おきな草など、なほ多く記し、上頭には、四季をり〳〵の心得をかき載せたり。凡百枚ほどの冊子にして、每葉繪あり。元來女子のものに、何用文章、くれ節用集といふが多し皆大同小異なり。故に他は略して掲げず。

各國婦人の特色

三石直方

▲他の長は、貪て我が短を補ふべし。他の短を以つて、反省の料となすべし。

▲たゞ我が長をすてゝ、他の長短をあはせるとの愚をなすべからず。

第三章　佛蘭西婦人

（其の一）　佛蘭西婦人の氣質

佛蘭西婦人は、曾ては、毫も、相知らずして結婚するものが多い。而も、結婚後の趣味は、頗る

濃に、四十、五十と老り行くに從つて、趣味は却つて加はる樣である。此の點は、夫の英國婦人等が、十年も二十年も前から結婚豫約をして、其の豫約間を無上の樂とし、一たび結婚すれば、趣味も何もなくなる樣なとは、比較にならぬ。元來、佛蘭西婦人の守本尊として、當時も、注意を怠らぬのは、如何にせば良人の好意を加へむか。如何にせば容姿の佳くならむか。如何にせば世の人に勝れて見えむか抔にて、例之ば、衣服の如きも、一週に數回取換へ、結髮化粧より、其の他、一身一家、凡ゆる調度裝飾等、常に、怠りなく其の趣向を新にすることを努むるなり。是を以て、佛蘭西婦人には、長く接すれば、接する程趣味が湧いて來る樣である。全體四十以上になれば、如何なる婦人も、花の盛りを經へ、薩張見榮のせぬものだが、佛蘭西婦人に限り、之とは反對で、其の一擧一動は更なり。其の容姿も、一際目立つて來る。

抑、佛蘭西人は、男女を擇はず、總て、敏捷活潑で、華奢を競ふの風は、先祖傳來とも云ふべく。殊に感情に富める婦人のこと〻て、其の度も餘程高いで、其の弊も多い樣だが、其の中を得た婦人は如何に、裏家の瘦世帶を持つとも、常に綺麗洒灑として、寂しさ、苦き態を見せない、位で、其の生活の程度の高まるに從つて、其の處作は益々立派だ、今日佛蘭西の流行と云へば、世界の貴婦人令孃が、一も、二もなく目を張り、耳を欹て〻、其の流行に後れんことを、虞る〻計りであるが、畢竟は、怜悧敏捷なる、佛蘭西婦人の面影が、其の流行には、寫されたので、佛蘭西の流行を能く注視すれば、自から、其の婦人の氣質も見え透く樣である。

（其の二）　佛國婦人と教育

佛國人は、由來意氣に逸り、流行を競ひ、華麗を好むの特質を備ふ、而して、是等の特質を生出す所の母體たる、女子教育は如何。

現今の統計上、普通教育の下に、女學校を設けざる町村、猶三千餘あり。高等女學校は、各地大概配置よく設けらるゝものゝ如し。大學教育は、夙に開始せられ、殊に、巴理大學に學ぶの女子最も多く、現今同校に業を卒えし女子の數は、二三百名を下らざるべし。而して、其種類は、理化學、醫學、技藝等に最も多く、他は、文學等を修むるものあり。

佛國婦人は、獨逸に於けるが如き、壓抑を受けず、即ち、政界に、實業界に、比較的自由を束縛せられざるが如く、教育上にも、自由を得たり。而して、世の論者は謂ふ、佛國女子の發達は、政治上より來り、或は、政界の渦中に利用せられ、或は、其の反動として、有害視せられし事實ありと、其れ然る乎、左に掲ぐるは、(教育公報第二百八十號)にあり、亦少しく、中等教育の、一班を窺ふに足らむ。

○佛國の女子中學　佛國は、第二帝國の滅亡後、女子の教育事業に對し、著しき設備をなせり「佛國の少しく、聞えたる都府にては、女子中學校の設けあらざるはなく、如何なる都府にも、必ず一個の女子中學校を有し、巴理には五個ある上、今六つを建築中なり。

凡へて、佛國の中學校は、巴理のアカデミーにて監督し、女子の中學をも同しく、此所にて監督す。此舍長は、モンシール、オノターブ、グレアー氏にして、氏は右の「アカデミー」會員の一人なり。右等、女子中學の學生の三分の二は、寄宿生なり。是れ、佛國にては、強く寄宿舍に入らむことを要求すればなり。唯巴理にある分は、寄宿生を受付けず。其生徒數は、一校大抵、二百人より五百人の學生を有し、巴理には最も古きは、フェヌロン中學にして、拉丁町にあり。モシーン中學、モリエール中學、ラマルチン中學、ヴヰクトルユーゴー中學の如きは、皆最近に開かれたり。教授には、男子、女子ありて、假りに總計四十人ありとすれば、内五人は、男子、三十五人は女子なり。中學には何れも、教員の休憩室附屬し、之につぎての留守居あり。又若し必要ある場合には、一二の書記あり。此女子中學には、豫科、本科の二個ありて、

十二歳より十八歳までの女子を教育し、此所を卒業したるものは、巴理大學の神學部に入ることを得。科目は倫理、物理、化學、解剖學、生理學を必修課とし、編物、圖畫、音樂、體操は隨意科なり云々。

○佛國大學女生徒近况一班　佛國大學評議會の最近會議に於て、朗讀せられたる、過ぐる學年に關する、文部大臣への報告中に、大學女生徒の、各大學部に於ける、成績益々良好なる旨を報じ、而して其學科別、及内外の員數を示したるを見るに、大要下の如し。醫科大學の女生徒は百廿人に下らす、此内、佛國人二十九名、及外國人百名にして、更に之を國別にすれば、露西亞人九十一名、羅馬尼人五名、獨逸人三名、瑞西人一名、英國人一名なり。

左れば、此部に於ては、外國人の方、佛國人よりも遙に多し。然れ共、文學科の全體、(即ち純文學、歷史、哲學、今語)に在りては、佛國女學生は二百六人にして、外國女學生は、獨、露、米等合せて五十七人なり。法學科を修る女子の數は、至って尠く、即ち佛蘭西全國に七人、及巴理に四人、(内佛國人二、露國人二)を算するのみ。理科大學部は、稍多くして、三十五人を算し、此内佛國人二十一、外國人十四なり。最終に藥劑學を修むる女子二十人あり。内十九は佛國人にして、外國人は僅に一人なり(日本)。

(其の三)　佛國婦人と家庭

兒童を教養し、良人に事へ、賓客を送迎し、奴婢を使役し、且つ衣食の世話まで殘る方なく、一々秩序を立て、家庭の整理に、鵜の毛程の非難を打たしめざるは、佛國婦人の特色にして、特に、兒童の教養に至つては、英國等の如く、一面には、秋霜の凛として、樹木を染むるの觀あるも、一面にも、春風の百卉を蒸すに似たるあり。左れば、兒童の出生して、小中學を卒へ、大學を卒ゆる迄、常に精細なる注意を怠らず、若し其の兒が、身體強健にして、活潑なれば、軍人に、辯舌壯快にして、交際巧なれば、外交官に、其體軀性質の適する所に隨つて、立身の方法を研究し、又、其の兒に過失あれば、理を說き、非を擧げ、諄々として、其の之を再びせざらんことを、警しむ。上流の家にあつては、幼兒を保姆に一任す、保姆は旣に、其の母より育兒の全權を委任されたる以

上は、十分に責任を負ふなり。故に語を敎へ遊戲を共にする時に於けるも、一旦其の兒に非ざれば、嚴格に之を矯正す、而も實母は其の間に嘴を容れず。兒童の專ら、保姆の手にある間は、極めて粗服をなす。（保姆の服よりも劣れり）而も兒童の敬意は、實母に次ぐ。

保姆たるものは、多く保姆學校を、卒業せしめしものなり。此の學校にては、衛生敎育禮式、各國語等を敎へて兒童敎養に耐ゆるの資格を陶冶す。

抑、佛國婦人は、万事に拔目なく、其の家庭に於けるも、一見、誠に美なるが如きも、稍非を繕ひ、短を掩ひ、頻に外見を飾るの傾あり。實際は英國の如き堅實靜肅の家庭を築く能はず、而も之れ、佛國婦人の長短を併せ視るを得べき所ならめ。

詠史百首（加藤千浪作）評論

海上胤平

柿本人丸

あふげたゞ末の世にしも山柿の
　本のこゝろの高きしらべを

本の心といふことは、古今集、石上ふるから小野のもとかしはもとのこゝろはわすられなくにとある如く、境界は、さまざま轉變るならひなれど、本性は忘れぬとなり。されば、其の人のたてたる本心なくては、もとの心をといふ事、詮なし。人丸、いかなる本心ありけむ。僻言なるべし。其は、しばらくおきて、此の歌、あふげたゞとあれば、鄙劣のしらべを捨てゝ、高尚の調をあふげとにや。されば、つとめて、高調を習ふべきを、自己の歌のいかにぞや。百首のうちに、一首として見るに足る歌なし。おのれ

を顧みよ。

和氣清麿

すべらぎの神の御筋のたえせぬは
　君たゝれしによりてありけり

清麿の筋をたゝれしによりて、神のみすぢの絕えせぬといへるにや。いとふつゝかなるいひざまなり。道鏡を愛し給ふ御心まどひのあまり、いとあるまじき思召もありつれど、皇統の萬代に絕えたまふべきことわりならねど、清麿の朋れしによりて絕えせぬといはむは、なか〳〵に、かしこきいひさまなり。はた、君がたゝれしとばかりにては、何をたゝれしにか。聞えがたし。其は、二句の御すぢにかけて、足の筋をきかせたるにや。さては、神のみすぢと足の筋と混合して、いよ〳〵、ゐやなきことなり。はた、皇統を御筋といへる例もなければ、甚じきひが言なり。

田道

國のため消えのこりたるたまのをの
　長きうらみやおろちなしけむ

消えのこりたるとある、こは、なほ消えずしてといはざれど、かなひがたし。結句おろちとあるは、假字たがへり。さて、をろちなしけむとは、こゝろゆかず。なすは、如しといふ意なり。田道の忠魂をろちとなりて、あだをなやましたるなれば、をろちとなりけむとこそいふべけれ。さては、また、文字あまして口惜し。ながきうらみといへるもをさなし。恨に、長き短きなどいふべからず。

浦島子

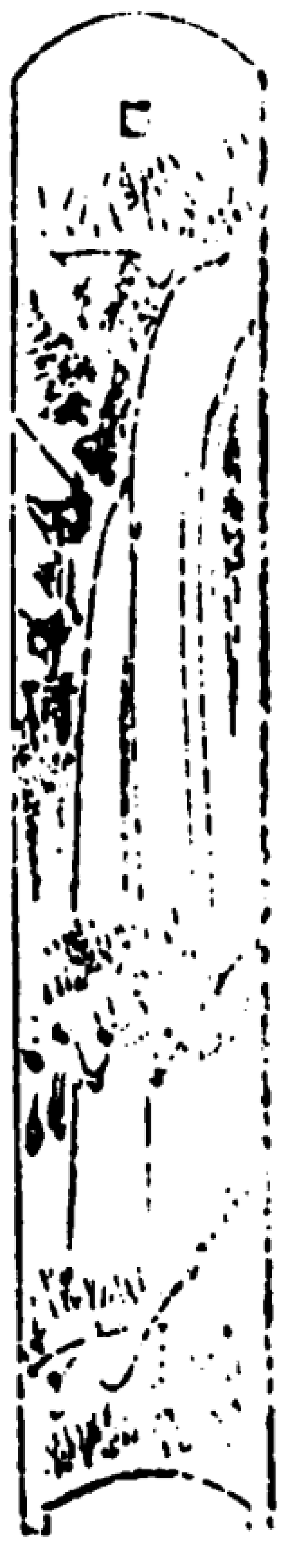
玉くしげあくるくやしとなげきても
　かへらぬ水のえにこそありけれ

あくるくやしとは、現在なり。さては、かなふべからず。こゝろにては、あけてくやしきとあるべし。また、みづのえをいはむとて、かへらぬ水のえになどいへるも、いとつたなし。

聖徳太子

人の世はたゝさめぬ間のたのみぞと
　夢殿をさへつくりましけむ

人の世はたゞさめぬまのたのみぞとある、こは、作者の意は、衆生不覺の世をたのむならむ。されど、夢殿をつくりて、さとしたまふといふにや。覺不覺の語は、佛敎に、專らいふ言なれば、この皇子を詠み奉るにはよき詞なれど、例の、いひなしつたなくて、まぎらはし。



曲亭馬琴が眼中に映ずる女性を論ず（其の廿五）

白松園主人

母は入り來りぬ、園花は驚き慌てぬ。きのふ今日は、寒も殊更におぼゆるに、久しく病みておはしながら、さ夜更けて何をかし給ふ、流るゝ水に心あれど、落つる花には心なしとか、鬼々しき牛七を、なはいとほしみ給ふから、母の心も安からぬかし、半夜人なうして獨座するは、近頃頻に風聞ある、牛七の消息にこそ起因するならめ、父の激怒いやまして、牛七を捕縛して憤をはらさんとし給へど、遮りてなだめおきぬ、語るは今が初めなれど、おん身が五條に嫁りし時、牛七がおん身に、ゆひなづけの女子ある事を告げし事は、その時立ちぎゝして、之を知れり、よりて思ふに、牛

七が今携ふる女は、嘗つて盟ひし女子には、あらずや、果して然りとすれば、年來の罪科は半七のあやまちのみに非ず、よくも討究せずして、婚を結びし、親と親との過といふべし、但し主君の免許を受けし、おん身は半七が正室なり、半七大和に歸來するを得ずとも、婦は夫に從ふは、人間の常道なり、たとひゆひなづけの女ありとも、そは半七私緣の人なれば、少しも憚るべきに非ず、ひそかに道理を述べて、おん身を浪速なる、半七のもとに送り遣さんと思ふなり、いと狹き心もて、必ずよからぬわざをして、歎きをなまさせ給ひそ、おん身が操は燒野の雉子、母が心は夜の鶴、夫を思ふも子を慈むも、いづれか劣りいづれか勝らむ、などいひ、慰めいひ諭し、以て殘軀病羸主なき園花、孤舟の嫠婦、空閨の孀女にも似たる彼が女兒に、起死回生の妙藥を投せんとするなり、然り園花は半七と共に住み、半七と共に無事なるは、醫師が心を碎ける妙劑よりも、更に大々的效驗あるなり、しかも關雎の德、貞靜の美ある淑女園花は、浪華に行く事を肯せざりき、否行く事を肯せざるに非ず、他の女を排して夫を爭ふ事を肯せざるなり、權勢を負み威を笠にきて、彼の忌むべき嫉妬を逞うするを好まざるなり、自巳の愉快、一身の愉快を成就せしめて、隣里鄕黨知己の朋友に爪彈せらるゝを耻るなりき、乃ち園花は潸然として泣き、儼然として容を正し、母に向ひてその思ひもよらぬよしを辭し、その救はんとして、却りて陷るゝに等しき、母の無情をなげきて曰く、

おん慈愛の深きにも、なほ躬の不孝は啣たれて、さかく申さんやうはなけれど、半七ぬしの事のみは、親にも身にも、寐にも、かねていさしく思ひ寐の、つれなき人を夢にのみ、はや七年を過せども、はじめより嫌はれし身を阿容〳〵、

浪華までゆきて恨をいはるべきか、況て仇なる舞々の、浮世に色香ます花の、三勝どのゝ園花を、たとへていはゞ深山木身のなる果をかさだに、聞に知らせて笑はれなば、耻の辱にて侍りなん、又理と責られて、只假初の捨言葉かけらるゝとも子さへ、妹夫の中を引裂て、姑婦と世に疎まれ、綴目の合はぬ蝶番、閨房の屏風の立つよしもなくては、連添かひもあらず、世にも人にも捨てられし、冬の扇の骨ばかり、綱觀ひてありながら、われから俆かれに彼所まで、ゆけとの宣ふは情なし、只願はしきは彼人に、異なる事はあらずして、いく百年も世に榮ひ、吉野の花の咲く頃は、大和の事も折ふしは、思ひ出して給はらば、身の後もいかばかり嬉しく成佛いたすべし。親に先だつ不孝の罪、ゆるし給へと合す掌に、漲り落つる涙の瀧布、岩にせかるゝごとくなり……

親耻かしき貞女の金言、その心腸肺肝は、何人といへども決して動かすこと能はざりき、その决心の鞏固あると、その節操のうるはしきとには、その母の敷浪をしてそゞろに、感動せしめたりき、……母親はわが身に思ひくらべつゝ貞女兩夫に見えずと口には云へど始めをはり、惜ならぬは世の中の、人ごゝろにてある者を、親も及ばぬ心操を、言の葉末の露ばかりも、いひしらされば彼の人の、しるよしもなきぞかし、母があしうは計はじ、何事もうち任せ給へ……

即ち敷浪は、長子曾太郎は半七の友なれば、さきに之の事をかたらひして、自ら浪華の長町に赴きて、半七にあひて之の事を告げんといふよしを、語り聞かせてあはいふやう、おき去りに去られても、夫婦の縁は切れしに非ず、とかくに曾太郎の歸るをまちて、事の吉左右を知り給へとて、漸く園花の自殺をば、思ひ止まらしむる事とはなしぬ。』約の如く、曾太郎は浪華に赴きぬ、折を得て半七を訪はんと思へる時、半七は不慮の災禍にあひぬ、即ちさきに兼て借りたりし、厚倉二郎太夫へ返へすべき金子三十金を、半七夫婦並に平三とが心を砕きて辛苦艱難の結果、漸うに蓄へて、明日は平三が携へて奈良に赴き、義の爲めに厚倉へ

かへさんとて、財布をうちひらきて皆集ひて之を改むるをりは、恰も薄暮の頃なり、然るに以前奈良を追放せられし、全八蝶九郎の兩兇は、このあたりにさすらひて、惡行のみ日を逐りしが、近頃半七の居所を聞き知りて、半七を殺し三勝を奪はんがために、よひのうちより伺ひをり、遂に一人は金を奪ひて走り、半七平三の之を追ふはしに、一人はあとに殘れる三勝を挑み、その聞かざるを怒りて、お通をかい摑み相合橋といふ處に至りしを、三勝は追ひてこゝに來りぬ、子を質として迫れるあり、半七は恰も、一兇を追ひて此の處に至り、一兇を傷け一兇を斬つて兩斷となしぬ、されど此の爭鬪の騒ぎのうちに、お通は、再び知らぬ人の奪ふ所となりぬ、是に於て夫婦平三等は皆共に、悲泣哀傷いふ所を知らず、平三半七は留りて此のわたりを探り、且はお通を求め、且は一兇を求めてその金を取りかへさんとし、三勝は先づ歸りてその消息をまたんとて、泣く〳〵その宿にかへりぬ。一家の騒動湧くが如く、茫然として夢ならぬかを疑ふばかりなれば、半七は再び激して、若し此の凶事を吉にかへすこと能はずば、自殺して塵寰の懊惱を逃れんことを期するありき。

かくてその夜も明けはなれ、冬の日影は短きに、長き別れの悲しくて、三勝は只ひとり、わが子の爲に焚る香も、烟となりし夢の跡、家佛の障子引開て、しばし念じて父もとの、地爐のほとりに座を占めて、形なき世に消殘る、身は埋火さしむかひ、胸の鏡もうち曇り、さぎなき宿の物思ひ、この憂き浪華津に、今をはるべきこの花も、昨夜のまゝに歸り來ぬ、夫と父はいかにぞと、いさ長町に待わびて、心おちゐぬ冬ごもり、いさゝむら竹吹く風も、夕ぐれ近くなりにけり。

かゝる處に、武士の妻らしき人、轎を扛し從者をゐて、三勝の家を訪へり。

……鍵屋さんはこゝなりや、物申さんとおとなふを、三勝聞

けども出でも迎へず、錢屋はすなはちこゝなれど、幸なき事の侍るによりて、父も夫も家にあらず、もし假毛を見給はんとならば、明日またきませと計りに、饑に迫れは生業も、誰が爲にせんとひとりごつ、門なる女房はこれを聞きて、轎をかきおろさせ、從者らをそこに待せおき、ゆるし給へといひかけてつと裡に入りしかば、三勝は思ひがけれぱ顏うち赧りまづこなたへと請するを、固辭もせず上座に、居かはるも訝しく、いづこより何事のおはしまして、訪はせ給ふやらむ、門開きたがへ給はずや、

三勝は突然此の夫人の來訪をうけて、思ひ惑へるなりき、先づ聞かんとするは、そのいかなる人の妻たるかなり、然るに彼は却りて反問せり、

とおもはるゝも理なり、半七は家に居給はずとか、そなたは兼て聞及ぶ、もとは都の大桁、笠屋三勝どのなりや、

問はれて、三勝は胸うち騒げるなり、

宣ふ如く舞々の、三勝はわらはに侍り、と答ふれば、膝をすゝめ、聞きしにまさる縹致よし、物云ひざまにて怜悧さも、思ひやられ侍るかし、さばかりにてはなほいぶかしく思ひ給はん、わが身は彼のそなた故に、不忠不孝の人と呼るゝ、赤根半七が父、大和國緇井家の一の老臣、磯松典枝が妻に侍り、

彼は恰も、夜來の疾風暴雨のために、花碎け枝折れて、蕭條狼藉たる景に對するが如く、また盧生が邯鄲の旅舍に於て、夢醒め事去りて、茫々然たりしが如き折から、更にまた霹靂一聲、千萬の雷一時に落ちかゝりしが如き音を耳にせるなりき、わ●●●●●●●●が身は彼のそなた故に」の語を聞きたる三勝が胸中はあはれ果していかなりしならむ、彼は僅に左の語を放つことを得たり、

三勝は顏赧やかに、何となく轟く胸をおし下げて、さては夫の物がたりにて、聞き及ぶ圖花さまの母御にてましますか、涙華の蕊も枯れはつる、年の終りにはるばると、訪はせ給ふは故こそあらめ、………

（以下次號）

一夕話

大宮兵馬

十七の歳(安政五年戊午)春の頃、所司代附の與力に、大野應之助といふ人の、訪ひ來ることありき。己れ、茶など持ち出でて、進めしに、こは先生の御姪子にて、おはしますにかと、問ひたりしに、叔父君答へて、まだいと世なれぬものに侍り、さる方へ躾見習に參らせんと思ひつゝ、今日までかくて打ち過ぎぬるを、いかで御計らひにて、善きにものし給ひねと、仰せられぬ。其の後、程もなくこの人より、迎へにおこせたれば、やがてわたりぬ。

己れ、客分に大野の方に養はれて、在りしが、かくて、半年ばかり經て、九月九日の曉に、赤根武人より頓の事とて、使して文おこせたり、打ち驚き封おしきるに

昨夜叔父様御事幕府の御疑ありて召捕られ給ひたり返す〳〵も御身の愼み肝要の事に候

と、あり。夢にだに、いと思ひも寄らぬ事にて、悲しみ惑へること、限りなし。折しも大野いひけるは、御身をかくまひ置かんこと、今は世に憚りおほく、心にしも之任せがたし、暫しが程吾が同族なる、何某の家にかくれわたり給へとて、せきたてつ、いかになりゆくべき身にかと、われにもあらず、怖ましかりき。

さても、此日は、大野が下婢を召し連れて、北野の天神に詣で、叔父君の身の安全を祈り、又、錦の天神にも詣でゝ、御鬮を請ひ受けしに、

雷は、庭前の艸間より起る云々、解に云く、石も玉となる前はに、見分けがたきものなり。昔は唐土に、下和といへる人あり、此の事ゆゑに

足のつり筋まで截たゝれ、迷惑したれども、三度目の帝より、罪科あらはれて、寶の玉とは知られたり。命さへあれば、殘枝花も咲く時節に逢ふこともあるべし。

と、いふことの籤を得たり。いと果敢なきことなれど、身にあたりて、悲しかりし折の事にしあれば、今も忘れず。

次の日には、大野應之助が同族なる、大野市右衞門といふが、許に移りたりしかども、今は囚人の姪なりと思へば、昨日にかへて、肩身も狹く、萬づに心置かれつゝ、たゞ下婢のわざをば、己れが日毎の務とせり。

さてある程に、叔父君の弟子にて、堺町四條上る所に、松井周藏といふ醫師あり、一日己れを尋ね來て、叔父君の召捕られ給ひしは、其の勤王正義を唱へられし、意趣がいたく幕府の意に逆ひたりしありとて、其の由を委しく語りけるにぞ、いよいよ心置かれ、此の家にも、在られじと、心許無くて、其の日の暮方より更に、松井が家には移りゆきける。松井が妻の峯と呼べるは、過ぎにし年頃、叔父君の家に、下婢にて仕へし者なるに、今は己れ其れが下婢の業ども執りて、明し暮らせりその折りしも若狹より上りて、此の家に宿り居たる大工どもゝ、己れが身のつらさを見て、口惜しと思ひたるさまなりき。かゝる折りにても、時々訪ひ來て、己れを慰めつるは、播州の大高又次郎、長州の野村和作(十七才ばかりなりき)などいふ人々ありけり。

己れ日に添へて、仕合はせいと拙く、身を寄せんにも、果敢々々しき所なく、松井が家にも、久しく留るべきにあらねば、今は何處へなりともたゞ奉公せばやと、思ひ定めて、其の由をば松井が妻

に語りたるに、或夜其の峯は、己れを連れて、西本願寺の別院なる、淨樂寺といふに至りて、只管然る旨を頼み入れたれど、梅田の姪にては、留め置かんも憚りありとて、遂に承けひくべき樣もなし。更に他家に奉公せんと思ひめぐらせども、身の受け宿にさへなるべき人もなし、かねて親しかりつる者だにもかくては、己れに詞かけず途にて逢へば、皆な面をそむけて、見ざる樣にぞもてなしける。

女子の尊むべきこころは、其の美麗なるに非ずして、其の程好きことと、其の卑なきことと、其の德の潔白なるこころにあり。（エヂソン）

學識を有せる惡人は、利刀を持てる小兒の如し、自から傷つけ、且つ他人を害す。（ゲイ）



小石川幼稚園

田山とり子

園主山田千代子女史は、東京師範學校の出身で、嘗つては、高知縣師範學校に奉職せられたこともある方なさうです。明治十九年に、今の地即ち、小石川區小日向水道端町に私立幼稚園を創立せられて、爾來十有餘年、一日の如く、熱心に、幼兒のために盡されて居らるゝので御座います。記者の訪ひし時は、早、園兒の皈つた後で御座いましたから、この度は、たゞ、園主から承つた談話の大略を紹介いたしておきます。

わが國の幼稚園

皆樣も御承知の通り、西洋の方では、下等社會の幼兒を敎育してやらうといふ目的から、この幼稚園といふものが、發達してまゐつたものださうで御座いますが、わが國の幼稚園は、全く、中等以上の人々のために設けられてゐるやうに御座います。これも、それ〴〵必要に應じて斯樣になつたことだらうと存せられます。

貧兒敎育

しかしながら、中等以下の方々のためにも、何とか、是非計畫をして上げなければならぬことですが、此の方には、種々と困難な事情がまつはつて居りますので、どうも、目立つほどな計畫も見受けませぬが。承りますれば、この東京市ばかりでも、五萬七千餘も不就學兒童が居りますそうでございますが、全國のを通計しましたならば、幾何の多數になるで御座いませう。まことに、御氣の毒なことで御座います。

種々の習癖

で御座りますが。それは、モ、種々御坐いますが、概して、女の御兒樣には、多辯の兒が多うございます。成人なりの御方でも、これは、特に御注意なさらなければならぬことの樣に存せらゝます。また、男の御兒樣は、如何しても、暴う御坐います。

家庭

當園へ御出になる御兒樣を御敎へ申して居ります間には、各自の家庭の内情が、大概明白に推察せらるゝ樣に御座います。まことに、家庭の御平素が大切でございます、滅多にも御座いますまいが、社會では、大變立派な方と立てられて居らしやる御方でも、家庭での御注意が足らぬ所が御座

いますと、それが、直、御兒樣を通して、社會に公表せられます。思もよらぬ所で御信用を損さる樣なことが出來いたします。まづ、それは兎に角といたしましても、可愛い御兒樣のために、家庭の平素にも、非常に注意して頂いたらばと存せらるゝことで御座います。

繼母と乳母

これは、如何に御親切に養育なされましたのでも、大切に御扱したのでも、どうも、眞實の母親が養育申した樣に豐滿と成長なさいませぬ樣に存せられます。那邊にか癖が見えます。御不幸なことでも御座いましたのなら、致方もございませぬが、然も無うて、御子樣を、繼母の手にかけ、乳母の懷に預けらるゝのは、親としては、この上もない無慈悲では御座いますまいかと、をり〳〵は、思はるゝ事もございます。

習癖の矯正

如何しても、氣長にいたさなければなりませぬ。ことには、皆、御幼少の方ですから、嚴重く懲戒すといふことは、後來のために却つて善くございませぬし、道理を言聞せてと申す樣なことばかりにも參りませぬ。これには、非常く苦心いたします。男園兒で、何かすると、直、ひつかくといふ癖の兒がございました。種々と矯正しましたが、如何しても正りませぬ。腹立つことがあれば、他の、顏といはず、手といはず、ひつかきますから、遂々、炙草と線香とを持出しまして、「種種數へ申すが、まだ、その惡い癖が正らぬ。一體、あなたは、善い兒なのだが、たゞ〳〵、この手が、左樣いふ惡いことをなさる。つまり此の手が惡い。この手に罰をあてゝあげませう」と兩三度も見せ申しましたが、この頃では、とんと、ひつかく樣

なことをいたさぬやうにおりました。斯様なことをいたすことも御座います。

まだ種々うかゞひたいと思ひましたが、最、暮方になりましたから、後日に、また、おねがひいたすことにしてかへりました。

福田會育兒院を訪ふ

田島利三郎

鎌倉右大臣の歌に、『あはれなり見るに涙もとゞまらず親もなき子のはゝをたづぬる』孤兒の、路傍に立ちて泣きけるを見て詠めりしありとぞ。つねに、この歌を思出しては、あはれ、この右大臣の老ゆるまで世におはしけむには、頼朝のすゑも、いかばかり榮えけむをと、たゞ、この歌ひとつのためには、うとましき武門の繁昌をさへ夢想せらるゝこともあるぞかし。

産の親に死去れし兒、彼は、如何なれば然る憂目をば見るぞ。親族のものにさへ見捨てられし子、彼等は、果して何の罪かある。無我無心の幼兒、もとより、罪といふべきものあらむや。其の父母其の親族も、また、まことに已むを得ざればこそあれ。これを遺し、これを見捨つるまでには、幾干の辛酸をや嘗めたりけむ。其の情、むしろ憐まざるべからず。さても、なほ、彼の可憐なる兒等は、餓死といふ悲慘の境界まで導かざるべからざるか。たゞ、これを道路塵埃の裡に遺棄し、なほ、顧みずして可なるべきか。もしそれ、神佛の世におはしまさば、それこそ、彼の兒等をも養育ませ給ふらめ。否、彼の、自己の衣服を脱ぎ、食を減じ、日々の費用を節しても、彼等のために種々計畫せらるゝ人

人の、潔き眞心、うるはしき行動、やがて、神とも佛とも稱ふべくや。

雪の日や彼も人の子樽拾ひといふ句も、陶淵明が、わが子の方に下部を遣るとて、彼も人の子なり。心して使ふべしといひやりたる美譚は、たれもたれも、知れることならずや。わが子わが孫さては、わが弟妹におもひくらべて、能はむかぎりは、彼の兒等のためにも力を添へられよ。ことさら、婦人の第一のつとめは、子孫をおほしたて、あつぱれの國民たらしむるにあれば、代りて、他の兒等をはごくむも、天職の重なる部分といふべし。

一日、麻布笄町なる福田會を訪ふ。たま〳〵、理事何禮之氏あり。懇切に同會の情況を説明せられき。いさゝか、これを記して、讀者諸媛の一顧を煩さむ。

（一）收容すべき院兒

一、父母倶に死去して、他に、扶養すべき親族なきもの。

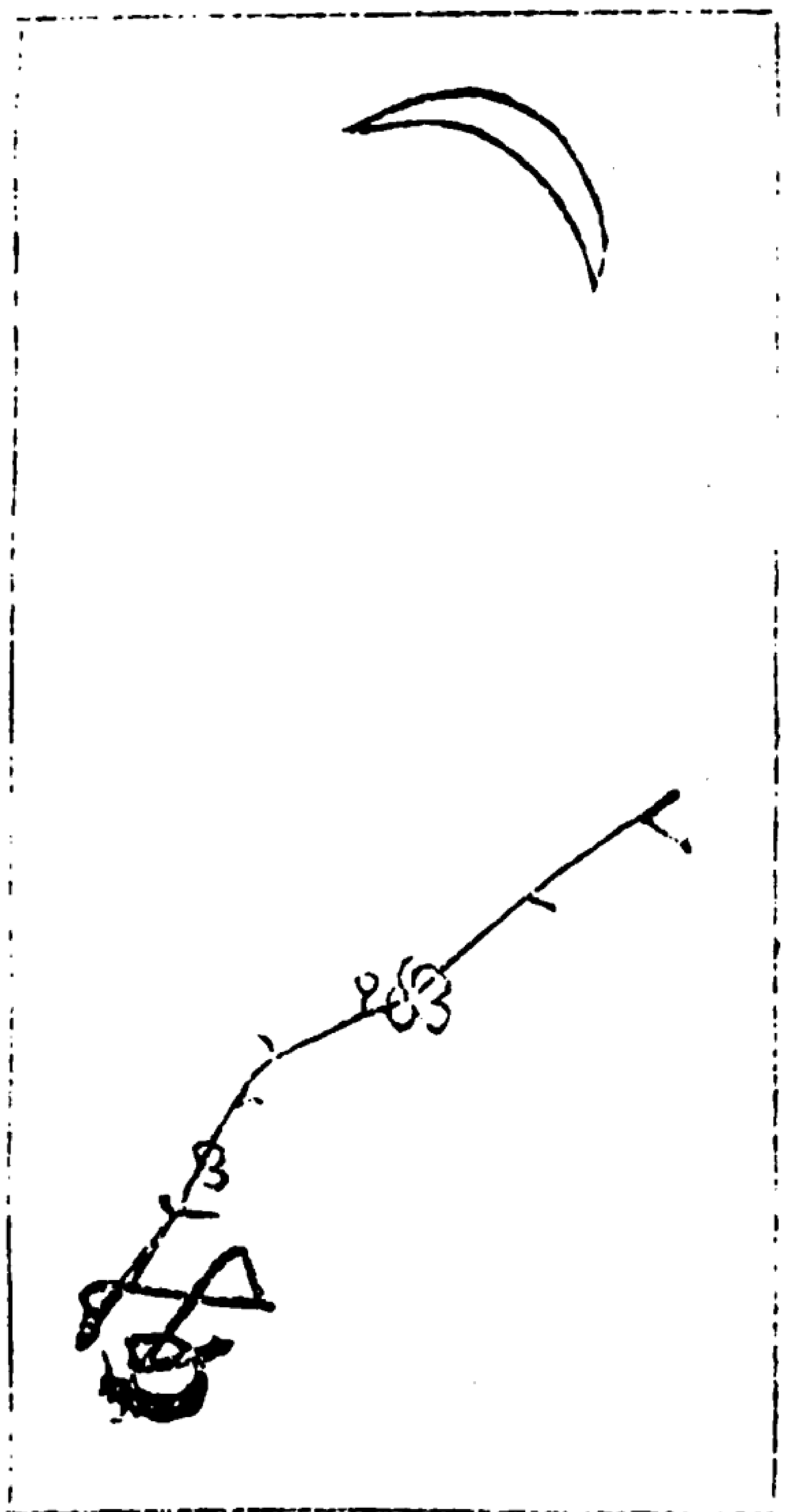
二、父、又は、母の一人死去し、その生存せる父、また、母も、之を養育する資力なく、他に扶養すべき親族なきもの。

三、父母倶に生存するも、其の内の一人、癈疾または長病に罹り、且、子女多くして、之を養育するに勝へず。他に、扶養すべき親族なきもの。

四、其の他、非常の天災、譬へば、濃尾の震災、三陸の海嘯の如き、臨時の處辨を要するもの。

斯くの如き事情にて、入院を請はむとするものある時は、願書或は口頭にて、まづ、願人の氏名住所職業、及び、入院すべき幼兒の氏名年齡、幷

に願出の事由を認めしむるなり。いよ〳〵、之を收養すべきに決したる時は、願人在籍地の町村役塲區役所までは、警察署に依頼して、戸籍謄本を請求し、且つ、願出の事由に相違なきかを確め、更にまた、院員を派遣して、近隣に就きて、まづ願人の身元、素行、貧困の狀況、および、之を致しゝ原因、次に、親族の有無、もしこれある時は、其の身元住所、および扶養し能はざる狀況、又、幼兒の身體心思に異狀なきかを探訪し、役員合議の上、許否を決し、許すべきには、更に、入院願書に、幼兒の戸籍謄本と、區町村長または、地主差配人の證明書とを添へて差出さしむるなり。(未完)



因に云ふ。諸媛も知らむ彼の福田會育兒事業のために寄附を求むる施入錢箱、即ち、各停車塲寺院等にかけられたる。其の淺草觀音堂内の施入錢箱に、明治十四年より今に至るまで、毎月、かならず、五十錢づゝを投入する人あり。こゝに挿入せる梅月のかたある袋は、即ち、いつも、その封皮に用ゐらるゝものなり。いづこの如何なる人ならむ。最、羨しき心がけといふべし。壹圓出して寄附帳に五圓と記さるゝを喜ぶ人もありとか聞くに、これまた。甚、習はまほしきふるまひならずや。



四月廿日兼題

をりにふれて

天

つばくらめとび來る門のはるかぜは
　やおぎにみえてふくものどけし
三河豊橋 服部正子

地

中々にかたや木かげに生いでゝ
　たけにぞたかきふしはありける
三河國寶飯郡下地町 永井さい子

人

梅かをるつきのよごろのしづけきに
　かたりあふべきともゝとひこず
小石川指ヶ谷町 池田愛子

（以下原稿到着順）

時のまもなしさおもひてはけめさも
　おくれがちなるみをいかにせむ
林環子

われながらなつかしきまで袖のうへに
　にほひこぼるゝはなさかりかな
松本蔦子

君のためわが子いしくも死しけりさ
　いへさもめにはなみた滿てけり
名取正代子

あわれなり晝はひれもす夜もすから
　わすれもやらぬはゝのおもかげ
佐藤芳子

さくら花おなしいろ香のはるながら
　こそないまさしさくよしのなき
福原茜子

卯の花のさきのさかりの垣そみちを
　ゆきをわけゆくここちこそすれ
佐々小琴子

すきかへす田の面のかはつ聲たてて
　はるのなこりをつけがほになく
佐々有隣子

あかすみし花の木かけをけふさへは
　わかはすゝしくしけりあひけり
髙橋松江子

すみたかわ花のさかりはわたしふれ
　ひさこかたけしひさもみにけり
戸賀崎治子

折にふれさきにつけつゝたらちねの
　おやのいましいにしへ思ほゆ
河方菩代子

梅さくらめてたきはなの外かにまた
　はるはやなきの芽も出にけり
田村米子

鳥もなきはなもにほひてむらきもの
　こゝろのさけきはるのこのころ
田村道子

高さのにあそひたはるゝひめたちよ
　おもひやらなむしつのてわさを
春野梅子

進みゆく世にもならはてよろつみな
　おくれがちなるみをいかにせん
田代艶子

いさわれも文のはやしにわけ入りて
田代綾子

こゝろのはなをさかせてしかな

ふみまなふまとの竹さへぬけいてゝ
ひとふしあれとをしへかほなる　金原玉城子

國のためいくさたちせしますらをの
うゑにしさくらさきそめにけり　瀬戸富榮枝

さくらはなるかり久しきものならは
ふるはるさめもいとはさらまし　小野三千代

いたつらにすきしむかしの忍はれて
われとわかみのはつかしきかな　吹田たけ子

漁りするあまもうれしとおもふらん
かせあたたけくにはもよきひは　太田ため子

ことわさの茂きまなひのおしへくさ
つみとりてこそはなもにほはめ　佐野きやう子

いかにせむ世の浮ふしをなけくまに
そのゝたけのこたらのひにけり　松尾くに子

いたつらに多くのとしはつもりつゝ
さためかれたるゆくへをそ思ふ　松尾やそ子

いさきよき花をこゝろのともとして
ひとをうらみすよをはへなまし　草間幸子

さま〳〵の憂きこともつもる己か身は
なみたにそてのかわくまもなし　伊豫田ふく子

ねたはをはかせにまかせて呉たけの
ねきしのさとにふしかさぬらん　椎野ぬき子

いかにしてけふはくらさん蘇はしき
ともとひこすはるさめのふる　椎野秀子

木かくれにのこれる花もしられけり
をり〳〵かせのそてににほひて　椎野蘂子

かの君はかくなりにきときくたひに
ますおのがみのおもはれるかな　中島なみ子

はらからと手をたつさへて野に山に
はなみしころはたのしかりしを　岡田春子

かへるさも面かけみねてたのしさの
つきぬははなのたひらなりけり　坂倉峯子

すみれつみつくしをりつゝ遊ひにし
むかしこひしきはるのゝへかな　高石登代子

このはるはみやこのうちに住なから
をりねしはなのことのはもなし　加藤靜子

けふもまた花見のともにひかれけり
ふみまなはむとをもふこゝろを　鍋田龍子

まなほにもおふしたてむとわか思ふ
こゝろをこらは知すやあるらむ　河合縫子

人のためおもふはやかてわかためと
けふもまなひのにはにくらしつ　三宅中枝子

老の身もこゝろのとけきはる日とて
いのちをのへにたをるさわらひ　服部萬子

あつまなる學ひのそのにあそはむと
いてしわか子よつゝかなくあれ　友近蝶子

春かせにちるはなみてもますらをの
きよきこゝろそしろへかりける　友近清子

ふく風にわかすむいほのはなちりて
ゆふへさひしくはるさめそふる　坪内春子

去年ちりし花はことしもさきぬれと
なからむともにまたあはめやも　弓立梅子

ふるさとの春のけしきやいかならむ　金田まつ子

みやこののへもすみれさくなり

見わたせはかすみは野へに棚引きて　金田しけ子
いとゝのとけきはるのゆふくれ

我やとののきはのさくらさきにけり　野口こう子
とくおきいてゝつゆなからみん

ふるさとの軒はのさくらたらちねの　田中久子
はゝのみひとりなかめますらん

さるものはうとしといへと別れては　清水茂代
いとゝこひしきはなのこもかな

いく度かこゝろのこまにむちうてと　篠塚きん子
かひなき身こそかなしかりけれ

しまきふく波路はいかにあらくとも　徳永ふく子
まことのみちをたのみてそゆく

今そしるまさしきみちをふみきても　坂あい子
くるしみおほきうきよなりとは

咲き匂ふはなのみやこのあさゆふに　山内森子
なほしのはるゝまつやまのさと

たらちねの深きめくみを今そしる　片桐しけ子
あらきうなぢにふなでせしみを

ふるさとの垣根に植しさくらはな　天野いち子
こゝろしあらはにほひめくれよ

をやみなくふる春さめのきのふまて　田邊祥子
さかりをみてしはなやちるらん

すみすてし我ふるさとに來て見れば　松山かすね子
うくひすのねもうちしめりつゝ

わらへにも折るをゆるさぬさくら花　田邊幸子
よはのあらしのちらしつるかな

君ははやあらしのはなとちりにけり　竹越こう子
しけきなけきもいさしらすして

きのふまてかたわかはしし君きみも　竹越かをる子
いまはいつこにまよひますらん

たねまなく古さとおもふわかこゝろ　内藤きよ子
くもぢをかへるかりにたくへむ

ほとゝきすこゑきくたにも古さとの　清水よし子
ちゝはいかにとしのはるるかな

いにしへの筱らたけをゝしのふにも　足立かう子
そのちゝはゝをおもひこそやれ

ふるさとを雲井はるかにわかれては　清水千代子
ひとのなさけのいとゝうれしき

湧出つるそのみなもとはかはらねと　足立ふみ子
にごりしみつはくむひともなし

いつはあれと何處はあれとこの國の　小室はな子
このおほみよにあふそうれしき

散るを世の習ひとおもふこゝろにも　柴田愛子
なほをしまるゝやまざくらはな

なつかしきふるさと人はきのふけふ　柴田信子
いつこののへにわかなつむらん

しら雲とまかふはかりのさくらはな　橋しつ子
よはのあらしにあはれちりけれ

みやこぢのをしへの草をつみつゝも　濱口幸子
古里ののにうくひすそかよへる

久かたのつきのかつらを手折らすは　濱口ころく子
われはいへぢにかへらしと思ふ

はけみなはいかなる業かならさらん　浦あや子

たまもみかきてさやけかりけり

故さとのはるのけしきやいかならむ
みやこははなのいまさかりなり　森脇さゑ子

何となくすて〻ありしを手にとりて
うゑしすみれのはなさきにけり　宮武てる子

一日の旅

地　相模足柄下郡湯本對木方　瀬戸富美枝子

花に浮かる〻蝴蝶と共に、柴の戸を出でしは、七時半頃なりき。今日の一日は、心ゆく限り、足の許さん限りはと勇みて立てば、ひら〳〵と飜へる袂は、輕くおくれ毛拂ふ春風に夢や醒されけん。飛び立つ蝴蝶の樣の面白さ見渡す限り、野も山も霞はこめて濃く薄く、果は、何所か白雲の、彼方に高く鳴く雲雀の聲の床しさ、見るもの聞くもの、一として樂しからざるはなくてなん。實に、嬉しきは春の旅にこそ。

うら〳〵と霞棚引く山の麓を踏み分て行くほどもなく、湯本の出湯にとは　きぬ。玉簾の瀧を見、發電所の音を耳にしつ〻　川の流れに沿うて登る。道すがら目立つは谷間の山櫻、岩が根の躑躅下行く水に影をうつして、釣する翁の餘念なげに、見つむるも、をか〳〵に、面白く興深かりき。いつしか、塔の澤も過ぎて、宮の下も今少しと聞くも嬉し。かすかに聞ゆる谷川の流れは見えねども、木の間がくれに家の二三軒、道行く人に尋ぬればこは、堂が島温泉とは教へくれぬ。見上ぐる山はいよ〳〵高く　ます〳〵青く、松吹く風は琴の音かと怪しまれ、薪採るそま山人の唄ふ歌の節面白さに、いつしか、耳の汚れも洗ひ去られて、知らずしらずも、山人の心地せらる〻もおかし。實に、居は氣を移し、養は体を移すとか。か〻る地に住む人の心の中さかまほしなど語り行く間に、宮の下にとは着きぬ。奈良屋富士屋ホテルなどの構造の美しさ、をさ〳〵都にも劣るまじく、外つ國人の數も多く見ゆ。こ〻に中食を濟し、木賀小涌谷など打ちめぐる間に、永き春の日も、暮れ易き山里の習ひに、いつしか、日は西に傾きぬ。大方湯場も巡り終り、足の勞れも覺えぬれば、いざ歸らんと踵をかへしぬ。さはれ、かよはき女子の足の悲しさには、思ふやうにもはかどらで、塔の澤に着きし頃は、またく暮れて電氣燈の光り眩

ばゆく、湯歸へりの人の、足の輕さうらめしく、湯本より電車の力をかりて、恙なく歸りしは、七時頃なりき。あはれ、樂しかりし今日の旅よ。

人

伊勢國宇治中之切　河原芳子

一日一日に進みゆく世の惠みには、黒金の道の至らぬ限なくひらけわたりて、よろづ、たよりよう もてはこぶるゝこそいみじけれ。いでや、けふの暇に、久居の叔母がり、久々にておとづれ、かねて、さかりときこえはべる桃山の花を見ありかんとて、つとめての程出立つ。八時過ぐる頃、名に高茶屋の驛につきて車を下り、長閑に霞む松原を辿りて、やう〳〵に、其家に入りつ。うからやからの何くれと語り合ひたる末、かやうにて來たりけりと、桃山のこといひいづれば、叔母上、いともおどろきたまひて、明日よ〳〵と、せちに、とゞめたまふをもきかず、事に事をつけて、あながちにふりはどきつ。従弟の君のあない嬉しううけて、叔母上に別れ、道行ぶりに、くさ〳〵打ち語らひつゝ行く。戸木の村など過れば、はやかなたには、紅の雲の棚引渡りて、青麥、菜の花、一つら連り、雲出川白く流れて、其の中にかくれ行くさまは、あたかも繪のやうにて、彼の桃源のけしきもかくやあるらむと、いみじう床しう思ひあくがれて、心も空に迷ひ入りぬ。幾千百株の花の中を、これは〳〵とばかりに見とれありきたりしが、はや、四時近うなりにけるものから、あかぬながめを思ひ断ち、なつかしき従弟の君と、松原近き渡場に別れつ。柳櫻の錦なす野の一里ばかりが程を、雲雀の歌に慰さめられて、ありくともなく六軒驛に出たる時は、恰も、定めの刻限に間さへなければ、花の色なる切符を、山田までとてもとめし、夕日の名殘の山の端にきらめく頃、我家にこそは歸りつきしか。

（以下原稿到着順）

佐々有隣子

今日は、三月の廿四日なり。かれて、友達二人三人と、宇土郡の三角港に、軍艦をはじめ水雷艇のつきぬべき日なればと。ふかくちぎりおきぬ。廿三日の夜行滊車にて九州鐵道。植木驛を發車して、三角港には、夜のほの〳〵と。あけわたりて午前の七時すぎに、際崎といふところより、歩行にて、着艦の棧橋のたもとにいたりみれば、見物人は、うちよする濱よりしげく、三角の山よりもたかく、人の上には人あり、かよわき女連にては、艦に近づく可き。手だてもなく、しろべの人の旅宿所を尋つれども尋れねず とやせましかくやせましと。ためらふうら、沖濱とほく、黒き煙の立のぼるあり。いかならんと。眼をこらして見わたすほどもなく、軍艦は、四五艇の水雷艇と入港せり。艦内の參觀をゆるさ

れつれば、縣下の各學校の生徒數千人、陸軍兵士數百人。今日は日曜日なれば、官吏の參觀もあまたなるべし。妾等も、參觀を申込みぬれば、ゆきされしかども。心なき身のいかでなど、海岸のよろしき地より眺めてやみぬ。

河方喜代子

妾は、去るとしより、世にもうたてき肺となん云へる病にかゝり、家政などあづからんは覺束なきまゝに、藥用のみを己がつとめとなしつゝあり。此頃は、病もいとゞおこたりて、心地すがしきまゝに、親しき友人と、只二人、今日は、日曜にもあらず、日和もいとよろしく、風さへなし。かゝるしづけき日に、心のまゝに一日の、旅路に登らば、病める身には、いかばかり、のどけかるらんと、時計は、九時をうちぬるとき、いでたちぬ。

十時にして、やう〱、上野の(ステーション)に、つきぬ。折そよけれ、今や、水戸行の滊車は、客まちがほに、黑烟をはけり。切符とる間も、いそがしく、そに、乘じぬ。程もなく、滊笛一聲、走りそめぬ。日頃は、淋しき滊車の中も、今日は、何となう、ほがらかに見ゆ。行く道の、兩がはには、早風なきに梅はちり初めてゆかしき香をさへ送れども、もゝ、櫻のわれわかほに、さきは木の、彼方、此方にほゝゑむさまの、おかしく、彼の地に、つけば、いかばかりならんなど、語り合ふ間に、いつしかと、早や、水戸のはきにつきぬ。

あな嬉し。われおくれじと滊車を後に、車を公園にかりぬ。園内には、幾千本の數へ知られぬ、梅の林、天然の香、ゆかしく舟をつき、今を盛りとほころびたるをゆかしく吹く風に、二ひら、三ひらてふとともに結びし手に落ち來る花の眞らしく、小蝶や、空にとぶかと、おもはれて、いとうれし。又、向ひの櫻山を、眺むれば、數百の櫻樹林をなして、今や、二六のあとけなき姿いとやさしく、如何なるみやひ身、の結びぬらん丹尺も仄かに見ねて、いとよろし、など、語りあふまに、夕日はきら〱と、千波湖に、てりて、一入のおもしろさ、歸さわすられてあくがるゝ折しも、なくうくひすの、一聲に心つきて、時計を見れば、早や、五時は十分をすきたり。あな、一日をゆめのまにすごしぬ。名殘はつきねど、友びとよ、夜風は、病の、ためあしければと、心殘して又々滊車におくられて、家路につきぬ。

婁輪佐つま子

今日は日曜なるに、幸好き天氣故、城山館へ遊びに行きぬ。廣く美しき庭には、種々の色花々色香床しく咲き出でゝ、千代千代と歌ふ鳥の聲にぎはしく、心地も、いとすが〱しやがて、二階に登り見渡せば、景色たとへん方なし。遙か向ふに山々高く聳ね、自然の間に動なき世を示し、目の下には、長野の市街、はてもなく見ゆ。昔しは、家も少なく、淋しき處なりし由なるが、進み行く御世に逢へたる幸ひに、縣廳議事堂樣々の學校、赤十字社等設けられ、市街も頗る賑になりぬ。又、中間には、昔、上杉謙信武田信玄の戰へせしと聞く、川中島の今は、治まりて、一面の田となり居れり。實に、此の望みにても、ます〱治まり、ます〱進み行く、御世の有樣、おのづとあらはれて、心も勇み立ち、いと〱嬉し。あまりの嬉しさに、ひろげも、忘れ居しが、日かげのかたむくに心づきて、家に歸り、一日の旅の樂しさを、父母に談りぬるをかくは。

中島なみ子

莊子が夢のむかしは知らず、翼うつ、朝かせの蕭、はならぬまゝに、舞うていでぬ。霞とまがふ花の上野に、あかき青きさま〲なる粧して、あるはうたひつ、あるはまひつ、けふをひと日の、たのしみも、まだあさ艸と、旗おし立てゝ、上るやくろしすみた川に、さほさす舟にゆく水の、ながれにそひて、さく花の、まに

わけつゞく人ごゝろ、花にゐふらむ。はろにゐふら舞。さそひし香、こゝにもあらず。さらば、いづくぞ。いさゆふに、かけて、さぐらむ。いざゝらば、長き堤を、めぐりて、たゞ、一向に香おひ、花のかすみを、遠く〳〵さりぬ。見かへらむさすれば、がほり、はた、はろかになりぬ。あなゆかし。堪ふる限り、おひて見んさ、あへぎ〳〵、いづくをさしてもわかず、兩の翼、ちぎれむばかり、めくらめきてふしぬ。濃き〳〵香、おのがゆめにしめぬ長きひげ、をのゝかせて見れば、羽色に同じ。花むしろの上に、今しも、ねふりさめたるなりけり。したひし香、あへざし處、さてはこゝなりけり。いさ、わが遊ふ處、まふさころ、かろたはここに、舞へ飛ばむ。師のチうたふうたにあはせて、

『蝶さまれ栞のはにさまれ』

人の名讀み込みて

横井雪子

東路にたかくそびゆる山こそは
　亘きみち悟る處なるらめ

さくすゞの鈴木の君のあればこそ
　學びのにはも榮に行なれ

花も香も本より多ききみなれば
　はる秋さかむ清き七くさ

岡ちかき田の面のいれのすがた好く
　わか樹さ共にしげりさかゆく



樂園

あはれこのはな

まに生

花咲きしより、日毎に雨のみ降りつゞきて、最いぶせかりつるに、土曜の夕つかた、急に空晴れわたりぬ。翌日は陰りたれど、さすがに降るまじき天氣なりければ、花見といふものを見ばやと、向島にものしぬ。長堤十里、花、花につらなりて際限なく、人、人につゞきて所謂立錐の地だになし。女兒は、綺麗なる衣服を見せむために、書生はかくし藝を吹聴せむんために、商にこれる人は廣告のために、或は、人を見むために、或は、酒

のまむために、或は、朋友にさそはれて、或は、

人のゆくにつれてそゞろに。ゆく水のながれ絶えざるが如く、また、よどみに浮ぶうたかたの如く、かつ來りかつ去り、其の花の下を逍遙するもの數萬人といふ數を知らず。されど、まことに、花を見むとするもの、萬に一二だに得ること難かるべし。皆、これ、われとひとしく、花見を見に來りしにあらざれば、即ち、しかく〜のために、よ。花は、むなしく、爛熳をきそひながら、猶、不遇を觀ずらむ。あはれ、花のために、一掬の涙なき能はず。



〜〜などつぶやきしも、はや、一年の昔となりて、またも、所謂花見時は來りぬ。今年の花は如何あらむ。今年の人は如何あらむ。これは、年々歳々の花や人によりて無常を觀ずる能はずといへども、花を見る人の心には、うたゝ、世のあはれといふことも、思ひしらるゝぞかし。

上野の花に日くらしや
明日は淺草飛鳥やま
こゝろ〜に向じま
春の遊びぞのどかなる

（遠　內）

花見の家苞

超舟漁史

人類として、好奇心のゼロなる者は、社會生存上の資格なき輩なり。とは、嘗て、歐人より聞きたる言葉なり。嗚呼さならんか、洋の東西を問はず、人として、好奇心なからざるはなし。

甚だしい哉、流行てふ名目の下に來る、勢の駿々たる、衣服といはず、病といはず、鄙歌といはず、曰く何に、曰く何に、數へ來れど、誠に濱の眞砂の例にもれず。

昨年五月、大和田氏が鐵道唱歌を公にしてより、其勢ひ、殆石火電光を見ざりしが、三篇、四篇を重ぬるに及んで、漸く衰ふ。

時に、萬街至る處、實に聽に堪へざる鄙謠起る。此れなん彼の東雲節なり、あはれ、此の節の如何に、天眞爛熳たる子女が、腦漿を汚したる、其の罪、決して、尠少にあらざるなり。されど、いくばくもなく、龍頭蛇尾に了りて、亦、茲に教育的唱歌をくりかへすに至りたるは、吾人の大に喜ぶ處なり。己れ、先頃、杖を上野の花に曳きて歸るさ、清淨無垢なる子女が、清音を弄して、

汽笛一聲新橋を。　早我汽車は離れたり。
愛宕の山に入り殘る。　月を旅路の友として。

と、謠ひつゝあるを耳にし、坐に喜ばしき餘り、今日看し景色を其のまゝ、鐵道唱歌のかへうたならぬ、コジッケ一篇を歌ひつゝ、花見がへりの家苞とはなしぬ。

あはれ、愛讀の諸媛よ、コジッケの巧ならぬ特色を、春の日長の徒然に、一笑玉へかし。

鈴の一聲おと高く
はや我が馬車は着にけり

上野の山に咲きみだる
花をあそびの友として
こゝは昔の寛永寺
徳川祖先の墓どころ
幕府は失せても尚殘る
名は千載の後までも

森より近く忍ばずの
池もみえてあみ白く
水の面わに影ぞすむ
あれは御堂か辨天か

蓮に名をえし此の池を
すぐれば早も團子坂
人形細工もおもしろし

樂　圖

急げや直に道すぐに
されど上野を後にして
行も口惜し花ざかり
あたりを見れば百鳥の
囀る聲もかすむまで

淺草行は其のまゝと
呼はる馬丁のかしましく
つぎており來る人々は
皆これ花や尋ぬらん

常には廣き石段も
のぼる人々蟻のごと
偉功は千代にかくれじと
歴史のみかは銅像を

こゝに立てしは其の故か
苔むす石碑は將た誰ぞ
春風ぬるく日は高く
こたへず花は袖に散る

前は西郷吉之助
後は德川彰義隊
落花狼籍其の事も
歴史に詳しく有ぞかし

夫よこれよと眺めつゝ
淸水堂にとはや着けり
見よや人々集まりし
公園場裡の盛大を
行きては後に立ちかへり

花にうかるゝ諸人や
さすが櫻に名を得たる
糸櫻もみえて麗はしゝ

茲をおるれば滊車ありて
日光がよひも遠からず
此方に集ふ乙女子は
あれ見よ雲の間より

出てはくぐる花のかげ
前後は雪につゝまれて
赤き袂をひらめかし
睦びて遊ぶ愛らしさ

遙かに見えしパノラマは
はや我がそばに來りけり

雲をつんざく其のさまは
いともけだかき姿にて
こゝぞ白虎の修羅の場
我れも登りていざや見ん
高さは一百數十尺
會津戰爭たゞ一目
動物博物圖書館に
あまたの館は競ひ立ち
こゝには此の地の名を得たる
東照宮のみやゐあり

幼き人々のために

香谷女史

御姫様（つゞき）

覺悟はして參りましたものゝ、お姫様も、いくら、行つても行つても、其の處だといふので達しませむから、少しは、ぢれッたくなりました。

まだ〳〵、遠いのかェ

と尋ねますと、大熊は、

靜にして居らつしやい。遠い遠い硝子山まで參るのでよ。默つて居らつしやらぬと、この崖から落しますぞ。

と、一向、平氣なもので野こえ山こえ驅けてまゐります。

姫　まあだかえ。

熊　落しますぞ。

今度は、少し、熊が腹立つたらしかつた。三度目

といふには、眞實に、お姫様を崖の下へ落して、サッサと自分ばかり何地へか往つて終ひました。別段怪我も御座いませぬでしたが、案内者に捨てられては、一足も進むことが出來ませぬ。途方にくれて居りましたが、ふと、遙の谷間で、煙の立つのを見つけました。

やう〳〵の事で、お姫様は其所へまゐつて見ますと、老婆が、小い小屋の内で、鍋をかけて何か煮て居るところで御座いました。

姫 伯母さん、あなた、今日、大熊を見ませぬでしたか。めつたに見ないほどな大きな。

婆 見ませぬよ。オヤ〳〵、見れば御若い御美しい御方の、何で其様な物を御尋ねなさる。エ、。ハア、左様ですか。其はマア。其なら、風の所を敎へてあげますから、其所で聞いて御覽なさい。彼は、年中、何所となく吹廻つて居ますから、知つてるかも知れませぬ。が、まづ、少し御休みなさい。今丁度、雉を煮て居りますから、其で、御飯でも食べてから御出なさい。

姫 ありがたう。

と老婆と一所に、御飯を食べましたが、

婆 サア、斯様お出になると風の處で御座います。これはネ、お邪魔だらうが、持つて御出でなさい。屹度、役にたつことがありますから。

と、雉の骨を呉れました。そこで、お姫様は、其を貰うて、風の處へまゐりましたが、此處でも、亦、雉の羹を食べて居りました。

風 それはそれは。が、拙者も今日は、何處へも出あるかずに、御馳走などを製つて居つたものですから、つひ、見かけませぬでした。コレは、何でも太陽様に御聞申すが一番ぢや。彼の御方なら、朝から晩まで歩きとほしで、御休みなさる

ことなどないから。あの御方に御聞きなさるが一番ぢゃ。斯様お出なさい。アナア、この骨をお持なさい。役に立つことがあります。こゝでも、雉の骨を貰ひまして、今度は、太陽様のところへまゐりました。どういふものか、こちらでも、亦、雉の御馳走を頂戴いたしまして、さて、大熊のことを尋ねましたが、御見掛なさらなかつたといふ事で御座ります。

日 しかし、熊などは、よく夜分にあるくから、太陰様なら、見知つて居るだらう。キッと彼方なら分るだらう。

と丁寧に教へたり慰めたりして下さいましたので、また、こゝでも雉の骨を頂戴して、太陰様のところへまゐりました。

月 氣の毒ぢゃねい。私も、このごろは晩くなつてからばかり出あるくので、遂に、逢はなかつたが。

お姫様は、とう／＼、泣きだしました。

あゝ神様そんなら誰様に聞いて分るのでせう。

月 マア／＼、泣かなくつても………。辛抱が肝心ぢゃ。折角、約束を固く守らうといふ其の殊勝な心を、どこまでも徹さにゃありませぬ。マア、私と一所に、雉の御馳走でも食べませう。其の骨は後で入用があるだらうから、持つて往くことゝして、まづ、疲労れたらうに、一寸やすみなさい。面白い話でも爲て上げやう。實はの、私に今日は、硝子山の黒男が御婚禮をするといふので、招かれて居るのぢゃが。………

姫 なに、硝子山でござります。硝子山硝子山。その硝子山へ彼の熊につれられて參らうといふので御座います。ヲヽ、硝子山でござりました。

月 アヽ左様か。硝子山なら、あまり遠くもない。

私は今日、據ない要で断をだしておいた。が一寸此處から光明を見せてやらう。その骨を持つて御出なさいよ。

お姫様は、うれしくて、いそ〳〵して出掛けましたが、あまり急いだので、骨を一本おき忘れてまゐりました。

たどり〳〵、其の硝子山の麓につきましたが、硝子の山で御座いますから、滑つこくて、登ることが出來ませぬ。一旦は落膽いたしましたが、考付いたので、彼の貰受けた雉の骨で、梯子を組立てながら、其にすがつて登つてまゐりました。組むほどに登るほどに、隨分、長くも高くもありました。が、頂上に登るには、最う、タツタ一節、足りませぬ。斯様に難儀をして今この所まで、やう〳〵登りつめたものを。何たる不幸だらうと悲しう思ひましたが、とう〳〵、わが指を一本嚙切りまして、其をも梯子に組み足して、やう〳〵、其の絶頂に上りました。

頂には、大な洞あつて、梯子を下るやうになつて居ります。中に入ると、其の美しい事、麗しいこと、筆にも口にも盡されぬ程で御座います。御婚禮の御客も大勢見えて居られるし、御馳走は、山海の珍味をならべてあります。正面には、彼の黒男が、すこし伏目にはなつてをるが、端然と坐つて居りましたが、何か、非常に悲しさうにして居ました。

あんまり、來やうが遅いので、あんなに悲んで居るのであらうと思へば、飛んで往て御詫もしたいが、姫御前の、はしたないと蔑まれるのも耻しい。ア、如何がなと、あたりを見まはすと柱をたてた琴が立かけて御座いましたので、お姫様は、直に、

挿圖



其をとつて、弾きはじめました。琴にかけては、お姫様は、古今の名手でございましたので、其の弾奏た曲は、大に黒男を驚せました。顔をふりあげてお姫様を見ました時に、彼の黒男は、すつかり姿をかへて立派な若殿様になつて、お姫様を迎へました。

* * * * * * *

彼の黒男といふのは、或大大名の御次男で御座いましたが、何か都合あつて之の硝子山に隠遯して居られたのでございます。非常に賢い方で、姿をかへることなども知つて居られて、あんな黒男になつたり、大熊になつたりしたのださうで、つまりは、このお姫様の心を、いろ〳〵試したのださうでございます。

* * * * * * *

間もなく、お姫樣の父上樣八幡義照の御城へ二人して歸つてまゐりまして、父上樣を助けて、種々領民のためを計られましたので、家來百姓は、皆、神樣の如く尊敬ふ、お姫樣も、また、滅多にない、えらい奥方とほめられて一生を幸福におくりましたとさ。この領分の人は、八幡樣といふて、方々の神社に祭られて御座るのは、皆、この若殿樣御夫婦を祭つたのだと申しましたさうで御座いますが、それは、しかし、間違つて居りますが、まあ、そんなにも尊敬せられましたとさ。めでたし、めでたし。

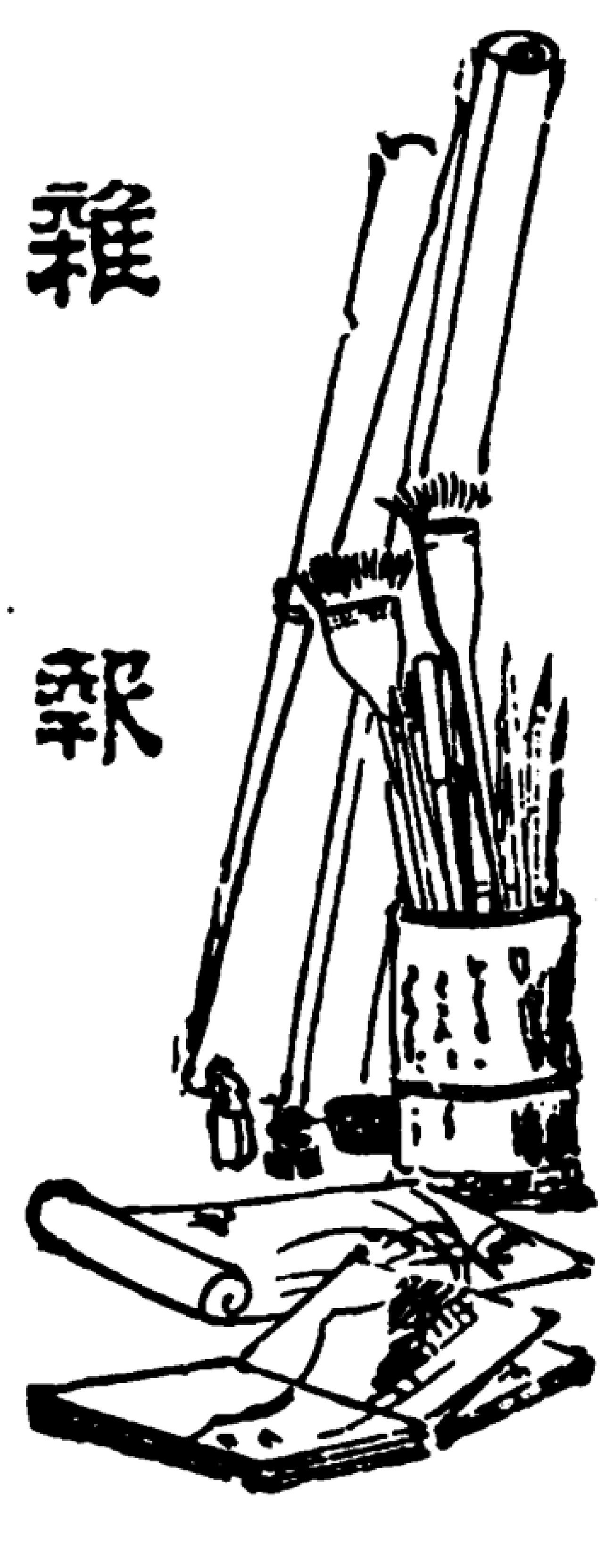
（おしまい）

三番叟

立ちまふ袖につゝみても
なほあまりあるうれしさを
さやけき鈴の音にたてゝ
君が千とせの數そへむ

（諧　平）

雜　俎



○宮廷錄事

●神武天皇御例祭　去にし、三日は、神武天皇御例祭の御當日なりしを以て、午前八時より、岩倉掌典長以下各官出仕、御殿の御裝飾を奉仕し、引續き奏樂の間に神饌を供し、且つ、祝辭を奉讀し、同九時各員退出、同卅分より、御親祭を行はせられ、同十時出御あらせらるべき筈の處御都合に依り、岩倉掌典長御代拜を奉仕し、次で、皇后陛下御代拜は、小池權掌侍、皇太子殿下御代拜は、高辻侍從長、皇太子妃殿下御代拜は、吉見女官各奉仕し、次に各皇族殿下を始め奉り、徳大寺

侍従長以下、親任官其他禮拜、十一時卅分御閉扉正午、皇靈殿御開扉午後一時迄の間に於て、在京、伯、子、男爵其他參拜、同一時より二時迄の間に於て、判任官以下參拜、又夕御次第にして、午後四時より、皇靈殿御開扉同五時全く當日の御式を終らせられたりとぞ。

●●●●●勅使參向　神武天皇御例祭、勅使掌典竹尾光昭氏は、さんぬる日出發、京都畝傍山御陵へ參向せられたるよし。

●●●●●●皇族講話會開會　皇族御講話會は各皇族殿下等の御都合にて暫く休會したるが、去ぬる七日午後七時より、靈南坂なる帝室制度調査局に於て、開會、山階宮、華頂宮、梨本宮、久邇宮の各皇族殿下、其他各係官出席、穂積法學博士は前回に引續き、憲法第一章、天皇の大權の下、第十條、文武官の官制俸給に關する件、第十一條、陸海軍統帥の件、第十二條、同編制及び兵額の件、第十三條、宣戰媾和、幷に、條約締結に關する件に付、講述を爲し、終りて、大庭陸軍少佐の實戰談ありし由、尤も、當夕田中宮内大臣、外一二の人は、欠席の旨屆出たりと云ふ。

●●●●●●靜子内親王御例祭　いにし四日午前九時、宮中に於て去る明治二十年四月四日、薨去遊ばされたる、靜子内親王御正辰祭を行はせられたりと、漏れ承はれり。

●●●●●●御眞影を賜ふ　天皇陛下の、御眞影は、勅任官以上にあらざれば、御下賜なかりしが、今度特別の御詮議を以て、貴衆兩院議員には、其希望に依り、御眞影を賜はる筈にて、宮内省と、兩院事務局の間には、右に關する、諸般の打合を爲し、夫れ〳〵、拜戴願を田中宮内大臣まで、差出したるよしにて、願書を呈出せし者、總計二百七十餘

名あり。內貴族院三十餘名、衆議院議員二百四十餘名ありと、聞くが、其筋にては、右の願書を取纏め、已に夫々の手續をなしたれば、遠からず御下賜の御沙汰あるべしと云ふ最も、地方在住者に對しては、次期、議會召集の節、上京したる時下賜せらるゝ都合ある由、いとありがたき事にこそ。

●・・・・・・・・・・

●兩殿下署長へ御菓子を賜る　常宮、周宮　兩殿下が、先頃御上京あらせられし際、午後二時三十一分神奈川停車場を御通過あらせられ、御警衛の爲め同所へ出張せし、新山、戶部警察署長へ、紅白菊花の御菓子を賜りたるにぞ、新山署長は有難く拜納し、歸署して、署員一同に分配したりと。

●・・・・

●月並御歌會　宮中月並御歌會は、去ぬる日宮內省御歌所に催され、松浦伯、前田、水野の兩子爵小出寄人、小杉、鎌田、大口の各參候、千葉、遠山、加藤の各錄事等參集し、御通題「月下花」「春衣を詠じて立詠草、及懷紙に認め、御兼題「水鄕春曜」と、宮中女官、及、京都向陽會員の詠進とを一括して、畏き邊りへ捧進したりと云ふ。

●・・・・・・

●東宮御吉事の御日取　洩れ承はる所によれば、東宮妃殿下には、其後引續き御健全に渡らせられ、御吉事の御日取は、本月二十二三日頃あるべしとの御事にて、目下二名の產婆交代にて、御殿に相詰め居り、去る十五日頃よりは、產科專門の侍醫、相磯慥、鈴木愛之助も交代にて伺候し、本日、即ち二十日よりは、赤十字病院看護婦三名も、交代に詰め參らする筈にて、此程宮內省より赤十字社へ、右人選を申渡されたりと、いとも目出たき、御日を拜しまつるも近づき侍りて、誠に、國民たるものゝよろこびまつることにこそ。

●・・・・・・

●禎子女王殿下の御調度　伏見宮禎子女王殿下は、いにし六日、山內侯爵家へ御降嫁遊ばされ玉

ひしにつき、其の御調度のうち、御道具、文臺、硯箱、手箱、御簞笥、御鏡臺御膳椀を、初め、漆器類は、一切菊御紋散しの金蒔繪にして、日本橋の黒江屋漆器店へ御用を命せられ、其他御小買物は、小筆善太夫に命せられて、御調度遊ばし玉ひしとぞ。

●宮內省告示　去る六日の、官報號外は、左の如く公布せらる。

宮內省告示第六號

禎子女王殿下今六日陸軍步兵少尉正五位勳四等侯爵山內豐景に嫁せらる右告示す

明治卅四年四月六日　宮內大臣子爵　田中　光顯

當日御婚禮のことは、社會片々欄內に、詳しく載まゐらせたり。

●献上の海石榴　去年十月、皇太子殿下九州行啓を、仰出されたる當日、即ち十月十二日大分縣下なる菅生村岩窟中にて、同縣直入郡長渡邊村男氏が、海石榴の根を堀出せしに、其形恰も蓬萊の龜の如くなりしが、史を按ずるに、紀元七百四十二年、天皇第十二代、景行天皇の十二年十月、天皇直入郡に入り、命に從はざる土蜘蛛、八田國麿侶を親征し給へり。時に賊頑強にして、矢石を放ち、官軍を苦め奉る、天皇海石榴を以て推兵を作り、猛卒を選んで之を授け、山を穿ち、草を穿き、石室の土蜘蛛を征し、遂に平定し給へりとあり。今尙同村及び、其附近に行在所地趾、土蜘蛛の巢窟其他の古蹟を存す、然るに稀世の海石榴を行啓仰出されたる日に出せしは、祥瑞あるべけれぞとて、該村蜘蛛塚鬼の巖屋附近より拾ひたる、雷斧石鏃を添へ、東宮御所へ献納したるに、今回中山東宮太夫より御嘉納あらせられし旨、御沙汰ありしと。

〇表彰錄

●●●●●●●●忠實なる女敎師　神奈川靑木町、神奈川小學校の裁縫科敎師、田沼志摩子(六十七)は、明治初年亡夫栗軒が同地にて兒童の指南をなし、其後學制發布に際し、長男易簡、神奈川學校に敎員を奉職し其後師範學校に轉任せし以來、二男弟三郎、四男三一、五男飯田泉吉、女婿田原秀哉等相續いで何れも敎員となりしが、志摩は當時裁縫の敎授となり、明治十二年以來、二十二年の久しきに渉りたるか、今回老朽職に堪へずとて、辭職せしかば同町有志者は、深く同人の忠篤にして、子女の爲め稗益する處尠なからざるを感じ、此程若干の慰勞金を贈與したりと。
苟くも、職をさゝぐる者、誰もかくあらまほしきものなり。

●●●●●●出雲の貞婦　島根縣鹿足郡津和野町、大字中座村、神原男八の二女りふといふは、十九の歲の時同町大字森店屋西田直吉方に嫁し、一子を設けたるが、夫直吉は、去る二十六年十二月健氣にも、海軍志願兵となり、父や妻子を殘し、故郷を出發しけるが、家元より裕かならず、加ふるに父は頗る弱体にて步行も六ヶ敷ければ、生計の資も思ふ程は得られざるを、殘れるりうは、日々製糸工場に通勤し、夜は必至と縫物等をなして生計の資を得、父子を養くむこと、殆んど十年一日の如く、只管一子の成長を祈り、貞節を樂しみて、日を送りければ、近隣の人々は、何れもほめたゝへぬはなく、一日も早く直吉の歸れかしと念じ居たるが、本年十二月は滿期なりとて、我れ人指屈り數へ、殊にりうは、無事の歸りを祈る事、一入切なりしに、不幸病魔の侵す所となり、藥石効なく、死去しける由なるに、りうは彼方の天を仰ぎ、泣

き、悲めども、軍人の妻たるものに、未練はあるべからずと思ひ諦め、益々貞節を勵むより、見舞に赴けるもの、何も涙を流して、感じ入り、組內の者は、固より村內の有志者も、善行を表彰せんと、町役場に願ひしも、如何なる都合か、その儘となり居るを、有志は遺憾に思ひ、互に醵金して善行を表彰せんと、計畫しつゝありと。あはれ有志の諸子、永遠に貞婦をいたはり、以て表彰の勞を惜むなかれ、是れ又善の一端なり。

●●●●小使の特志　京都療病院の小使、小泉彌三郎といふは、其子彌太郎が、二十七八年の戰役に出征の員に加はりて、清國に渡り、歸朝後、臺灣に赴きたるに、同地の土匪に襲はれて負傷し、同地野戰病院に入院して、治療を受けしも、其甲斐なく、遂に死亡するに至りしが、彌太郎は、死に臨みて、身不肖なれども、幸ひに軍人の列に加はり、遂に今日の死を致すは、何より幸とする處なるが不肖　死後、父上には、赤十字社に入りて、報國恤兵の志を表せられたし。是れ兒が願ひなりと、懇々遺言し越したるに依り、直ちに入社せんと思ひしかど、彌三郎は何分小使の身の上なればとて遠慮なし居りしが、斯くては息の本意に背くものなればとて、先ごろ意を決して、正社員に加盟したき旨、京都支部へ申込たりといふ。亦是れ特志の一人なるかな。

●●●●●感ずべき少女　神奈川縣川崎町、雜貨商中川平五郎の三女ときは、幼少より學を好み、去る明治二十六年四月同町の小學校に入りしより、爾來八ヶ年、如何なる風雨の日にても、一日も休校せし事なかりしが、勉學の効空しからず、試驗每に優等賞を得て、去る三月小學全科を卒業したり。同女は、學業優等にして、品行端正なるのみなら

ず、裁縫其他の手藝にも熟達し、昨年戸塚に開かれし、同縣教育品展覧會に出品せし、手藝品の如きは、一般の好評を博し、今尚は縣廳に保存しありといふ。されば同校にては、他生徒一般の龜鑑なりとて、特に同女に賞與を附與したりと。學校生徒たる諸媛よ、とき女に、はぢざらん様、切につとめ玉へかし。

○敎への種々

●●●●●●●●●女子高等敎員の缺乏　近來各地方に於て、高等女學校を始め、女子尋常師範學校新設の數著るく增加せるの結果、今や女子高等敎員の缺乏を來たし、實地敎育上大に困難を極め居る實況なるが、今回卒業せし女子高等師範學校の卒業生の如き、最早、夫々就職となりて。一名も殘り居る者もなく而して、五六名の申込の地方に對し、僅かに一名、十名以上申込の地方に、漸く二名位を割付たるが如き、現況なりと云ふ。

●●●●●●●●學生身體檢査に關する通牒　文部省學校衛生課に於て、調査する全國各學校學生々徒、及兒童の身体檢査統計は、敎育上の施設を定むる、基礎となるものなるに、檢査の任に當る學校、醫にも、未だ熟練の足らざるもの多く、不充分の點少なからず。特に、脊柱体格の兩項は、檢査上の判定、區々にして、事實上信ずべからざるものも、少なからざるに付、本年四月の定期檢査よりは、成るべく正確にして、且統一せるものを得んことを期し、今般同省より、直轄學校長、及地方長官へ、左の如き通牒を發したりと聞く。

明治三十三年文部省令第四號學生々徒身体檢査規定第五條第六號及第七號の事項は左の方法並

に標準に依りて検査すべし。
一脊柱に於ける左右の彎曲は背面より屈曲は側面より撿査すべし。
左彎、右彎及後屈の名稱は胸椎部位凸側の方向によりて定むべし。
一体格に於ける强健、中等、薄弱は概ね左の標準に依るべし。
强健は發育、營養共に佳良にして强壮なる者
中等は少くも發育營養中等にして持久性の疾患なき者。
薄弱は、前二項に該當せざる者。

○侯爵山内家婚禮式

石井泰次郎

伏見宮姫君殿下、侯爵山内家へ御降嫁の趣は、前號に記せり、この篇は、山内家に於ける、婚儀諸禮擔任者、石井泰次郎氏の自ら記したるものにして、本社に寄せたるもの、先頃、既に讀賣子にも、掲られたる處なれど、同氏の好意默し難く、且心得置べき事なれば、此の欄に出す事とはなしぬ、讀者之れを諒せよ。(記者)

臣民、禮節の一の技藝のやうに成りて、世上に敎へ傳ふる事の流行そめし、足利の頃より、其の源をしめて、時の將軍の師範として、其の事業に預りし、伊勢の守が家の禮節の流を、漸くにせき留めたるかひもなく、世上は德川の時に流行そめし、小笠原の流をのみ汲て、其の流の源をかへり見ざるは、いとをかしき事、いとくちをしき事なり。こは表面上の樣にして、裏面上は、其の支流のあやしくけがれたるを知りて、其の源を尋ねて、細くわづかに殘れるひとすぢを、つぐやうに今はなりにけり。其の一例とにはあらねど、このたびの、御

みあひの式の端をものして、心あひの人々に、つげきこえんとはすなり。山内家にては伊勢流を用ゐられし事　土佐の國人に、禮節ならふ女ありしが、其所にては、伊勢の流を、専に傳へ行はるゝよし語りぬ、さてはとて其家の舊記と覺えらるゝ、一つの書を、或人にかりて見るに初より終りまで、一貫に伊勢流もて調べられし様なり。其様は、初に年月をあげて、次行に、

君公御婚禮
神供並御饗膳圖式

と記し、次に、

御床飾並神供配當畧圖
姫折　一合　二重折　一合　天井折　一合　瓶子　二口
置鳥　二枝　置鯉　二喉　御手掛居置など、印を其所其所に附したり。

其の次丁に姫折の圖をあげたり。二重の龜甲だいにして、小海老、鹽鯛、巻鯣を高く盛て、六面に梅、椿などの造花をさし、上に若松に、蜻蛉龜足をさし、金銀水引を結ぶ。

姫折　一合　白木白粉を以て、雲鶴松竹を畫
小海老　鹽鯛　巻鯣　以上三種段盛
龜足　刺花　糸造花

と記したり。次丁には、二重折の圖をあげたり。

二重折　一合　白木雲鶴松竹畫也
餅五方盛　青黄赤白黒　盛留　梨護　橘糸
造花水引にて結之

次に天井折をあげたり。

天井折　一合　白木白粉を以て、雲鶴松竹畫也
七種段盛　八重生　小豆　黒豆　黄豆　青豆
豌豆　銀豆

鐶足　指花　糸造花

次には、瓶子の圖を示せり。

瓶子一雙　銀　白木臺

菱形銀紙裏紅

次丁に、置鳥の圖あり。

置鳥　二枝　白木臺折敷　雉　雌雄　蘘荷糸造

花

次丁に、置鯉

置鯉　二喉　白木臺折敷　鯉　二尾　蘘荷糸造

花

次丁に、

燈臺一對　白木　油火　土器二重上に薄板一枚置

之

右、以上神供也、御神の間、御床前打敷上供

之、御打敷表　白平絹、裏紅平絹、長一丈二尺

たか量の定幅絹二幅、廻指貫紅絲、平組四角露

結垂、長六寸五分、

次丁に、

御箸初臺　白木

祝之間、御床脇据置、此度御手掛被爲略被用

之、

次丁には、御饗膳之次第を記せり。

一番　御三ッ酒杯、御滴入　御長柄銚子、御提

柄銚子

二番　御雜煮、御副酒肴羹、御酒杯、御滴入、

御長柄銚子、御提柄銚子

三番　饗御膳、御湯、御酒杯、御一ッ物(鮒)、

御長柄銚子、御提柄銚子、後の御湯、五種御菓

子

四番　御色直　御祝御三ッ酒杯、御滴入、長柄

御銚子　提柄御銚子

五番　常御膳出

千秋萬歳

次に、其一番より、次第に圖をあげたり。

一番、御三ッ酒杯、（式三献被爲略之 三ッ盃被用之）御足打白木、以下同し、かく記して、足打の向に、打鮑三本、包みたるを置き、前の方に、三ッ酒杯をかさねたり。向と前の間に、左右に、梅干五ッと、海月一杯とを盛り、前の左右より、少し手前によせて、鹽とはじかみを盛り、三ッ酒杯より手前に耳かはらけに、箸を置きたる圖あり。次に、御酒入カンナカケ二据の圖あり。次に、長柄御銚子銀、提柄御銚子銀の圖あり。蝶形銀紙、裏紅松山 橘 糸造花、すべて、四條大草流の調方あり。

次に、二番御雑煑（是初献也此度二献目以下御献數略之直進雑煑）と記したり、足打の向の方に、左、五種、右燒鳥をおき、手前に雑煑をおく、盛様は芋、鰹、鮑、餅、海鼠、御汁垂味噌也とあるにて知るべし。又手前に耳かはらけはしあり。（以下次號）

●大日本婦人聯合會の機關　同會の、鳩山、濱尾、潮田、山脇、三輪田、下田の各婦人連名にて、今回婦女新聞を以て、同會の機關と爲す事に決定したりと聞く望むらくは、各女史の健全あらん事をいのる。

○社界片々

●篤志看護婦人會　同會は、昨年末以來、益々盛大に赴きしを以て、先月より會場を甲乙に分ち甲は澁谷病院、乙は赤十字社にて開會することとありて、去る六日は同社にて開會、小松大宮妃殿下、同若宮妃殿下、北白川宮妃殿下、華頂宮妃殿下の御臨席あり、會員にては、毛利公爵夫人、鍋島公爵夫人、田中子爵夫人、花房男爵夫人、松平男爵夫人、櫻井子爵夫人を始め、五十餘名出席

し、山上講師の看護法講話、及び、繃帶術の稽古等をなして、午後四時散會せりと、いとも高貴にまします方々の、かくまで、御心を用ゐさせ玉ふ吾人感謝に堪へざるなり。

○山内家の慶事

伏見宮貞愛親王御息女、禎子女王殿下(御十七)には、御豫定の如く、去る六日の黄道吉日を以て、目出度山内侯爵家に、御入輿相成りたり。其模様を記し奉らんに、午前九時、御息女殿下には、多く古禮に據らせられ、御髮は、丈長く垂れ、蘇芳二重織龜甲の地紋に、白青の向鶴菱の丸紋を置きたる、御桂衣に、深紅の御袴を召され、檜扇(表は雲に梅、竹流水、裏は雲に蝶鳥を畫き、紅白の梅花と、松葉を絹糸にて作れる飾と、白、赤、青、黄、紫、紅梅六色の、絹紐を付したる者、靴等の御服裝にて、御祖先へ御告別の爲め、御靈前參拜の式あり、畢て御正殿に於て、御父宮、貞愛親王、御母利子殿下、御兄宮邦芳王殿下と、御別れの爲め、御三献の式あり、引續き御對面所に於て、眞木別當夫妻、御牧家令夫妻、其他に御盃を賜り、同十時と申に、早くも御媒妁代、眞木別當、御媒妁は、佐々木伯夫妻、なれども、同伯親戚に喪中の者ありたるに付、御遠慮申上げ、當日眞木別當代理せしなり)山内家家令萩原、家從佐田等、御殿に參候したるを以て、之れを御客間に延き、女王殿下には、御父宮、御母宮、御兄宮各殿下と、御同列、御對面、御祝酒、幷に御祝儀を賜りたり、同十一時諸般御準備整ひたれば、女王殿下には、多くの侍女に奉迎せられ、今度畏き邊りより、恩賜せられたる、美麗なる御馬車に召れ、眞木別當夫人、陪乘御出門、佐田、山内家、家從騎馬にて先驅、次に、儀仗として附せられたる、

近衛騎兵半小隊、次に御輿、次に眞木別當、御牧家令、萩原山内家、家令(何れも馬車)次に、儀仗、近衛騎兵半小隊の行列を以て、宮御本邸表門より、右手、交番脇の坂を上り、左手、麹町五丁目横町左手、麹町通り左手、山内邸に入らせられたり。而して、山内邸にては、朝來內外の準備を整へ、掛りの人々、何れも正裝の上、御入輿を待ち奉りたるに、同二十分に着輿ありければ、奥向侍女、家職の人々、玄關に奉迎し、松岡止波子の御先導にて、先づ御化粧室に入らせられ、此に御服裝を改めさせられし、暫時御休憩、同五十分山内家親戚の人々に拜謁を賜り、正午廣間に於て嚴かに當日の儀式を擧げられ、午後零時五十分を以て全く其式を結ばれたりといふ。

●・・・御婿入式　伏見宮禎子女王殿下御降嫁、山内侯爵家の慶事の次第は、茲にしるしまつりしが、御豫定の如く去る八日午後三時より、麹町區紀尾井町なる、伏見宮御本邸にて、御婿入式を行はせられたり、今其御摸樣をきゝまつるに、當日同宮御本邸にては、朝來內外の御飾裝、御整頓、眞木別當夫妻を始め、家令家從何れも正裝にて、御婿並に奥方の御入來を、待ち奉りしに、同四時の時辰を報ずるころ、山内侯爵は、侯爵夫人禎子の方と、御馬車にのり、家令夫妻、田中家扶、各家從、御同乘御參着、御車寄にて奉迎し、御牧家令夫妻、御先導にて、御客間に案內、暫時御休憩後、御祝儀として、長熨斗の三寳を進め畢て、御二方に茶菓を進め、御父貞愛、御母利子兩殿下、階上婦人室に御出座、同室にて御婿並に奥方は、兩殿下に御對面遊ばされ、引續き御祝儀、長熨斗三寳を進められ畢て御牧家令進て、侯爵家よりの御土產品を披露し、女中は、兩殿下幷に御二方の

前に、御献立を捧げ、御三献の式あり。眞木別當は、兩殿下より賜はる、御引出物を進められ、此に當日の、御式を終らせられ、山内侯爵、再び階下の御客間に退下、同五時より、華頂宮同妃兩殿下を始め奉り、侯爵家親族佐竹悦子、三條恒子、山内豐尹、同夫人、山内光子、山内豐中、山内壽子、山内豐政、同夫人、佐々木高行、同夫人山内家家令諸氏は、順次宮御邸に參候し、家令家扶の案内に依り、御客間に入り、茶菓の御饗應を受け畢て、兩殿下に御對面御餘興として、數番の能仕舞あり、同六時より、御晩餐會を開かせられ同夜八時過ぎ、御開きと相成りたり、當日の御土産品、御引出物は、山内侯よりの品、鮮鯛一臺、一樽、一荷、と貞愛親王殿下へ、狩野永信筆、三幅對軸を始め、夫々御土産目錄あり、又伏見宮より、御引出物は、勝男節一臺、陸軍騎兵補習科、正裝馬具一領ありしと、承はれり。

次號豫告

櫻花爛熳たる時を以て、**櫻花爛熳**の圖を諸媛に呈して、妍を競はしめんと欲し、特に、畫伯岡倉秋水氏を勞したり。而して、其の技、神に入り、其の筆眞に逼りたるが、却りて、石版師をして短時日に刻する事能はざらしめ、遂に、之を次號に廻すことの、やむを得ざるに至れり。其の畫の高妙精緻にして、雅趣溺すべく、如何に、誌上に、無限の光輝を發つべきかは、記者の辯ずるを好まざる所なり。其の他、家政欄に於ては、武谷水城氏に**家内衞生**の起稿を托し學藝欄に於ては、磯部武者五郎氏に、**家計簿記**の起稿を托したり。此の二氏は、共に斯道の先達なれば如何に有益なる知識を、諸媛に得しむ可きかは、乞ふ之を次號以下に待ち玉へかし。

女鑑歌文月次兼題

五月五日分

歌　苗代

文　病氣全快を祝する文（妹の）

右四月廿五日〆切

五月廿日分

歌　郭公をまつ

文　海外の友に書籍を贈る文

右五月九日〆切

六月五日分

歌　月前橘

文　節儉の說

右五月廿四日〆切

六月廿日分

歌　旅中梅雨

文　某瀑布に遊ぶ記

右六月九日〆切

●女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

題　　住所　姓名
………………
………………
………………
………………

用紙は半紙半截の事。一題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題　　住所　姓名
……、……、……。
……。……、……。
……、……、……。
……、……、……。

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。

○總て書式に違ひたるは沒書とす。

○女子は、なにひとにても、隨意に投稿することを得。

華族女學校講師
女子高等師範學校講師　奥好義先生撰曲
宮内省御歌所録事　加藤義清先生作歌



上製大和綴定價二拾錢
並製定價拾五錢
郵送料ヲ要セズ

（一名運動唱歌）華族女學校女子高等師範學校唱歌用書

本書は方舞唱歌の嚆矢にしてアメリカン、クヮドリルに我が歌詞を附けたるものなり撰曲者は御製金剛石の作曲者として名譽高き斯道の大家にして附する所の四季及び祝の歌詞は兒女の謳謡に適する樣に意を用ひたれば各女學校の唱歌用書として恰適の良書たるの評を得たり又卷末には方舞略譜を附録としたれば以て舞踏の一班を學ぶを得べし各歌詞毎に優美なる木版畫を挿み卷帙の美は世未だ之に比すべきものなし

賣捌所

東京日本橋區橋町一丁目　松榮堂
東京日本橋區通三丁目　林平次郎
大阪市東區備後町　吉岡平助
東京神田區表神保町　東京堂
東京新橋竹川町　共益商社
大阪心齋橋筋二丁目　松村書店
東京神田區表神保町　中西屋
東京京橋區　十字屋
名古屋市本町　川瀬代助

山崎忠和著

新版發賣廣告

（彩色精版口繪並に插畫）

定價　金貳拾八錢

郵税　金六錢

文久物語　全

一名　寺田屋騒動

寺田屋騒動の名は維新史中の**悲劇**として世人之を知るも其眞事實に至つては今猶**秘密**の間に伏在せり此書當年の事蹟を記すると極めて精確にして**隱微**を**發**き**秘密**を**明**かにし奇傑田中河内が同志清川八郎と僞錦旗の下に天下の大諸侯を飜弄したる機變百出の壯圖を始めとし其間島津久光眞木和泉西郷隆盛等諸豪の活躍するあり正に是れ**維新史中**の**花**として**絕快絕慘**を極むるの狀髣髴として目睹するが如くあらん而して此の書の結構は脚本に傚ひ文章は平易流暢にして插むに繪畫數葉を以てし製本亦清麗なれば以て案上の珍と爲すに足る

發行所

東京市橋區築地二丁目廿一番地

株式合社　國光社

（特電話新橋八十八番）

女鑑

明治廿五年三月十二日
第三種郵便物認可

毎月二回五日廿日發行
第貳百貳拾七號

明治三十四年
四月廿日發行

東京[illegible]地[illegible]丁目株式會社國光社印刷部印刷